
猫とアリスと45口径のメルヘン

べあねこ18号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫とアリスと45口径のメルヘン

【Nコード】

N5520J

【作者名】

べあねこ18号

【あらすじ】

16になったアリスが訪れたのは、なんと21世紀のドイツ！？
チエシヤ猫がパパになってるわグリム童話の登場人物が乱入して来るわでもう大変！

…ドイツ人の絵本作家青年宅に迷い込んだアリス。ドイツでの新たな出会いを経て成長していく彼女に、何故かグリム童話の悪役達かなりマシモードの魔の手が迫る！実は、現実と物語の間では、密かに残酷な戦争が始まるうとしていた…。

ルイス・キャロルの《不思議の国のアリス》と、グリム兄弟により
収集された《グリム童話集》。2つの名作が火花を散らす暴走劇！！

果たして猫とアリスは、大切な者を守りきる事が出来るのか？

実は本格ダークファンタジーです！

初めのウチは話がわかりにくいかもしれませんが、これからどんどん面白
くなるように頑張りますっ！

どうかお楽しみ下さい

序章・幻想曲

1284年、ドイツ。

北西のとある街で発生した児童大量誘拐事件。

犯人の素性。目的。

そして消えた130人の幼い子供達の行方。

未だ解明されぬ多くの謎を孕んだまま、この奇妙な事件は歴史上に名を刻み

る。700年が経過した今現在にまで語り継がれる事となる。

其の真意を知らぬ儘。

『あなたは物語が好きですか？』

Die Marckensammlung
Der Brüder Grimm
K:H:M

4

Wonderland Alice's Adventure in
&app
Through the Looking Glass,
and What Alice Found There
berwick
ja

killing and, Abnormal Criminals
commonsense.

< Der BilderbuchWriter

「誰もが幸せで、優しい気持ちになれる。」

「僕はそんな本が書きたいんだ。」

< The Alice

「敵が無い、って書いて無敵。」

「だったらみんなみんな友達だよね！でしょ？」

< The CheshireCat

「一応忠告はしておくがね、」

「理屈ほど値打ちの無い代物も珍しいんだよ？」

< Der Bundeswehr

「くだらん。」

「劣等がどう足掻こうと結果は変わりませんよ。
貴様等が減びて総て終わりだ」

< Der Wolf

「腹減ツタ腹減ツタ腹減ツタ腹減ツタアア!

aaaaアアアア”ア”ツソノ身体、喰ワセロオオ

oooooooo!!!」

< Die Kniigin

「じきに時が満ちて、二つの世界は一つとなる。

民よ、妾と共に自由の訪れを祝おうではないか。」

<、???????

「…ねえ、私の可愛い*****。ずっと待ってたんだよ?

…もう離さない。

あなたは、私のモノなんだから…。」

and、

< The most important risk factor

「神に仏に論理的思考でオマケに社会的規範?

くだらん、くだばれ!!! 俺にルールなんか必要ねえよ

!?!」

愛も勇気も正義も冒険しまくって、困った時だけ有効的に神頼み!

人生なんてそんなもんでいい。
他人に遠慮なんていりません。欲しいモノだけ狙い続けて
何をしてでも手に入れる。

気に入らなけりゃ捨てればいい。

楯突く奴は殺せばいい。ム力つく野郎は公開拷問。
死んで楽になんかさせないよ

…そんなもって、好きな娘には出来れば笑っていて欲しい。

土砂降りみたいにワンワン泣いて、嬉しくなると愛らしく笑
って、

恥ずかしがる時に見せる、困ったような紅らんだ顔。

全部全部大好きだから。

君が丸ごと愛しいから。

笑って欲しけりゃ笑わせてみせよう。

難しいかもしれないけど、別に出来ない事じゃないもの

ね。

、はれそ――――

決して出会う筈のなかった、

二つの世界、+1。

そこで起こった、可憐にして残酷なる《物語》。

愚かな役者共の手によって、幾度となく繰り返される。

其れ即ち、運命への蜂起なり。

――愛されるべくして生まれしもの。

――死すべくして生まれしもの。

――将又、殺す為だけに作り出された、哀れな道化達。

まあ、其れ等が何を為さんとして舞台上上がるかは、御観覧の皆様のお好きな様に解釈して下さいませよう。

最高最美にして最兇最悪の演目にて御贈り致す、空前絶後の暴走劇にて御座います。

……観客が揃った今、じきに幕も上がる事でしょう。

では、じゅるりと御観覧為さいませ……。

序章・幻想曲（ケータイ版（前書き））

ケータイの方はこちらから↓

奇妙な歌劇が皆様をお迎え申し上げます。
それではどうぞー！！

序章・幻想曲（ケータイ版）

1284年、ドイツ。

北西のとある街で発生した、児童大量誘拐事件。

犯人の素性。目的。

そして消えた130人の幼い子供達の行方。

未だ解明されぬ多くの謎を孕んだまま、この奇妙な事件は歴史上に名を刻み…

700年が経過した今現在にまで語り継がれる事となる。

其の真意を知らぬ儘。

『あなたは物語が好き
ですか？』

Die Marchensammlung Der Brüder
Grimm

《Alice's Adventure in Wonderland》
& amp;

《Through the Looking-Glass, and
What Alice Found There》

《Jabberwocky》

and, Abnormal Criminals killing
common sense.

<Der BilderbuchWriter「誰もが幸せで、
優しい気持ちになれる。」

僕はそんな本が書きたいんだ。」

<The Alice

「敵が無い、つて書いて無敵。

だったらみんなみんな友達だよね!でしょ?」

< The Cheshire Cat

「一応忠告はしておくがね、

理屈ほど値打ちの無い代物も珍しいんだよ?」

< Der Bundeswehr

「くだらん。

劣等がどう足掻こうと結果は変わりませんよ。

貴様等が滅びて総て終わりだ」

< Der Wolf

「腹減ツタ腹減ツタ腹減ツタ腹減ツタ腹減ツタアアア!

aaaaアアアア”ア”ツソノ身体、喰ワセロオオoooooooo

!!!!」

< Die Kigin

「じきに時が満ちて、二つの世界は一つとなる。民よ、妾と共に自由の訪れを祝おうではないか」

< , ??????

「…ねえ、私の可愛い*****。ずっと待ってたんだよ?

…もう離さない。

あなたは、私のモノなんだから…。」

and ,

< The most important risk fac

t o r

「神に仏に論理的思考でオマケに社会的規範？
くだらん、くだばれ！！ 俺にルールなんか必要ねえよ！！」

愛も勇気も正義も冒険しまくって、困った時だけ有効的に神頼み！
人生なんてそんなもんでいい。
他人に遠慮なんていりません。
欲しいモノだけ狙い続けて何をしてでも手に入れる。

気に入らなけりゃ捨てればいい。
楯突く奴は殺せばいい。ム力つく野郎は公開拷問。
死んで楽になんかせさないよ

…そんでもって、好きな娘には出来れば笑っていて欲しい。
土砂降りみたいにワンワン泣いて、嬉しくなると愛らしく笑って、
恥ずかしがる時に見せる、困ったような紅らんだ顔。

全部全部大好きだから。
君が丸ごと愛しいから。

笑って欲しけりゃ笑わせてみせよう。

難しいかもしれないけど、別に出来ない事じゃないものね。

。はれ — — — — — — — — — —

そ

決して出会う筈のなかった、二つの世界、+1。

そこで起こった、可憐にして残酷なる《物語》。

愚かな役者共の手によって、幾度となく繰り返される。
其れ即ち、運命への蜂起なり。

愛されるべくして生まれしもの。

死すべくして生まれしもの。

将又、殺す為だけに創り出された、哀れな道化達。

まあ、其れ等が何を為さんとして舞台上上がるかは、
御観覧の皆様のお好きな様に解釈して下さいませよう。

最高最美にして最兇最悪の演目にて御贈り致す、空前絶後の暴走劇
にて御座います。

……観客が揃った今、じきに幕も上がる事でしょう。

では、ごゆるりと御観覧為さいませ……。

猫とアリスと、

45口径のメルヘン。

- O v e r t u r e -

オーベルテューレ

‡【Die Phantasie】‡

ディエ・ファンタズィア

第26話 はじめまして。(前書き)

……にゃんこを抱く夢をみた。

はい、あいかわらずネコ大好きです。

このあいだも町中で出会ったネコの写真を友達に見せてたら、

「あ、このネコ知ってる！」

っていう人がいたりして……

ネコでつながるコミュニティ。

素敵じゃありませんか。

とまあ無駄話はさておき本編へGO〜！

第26話 はじめまして。

(……誰?)

ふかふかのベッドの上で目覚めた時、あたしはまずそう思った。
寝起き一番で目にしたものが、見た事もないアッシュの瞳だったか
らだ。

(……この人、だれだっけ?)

眠い頭でぼんやりと考えてみる。

(寝ぼけて思い出せないだけだよ……うん、人間って寝起きだと
夢と現実がごっちゃになってるって言うし、きっと良く知ってる人
だけど今だけ記憶があいまいになってるんだ……うん、きっとそう。
たぶんそう。)

そう自分にいい聞かせながら、くしくしと目を擦って、
さっきの瞳をもう一度見つめてみた。

(……あ、やっぱり知らない人だ)

だんだん目が覚めてくる。

だんだん状況も分かってきた。

(……ここ、ドコですか?)

よく見たら自分の部屋じゃないし。

明らかに初対面のお兄さんお姉さんがこっちを凝視してる。

もしかしたら、まだ夢の中?

あゝきつとそうだ。じゃあもう一回寝てみよ。

今度起きた時には自分の部屋に戻ってるかも知れないし。

(…というわけで、おやすみなさい……。)

そんなこんなで、あたしはもういっかい目をつぶった。

一時間後。

「まさか二度寝されるとはねえ……」

ベッドの傍らで、アリスの寝顔を見つめる少女が一人。
日本から来た留学生、綾崎麗奈である。

「それにしても、なんとも可愛らしいスヤスヤ顔ですなあ」
あどけないアリスの寝顔に、彼女はニヤニヤしっぱなしだった。

一方、別の部屋では……

「おい……どういっつもりなんだ」

フランツは、電話越しの相手に向かってかなりご立腹のようだ。
いつもの温厚な性格はどこへやら、今回ばかりは本気で焦っていた。

帰宅してみたらベッドに知らない女の子が寝てたんだからそりゃ驚
きだろう。

あの童話「三匹のクマ」に出てくるクマ達の心情はだいたいこんな
カンジだったのだろうか？

「あの娘は誰だよ!？」
「っていかどつから連れてきて……は？」
道に落っこちてたから拾ったって……いやいやダメだからそれ誘拐だ
から!」

電話の相手がよほどのクセ者なのか、フランツはいまにもショート
寸前といった様子だった。

「だいたいなんでウチなんだよ!?
まず警察に届けるでしょ普通……いや面倒くさいとかダメだし。
そういう言い訳は通用しませんし。
お願いだからもう少し大人になつてください……」

今度は半泣きになる。

でもそこは大人のお兄ちゃん。

グツと涙を堪えると、大きく息を吐いた。

「……あゝもう、わかった。

あとはこっちでなんとかするから……」

うん。

…そう、あんまり無茶な事ばっかするなよ?

レナが心配するから……」

咳くように言い残して、受話器を置く。

呆れてうんざりしたような声色の会話。

だが…彼の顔には、どこか懐かしむような、やわらかな色が浮かんでいた。

そしてフランクは電話口を後にする。

寝室の前に立つと、大きな音をたてないようにと、ゆっくりドアを開いた。

それに気づいて、ベッドの横にいた麗奈が振り返る。

「……まだ寝てる？」

寝室の中を覗き込み、彼は静かに尋ねた。

「……グツスリだよ……」

彼女も囁き声で返事をした。

麗奈の隣に立って、フランクは改めて少女の顔を眺めてみる。
見たところ、歳は14、5才といったところだろうか。

まだあどけない容顔だが、長く伸びた髪は芸術的なまでの美しさを
持っていた。

幼いながらに美しい。

そんな風に思えたのは、単に見た目がキレイだとかいう理由ではな
くて……

フランクにとって、なぜだかその娘がとても尊い存在に思えたから
なのかもしれない。

「いや、尊い存在と”重なった”と言うべきか。

(背の高さも、ちょうどこのくらいで……)

そんな考えが頭によぎったが、フランクはすぐにそれを掻き消した。

「……どうかした？」

不思議そうに尋ねる麗奈に、彼は静かに返した。

「なんでもないよ…」

あゝ、それにしてもまいったな。

この娘が目覚まし次第、家に送り返さないと…
親御さんが心配してるだろうし」

「だね…」

つてかこの娘、結局どこから拾ってきたんだって？」

「…あいつは道に落ちてたとか言ってたけど」

眉をひそめて言うと、麗奈はひどく驚いたようだった。

「み、道？」

落ちてたつて…それ倒れてたつて事でしょ!?!?
なになにひよつとして家出少女?それともなんかの事件に巻き込まれたとかじゃ…!」

「ちよ、ちよつとレナ声大きい…」

『ふあああああ。』

「あ」

「…起きちゃったわね」

二人が見守る中、少女はゆっくりと体を起こして伸びをした。

眠そうに目を擦ると、部屋の中をゆっくり見渡す。

部屋の右隅から左隅まで、首をひねってぐるりと眺めると、彼女は碧い目をぱちくりさせた。

確かめるようにもう一度部屋を見渡し、今度はフランツと麗奈をしげしげと眺め始めた。

「あ、あの…ね」

まだ半分寝ぼけている様子の少女にフランツが恐る恐る声をかける。

「いきなりで悪いんだけど、名前と電話番号教えてくれるかな？
お家に電話かけて、ご両親に迎えにきて貰わな…」

『……@ *-----!..?』

「…えっ!..?」

フランツと麗奈は驚いてひっくり返りそうになった。

突然少女が早口で叫び始めたからだ。

「な、ななななんか言ってる…けど、あの〜コトバ通じてますか？通じてないわよね絶対！」

少女の声だけでもかなり大きいのに、麗奈までパニックって騒ぎ始めた。

「ど、どうすんのフランス？」

この娘外人さんじゃん日本人のあたしに英語ドイツ語だけでなくまだ勉強しろっていうのは少しばかり酷なのではないでしょうか？」

「いやいや落ち着いてようるぞ……」

…英語？」

急にフランスの顔が明るくなる。

「ねえレナ」

「ななななに？」

この娘がドコの国の人か分かったの？」

「いや、これ英語だよ」

「…英語？」

大人しくなった麗奈を見て、彼は頷く。

「早口だったしイキナリだから分からなかったただけだよ。
ほら、よく聞いてみれば…」

そう言われてみれば、まったく理解出来ないほどでもない。
麗奈は落ち着いて、少女の言っている事に耳を傾けてみた。

「……ど、どうしょ…」

クスリどつかにいつちやった…!

なんで?ちゃんと首から下げてたハズなのに…
ない、ないよあ………」

少女は目に涙を溜めて、ベッドの上で何かを探しまわっているよう
だった。

「…薬っていつてるけど、

レナずっとこの部屋にいたでしょ?見てない?」

「…うん……あ。」

「心当たりあるの?」

フランスツが聞くと、レナはバツの悪そうな顔をして、

「ごめん、

中身がこぼれたらヤバいかな〜とか思っ
て、あたしが取つといたんだっ
た!」

「……返しなさい」

「あつ!

ちよ、ちよつと〜叩かなくてもいいじゃんっ
」

小突かれた頭をさすりながら、麗奈がジャケットのポケットに手を入
れる。

中から取り出したのは、透明な液体が入った小瓶だった。

「えと…英語で話しかけないといけないんだよね……」

一応勉強はしていたが、大学に入って以来それほど付き合いのない
英会話。

必死に記憶を引っ張りだしながら、麗奈は少女に話しかけた。

「え、え〜と……」

Sorry I don't know this
is so important a medicine .
(ごめんね? 大事な薬だったなんて知らなくて)」

(う〜ぎこちないよ〜！
ドイツ語ばっか使ってたからイングリッシュなんてあんまり思い出
せないし……)

もう冷や汗たらたらたらの麗奈。

ところが、少女は麗奈が小瓶を差し出したのを見ると…

「……あぁっ！それクスリの瓶！」

一気に笑顔になって飛びついてきた。

「わわっ

ちょ、いきなりのハグ！」

「よかつたぁ…

ありがとう！お姉さんが見つけてくれたんだね」

少女に抱きつかれたまま、硬直する麗奈。

しばらくしてから、彼女はおもむろにフランクツを見た。

「……フランクツ」

「なに？」

「どうしたのレナ？」

「……………今なら死んでもいい……………／／／／／／」

「……………勝手にござぞ」

第26話 はじめまして。(後書き)

麗奈の喋ってる英語は適当です。

作者が馬鹿なんじゃないよ、あくまでレナが適当に言ってるだけだから！

外国で暮らしてる人って、自分の母国語を忘れてたりしないんでしょか？

ボクなら絶対忘れる。

そもそも他国語を習得できるほどのスペックを持ち合わせてないし。

そのへん言っと、ネコって違う国のネコと会話できるのかなあ？

ネコ語は万国共通なの？

友達に聞いたら「ネコはもういい」って言われました。

第2話 見えざる未来（前書き）

初めてだから結構ムズかしいです、ハイ。
編集とか……（ ; ）

第2話 見えざる未来

屋敷では、いつものように和やかな時間が流れていた。

使用人達がせわしなく動き回り、台所からは夕食のいい匂いが漂っている。

「…うゝむ、今日もごちそうの匂いだ。

セバスチャン、メイド達はパイを焼いたのか？」

リビングのソファアーの上に腰掛け、父親は執事に尋ねた。

「はい、旦那様。

今夜はアップルパイを焼いたそうです。」

「そうか。

アリスが喜ぶぞ！あの子はパイが大好きだから」

「…そう言えば、あの子少し遅いわね」

父親の向かい側に座っていた姉が、時計を見上げて言った。

「なに？

まだ帰ってきていないのか、もうこんな時間だぞ？遅くならないように言っておいたのに。」

「じゃあ私捜してきますね」

そう言って立ち上がる姉を、セバスチャンが引き止める。

「いえいえ、お嬢様はごゆつくりお休みになっ
ていて下さいませ。
お迎えにはこのセバスチャンめが」

「大丈夫よセバスチャン。ちよつとそこ
まで出かけるだけなんだ
から」

姉は執事に笑いかけると、急ぎ足で玄
関へ向かつていく。

「あああ、お嬢様？

お待ち下さい〜！」

（元気なようでセバスチャンももう年
ね。

髪も髭も随分白くなつたし。）

追ってくる執事の声聞きながら、姉は
クスリと笑つた。

（それにしてもアリスつたら、お母さん
の所に行くといつても中々
帰つてこないんだから…。）

小さく溜め息。

それから、姉は少し彼女達の母親の事
を思い返してみた。

長い胡桃色の髪。

背は低めで、いつまで経つてもどこか子
供っぽくってお話好きで…。
本当に優しくつた。

母親というだけじゃなくて、何だか友
達のような、姉さんのよう
な存在だつた。

母親が他界した事で家族が受けたショックは、とても口から言い表せたものではなかっただろう。でも、今はみんな立ち直った。とても上手くいっている。

過去に縛られるのではなく、未来へ向けて歩き出す事が出来たのは……きつとアリスのおかげだろう。

彼女の明るさが、一家を悲しみから救ってくれた。おかげで母を失ったことを受け入れる事が出来るようになったし、父親も昔のように元気な人になった。

（本当にどこか母さんに似てるのよね、あの子）

そう思うと、自然と笑みがこぼれる。

（見た目だけじゃなくて、性格も本当に母さん似で……空想好きな所とか）

彼女達の母親は、子供の頃はそれはもう凄い空想家だったそうだが、何でも、夢の中で壮大な冒険をしたんだとか。それも2回も。

本にしたら間違いないと売れるぞ、とお祖父さんは笑っていたらしい。

（アリスもおんなじように夢を見るのかしら？

ひょっとしたらね。なにせ名前まで同じなんだし……）

玄関の扉に手をかけた時だった。

「…………あれ…？」

…………ドアノブが二重に見える。

(変ね、何だか頭が…ぼおっと…………。)

途端に視界が揺らぐ。

彼女の世界は、突然グラリと崩れ落ちた。

(…え…………?)

何かが床に倒れる音がする。

それが自分である事に気付いた時、執事の声が耳に届いた。

「お嬢様…!？」

お嬢様っ!どうなさいましたっ?」

駆け寄ってくる足音。

口の中に、馴染みのない鉄の味が広がった。

(…何…これ…………?)

いや…前にも味わった事がある。

喉を締め付けられる様な、この味…。

「…エリス…？」

エリシア！？しっかりするんだ！誰か医者を、医者を呼んでくれっ
！！」

父親の声もする。

目の前にいるのに、とても遠くに聞こえる。

何か言いたい。

大丈夫だから、心配しないで。泣かないでと伝えたい。

なのに口から溢れたのは、言葉じゃなくて、鮮やかな赤い色。

…どうしよう。

私の所為で…またみんなに悲しい思いをさせてしまう。

「ごめ……な…さ…」

「喋ってはだめだ！

いいか、すぐに先生が来るから！無理をするんじゃないぞ…。

ああ何てことだエリシア、お前まで…こんなっ…。」

その時、ドアの開く音がした。

「ごめんなさいっ！

遅くなっちゃっ…た…。」

もう、この子が悲しむ顔なんて見たくないのに。

屋敷の中に少女の悲鳴が響く前に、姉は、静かに眠りについた。

—

第3話 曇り空

どれくらい経ったんだろう…。

アリスが体を起こすと、カーテン越しに朝日が射し込んでいた。

昨日は眠れないものとはかり思っていたのに…
小さな体では、眠気に勝つことさえ出来なかった。

悔しさと情けなさにシーツを握りしめて、アリスは、昨日の夜を
思い出す。

「…必要な処置は、一先ず無事に終わりました」

「エリシアは…娘は助かるんですか？」

パパが、お医者様にすがるように聞いた。

「今はまだ、どうなるとも言えません。危険な状態からは抜け出
せましたが、今後いつ症状が再発するか……」

パパもあたしも、陰で聞いていた使用人達も、一斉に肩を落とす
た。

元々、姉さんは昔から体が弱かったんだっけ。

あたしが小さい頃にもこんな事があったとか、昔聞いた気がする。

「お願いです先生、娘を…娘を助けて下さい！
もう…妻の二の舞には…」

いつの間にか、日は高く上っている。

顔を洗って、歯を磨いて、服を着替えて…

髪をとかしていると、部屋の外からパパの声がする。

「アリス？」

ちよっといいかい、お客さんなんだ」

…お客さん？

廊下に出てみたら、パパが立っていた。

すごく疲れた顔……。

きつと、朝まで姉さんに付きつきりだったんだ。

その隣に立っている男の人を、あたしは良く知ってる。

「ステイプじゃない！おはよう！」

「ああ、おはようアリス。」

「ステイプはエリスの見舞いに来てくれたんだ。私はこれから
医者先生のところに行かないといけなから、アリス、部屋に案内してあげなさい」

「うん、わかった。
いってらっしゃいパパ」

パパは帽子を被ると、玄関から出ていった。

姉さんの部屋は静だった。時間が止まったみたいにも何もかも動かない。

…ベッドの上の姉さんも。

「…昨日からずっと寝てるのかい？」

姉さんの寝顔を見つめて、ステイブが聞く。

「うん…ずっと寝てる」

ステイブは姉さんの幼なじみだ。つまりあたしの幼なじみということにもなる。姉さんとステイブはあたしが生まれるより前から、とっても仲良しだった。

「…ねえステイブ？」

「ん？」

「姉さんは小さい頃にも病気にかかったんだっけ」

あたしの方を見て、ステイブは首を傾げた。

「うん。」

確か…君が生まれてから一年だったかな？

今と全く同じだった。

2人で遊んでたら、いきなり血を吐いて…」

「…やっぱり血、吐いたんだ…」

口元を血まみれにして倒れてるのを見た時は、本気で気絶した。もう血なんて見たくない…。

「ああ…あれを見たら叫ばずにはいられないよ」

「ステイプも叫んだ？」

「そりゃまあ…天井が落ちる程に」

苦笑いをしながら、ステイプは姉さんに顔を近づけた。

「あの時からさ…医者になろうって決めてたんだ」

「え？ステイプが？」

初耳だよそんなの！

思わず驚いた声をだしたら、ステイプが振り返った。

「え…そんなに驚くほど意外？」

あたしはコクコクと頷く。

「あゝそっか、アリスの前ではそんな話した事なかったもんなあ」

また困ったように笑って、ステイプは姉さんの手をとった。

「医者はひとまず治った、って言ってたけど、本当に完治させるには今の医学じゃ力不足だったんだってさ。

俺はまたあんな事になったら嫌だったし……君達の母さんまで病気で亡くなった時、誓ったんだ。」

ステイブの体は少し奮えてるみたいだった。

「…ステイブ？」

「…絶対腕の立つ医者になって、お前の病氣直すって約束したのに……。ごめんな、間に合わなかったかも」

小さく呟くと、ステイブはゆっくりドアの方に向かっていく。

「あつ、待ってどこ行くの？」

「ああ、ちょっと大学にいつてくる。

先生達に、腕の良い医者を紹介して貰ってるんだ。君のお父さんも今頃必死に捜してるはずだよ。」

そう言つと、ステイブはゆっくりと部屋を出て行く…

寸前にあたしの体当たりをくらった。

「うぐっ!？」

「あつゴメン力入れすぎた!？
でもまだ帰らないでよステイブ!」

あたしはステイブの服を引っ張る。

「な…何やって…?」

「ねえステイブ、恋ってどんな感じ？」

「……………ええっ?」

ステイブの顔が少し紅くなった。

「いいいきなり何を!？」

「だって、姉さんとステイブってそういう関係なんでしょ？」

「…なっ／＼!？」

あは、今度は耳の先まで真っ赤だ。

「…な…何で知って…」

「バレバレだよみんな知ってるよ、っていつか姉さんは公認してたし」

「え…エリシア、バラしてたのか…」

紅くなった顔を手で覆って、ステイブはため息をついた。

「ねえ、恋ってどんな感じなの？」

「……いや、何でまたそんな事を？」

横目でコツチを見て、ステイブは恥ずかしそうに聞いてきた。

「…なんか、姉さんとステイブ見てたらさ。

あたしはそーゆうのまだわかんなくて…」

「……。」

えと…そうだな、何というか……、

一緒にいると安心する、ってというか…。

ドキドキするっていうか…」

「安心するのにドキドキするの？」

なんか変じゃない？」

「いやまあそうなんだけどさ…？」

あゝ、とにかく！

守りたかったり守られたかったり、甘えたかったり甘えられたかったりとかそんな感じだっ！」

「ふうん。」

…じゃあステイブは姉さんに甘えたいんだ…？」

「……………っ／／／！？」

あ、顔から湯気が出てる。

「…。」

ま、まあそれはいいとして……。

じゃあ俺、帰るな」

「あ、待って」

呼び止めたら、今度は何だ？って感じで振り向かれた。
まだ顔が紅いよ？

「あたし、ステイブが義兄さんになったら嬉しいな」

「……………え、あ……………」

ステイブは、嬉しいような…困ったような顔をした。

「……………でも……………俺なんかでいいの？」

肝心な時に、助けしてくれる医者を探すくらいしか出来ないのに……………」

「今出来る事を必死にやってくれてるじゃん。」

アタシの義兄としては、十分合格点ね！」

そう言って、思いつきり笑ってみせる。
ステイブも戸惑ったような顔をしてから…嬉しそうに笑って
くれた。

「…ありがとう。」

そう言って、ステイブは部屋を出て行く。
あたしは姉さんの方を見た。綺麗な顔して眠ってるよ、ほんと。

…ステイブが義兄さんになる前に死んだりしちゃ、絶対ダメだ
からね……？

「愛されてるねえ…お姉ちゃん」

…ステイブとパパは必死にお医者さんを探してくれてる。
使用人達は、自分達の仕事をしながらも姉さんの看病を一生懸命し
てくれる。

「……あたしには、何が出来るんだろ。」

—

第4話 ウサギの穴にDIVEせよ!! (前書き)

ヤッターッ!!!

()

とうとうアリスの心髓的シーンが書けましたっ

全世界のアリ

スファンの皆さま!

処女作な上にめちゃくちゃなストーリーですが…べあねこ版アリス
をご覧くださいれば光栄です!

第4話 ウサギの穴にDIVEせよ!!

「ねえ…どうしたら良いと思う？」

ママのお墓の前で、あたしは呟いた。

本当はこんな事、自分で考えなきゃいけないけど…。

お医者さんを紹介して貰うにも誰に聞けばいいか分かんないし…
姉さんの看病だって上手く出来そうにないし…。

「あたしってこんな役立たずだったんだ…」

役に立てない自分が嫌で堪らない。

でも、こうやってママが話し掛けてくれてる気になってない…不安でどうしようもなくて…。

いつの間にか、ほっぺたが濡れていた。

…ダメだ泣くな!

泣いてる隙があったら、少しでも考えないと。

姉さんを助けないと。

本当はあたしだって聞いた。

あの夜…お医者様がパパに言ってた。

姉さんの病気が治る確率は…ほとんどゼロに近い。

それでも諦めたくない。諦められるワケないよ。

姉さん、後ちょっとで二十歳だよ？

パパはきつと喜ぶよ。セバスチャンもメリッサも…ママもあ
たしも。

親戚も友達もみんなでお祝いするんだよ？

それで、そのうちステイブが姉さんにプロポーズして、パパと
一緒に実は知ってましたって言って、ステイブをびっくりさせて

……。

絶対に、死んだりしないでよ。

一緒にいたいよ。

何だかママの時みたいだね。

あたし…ホントはまだ、ママが恋しいんだ。

だからこうやっていつもママに会いに来てる。

ママが死んだなんて、信じたくない。

姉さんにも死なれたくない。

「あたし…もう…どうしたらいいのかわかんないよお………」

「…ああもう、また遅刻だあゝ!!！」

「だからゼンマイ式なんて古いって言ったのに…。
腕時計にしなよバンチョー」

番長？

………つてなに？

泣きながら顔を上げたら、意味の分からないものが目に映った。

ウサギ…。

かなり身なりが良い…その白ウサギが、なんか…懐中時計を見て大騒ぎしてる。

…それと、何だろ。

子猫？

ウサギと猫は猛スピードでどこかに走っていく。

何あれ……

「…超カワイイっ／＼／＼！」

その時あたしは思い出した。

あのウサギって…昔ママが言ってたお話に出てくるウサギにそっくりじゃん！

そっか、あれがそうなんだ。

ママの言ってたことは、全部本当だったんだ！

気づけば、あたしは駆けだしていた。

不思議の国。

ママが子供の頃に行った、へんてこな世界。

もしかしたら…そこになら……

姉さんの病気を治す方法があるかもしれない！

「ねえっ！待って！

待ってったらあー!!」

大声で叫んだら、ウサギと猫はコツチを見てギョツとした。

「ねえバンチョー…どうするの?」

「どうもごうも、お嬢さんに待てと言われてるんですよ?」

決まっています。

「こういう時は…」

そう！そこで待ってて！あたしを不思議の国に連れて行って…

「逃げるっ！」

全速力で！！！！」

…え？

いやちよつと、何でそこで逃げ？

待っててれば、ああ猫さんまで走り出してるしてか足早えなおいっ

「ちよつ…待つ…」

もうっ待ちやがれえええエエエエエエツツ！！」

「うわわっ！！！？？」

あの女の子かなり足早いよ！ヤバイよ追いつかれるって！」

「…な、なんか前にもこんな事あったような…？」

もう何が何やら。

あたしは逃げるウサギと猫を追いかける。

ウサギ達が向かっているのは、近くにあった大きな枯れ木の下。

うん、ママもあそこから穴落ちたって言った。

でも前に見

に来た時には穴なんて無かったのに？

あ、ウサギ達が木の下に着いた。

「掘りますよー!!」

「う、うんっ」

え？

あれ、どっから出てきたのそのスコップ…？

ってか今から穴掘るんだ!?

「わっせ、わっせ…」

ああ…ヤバイよその掛け声めちやくちや可愛いよお〜!!!!

「あ、あつた!」
ん？

だいぶ追いついてみたら、ウサギ達の足元に何か見えた。

少し掘り返された地面。そこから、枯れ木の根っこが覗いてる。

太い根っここと根っここの間に、ドアがある!

え〜、あんな事ママ言っただっけ? 反則だよ地面に隠すなんて!

「早くっ

鍵開けてっ!!」

猫が叫ぶと、白ウサギはポケットから鍵の束を取り出した。
一応鍵掛けてあるんだ。
木の下まで後少し。

なんかウサギ、どの鍵だか分かんなくてパニックってる!!

ヤバイ可愛い!

抱き締めたい!

でも子猫の方がもっと抱き締めたいです!

「抱き締めさせてえ〜〜〜!!」

あ、思わず叫んじゃった。子猫がビビってるよ!

えー!もう知るもんかあああ!!!

「そりゃあつ!」

「ひゃわわっ!?!」

やった!

猫捕まえた!

もっふもふだあ〜!!!!

「わわ…えつとあの…」

「友達になって下さいっ」

「え!?!」

あ、はいよろこんで!」

やったあ友達になって貰っちゃったよ〜!!

しかもよろこんでだって!もう可愛すぎる〜!!

「…………あゝもう……。
捕まっちゃったんですか……？」

不意に、ものすごく不満そうな声がする。

「……え？」

あたしと子猫は、同時にウサギの方を振り向いた。

「まったく……。」

そこは私が穴に飛び込んでから貴女が追ってくる場面ですよ……。
先に追いついちゃってどうするんですか……。」

「え……あ……」

どうしよーね……？」

予想外の事態だ。

白ウサギからクレームがきたよ。

「何いつてんのさ……。」

バンチョーが早く鍵開けないからでしょ？」

「うっ！？」

おおっ、子猫が反撃した！

「鍵の区別がつくように名前書くとか印つけるとかするよつに前から言ってるでしょ？」

だいたい時計だつてデジタルにしときゃあまだ止まってるのに気付きやすいつてのにいつまでもスタイルにこだわってデカい懐中時計なんか着けちゃつてまあ父さんも嘲笑つてたよそこには」

「…失礼しましたお嬢さん……ほんとスイマセン」

勝った!?

子猫くん強いつ!

「…ほらもういいよ。

急がなきゃ!

女王に首獲られるよ?」

「うわっ!

そうだった大変だあ!」

ウサギはまた大慌てしながら、木の幹についたドアに、錆び付いた鍵を一本突き立てた。

カチャリ

ドアが開いた。

…中は真つ暗だ。ママ、ホントにこんなトコに飛び込んだの?

「さあ、皆さんも早くっ」

息を弾ませながら、白ウサギは穴の中へ飛び込んだ。

「お姉さん、いっつ」

「えっ？」

「あっ！アタシも？」

子猫くんに言われて、あたしは思わず後込みする。 通り抜けられない大きさじゃないよ、服も汚れないだろうし。 でも…暗いなあ。

「来ないの？」

「あ…いや…」

「…どうせついて来るつもりだったんでしょ？」

うっ…

ズバリと言い当てられてた。

「ねえいこ？」

大丈夫だから！」

「う…うん、いく。」

大丈夫だよ、多分。

こんなかわいい猫も一緒だし……理由になってないけど。

穴を覗き込んでみる。

うわ…深いなあ、あつでもところどころ灯りがついてるし…

「じゃ、行くよ！」

「えっ？あ、待ってっあつダメっ！！？」

いきなり子猫がエプロンを引っ張る。

もちろんホールインワン。

第4話 ウサギの穴にDIVEせよ!! (後書き)

感想など有りましたら ぜひぜひ送って下さい!

あんまりキツイ評価喰らつと立ち直れなくなるやもですが……;
本格ファンタジーが書けるように頑張ります!!

第5話 クッキーには紅茶を

さて。

あれから10分が経った。

…いや…20…30分…?

ひよっとしたら1時間は経ってるかも。

あゝ、いつまで落ちるんですかこの穴!?

あ、そういえばママも言ってたじゃん。

「落ちるときは凄まじく時間かかったから、何か暇をつぶせるモノを持って行った方がイイかも………サンドバックとか!」って…。

…いまさら遅いか。

こんなところに暇潰しになるモノなんてあるわけないしね…。

「ぶはっ!

お、おねーさん抱き締めすぎっ」

いたよっ!!!!

暇つぶしどころじゃない、何度見ても飽きないくらいのかーわいい子猫ちゃんだああ!!!!

「子猫ちゃん会いたかったあーっ」

「うわわっ!

さっきから抱き締めてたでしょ?」

子猫は呆れたように言った。

「あ、あと僕は男だから、ちゃんよりは君って読んでもらいたいよお」

「えあ!？」

お、男の子だったんだ!」

「分からなかったの?」

「うんうん、可愛いから全然気づかなかった!」

「……あの、それ素で言ってますか?」

「あ、ご、ごめ……すす酢、素ですた。」

おう……猫君は黙り込んでしまった。

「……あ、や……ごめんね?」

そそそりやアレですよねっ、いくらカワイユイからって男子に向かってチヤンは無いよねチヤンはっ!

しかもこんなチンチクリンに言われたんじゃ気にも障りますよねマジホント申し訳ねえっス

どど土下座しますんでどうかそれでご勘弁をおお……」

あたしが空中スライディング土下座を決め込もうと身構えると、

「……ぷぷっ」

およ?

「……くく、にやははっ!」

面白いねお姉さん。」

「あ……ご機嫌直してもらえた!?!」

猫君はあたしの顔を見て可愛く笑った。
どうやら気に入ってもらえたみたい！

「えへへ。」

猫君は可愛いねっ」

「いやだから男なただけどなあ…まあいつか。」

心が広いところもイイッ！

「あ、そうだ猫君、この穴って底につくまであとどれくらいかなあ

…?」

「え？

Skipしたいならそう言ってくればよかったのに」

…Skip?

「えい」

ガウンッ

「つぎやわっ…!?!?!」

突然、穴全体に衝撃が走る。

次の瞬間には、あたしは盛大にしりもちをついていた。

「あゝ、あいたたた…」

「大丈夫？お姉さん」

「う、うん。へーき。」

…っていうかもしかして、言えばいつでも止めてもらえたの!？」

「？」

そうだけど」

そうだけど、って…物凄く無駄な時間過ごしちゃったよおい。

「不思議の国の入り口は長いウサギ穴になってるんだ、お客さんがきた時雰囲気出るからだって聞いたけど。」

でもこの国の住人はこのアトラクション飽きちゃったから途中飛ばしてさっさと底まで行っちゃうんだよー」

アトラクション？

途中飛ばし？

どうなってんだこのウサギ穴。

「他にも巻き戻しとか一時停止機能とかあるよ」
DVDかつ！

さて…あれだけ長く落ちた割には、思ってたほど痛くはなかったかな。

まあ痛いっっちゃ痛いんだけどね。

「…ここが…不思議の国…?」

辺りを見渡してみると……。
どうやら、建物の中にいるみたい。

「…ここって…？」

内装はかなり綺麗だ。

バロック様式の豪華な飾りが、所々に備え付けてある。
正面には、金のドアノブがついた扉が1つ。

それから部屋の真ん中に、ガラスの丸テーブルが1つ。

間違いないや…：…ここは不思議の国の入り口。

この部屋についても、ママから話を聞いた気がするしっ！

「きゃー！！」

とうとう来ちゃったよ〜え？ 凄いじゃんこれ異世界だよ異世界！
本物のファンタジーだ〜っ！！！！」

「なんか…ずいぶんと嬉しそうだねっ」

不意に猫君に聞かれて、あたしは超高速で振り返った。

「あつたり前ですよー！！」

昔からここに来たくって何度入り口を探したことが……。
ああ、あたしの夢はとうとう叶ったのね！？」

そっだよー！！

ママ、アタシも来たよ？ ついにあなたの娘もワンダーランドトラベ
ラー（ゴロ悪い）としての第一歩を踏み出すんだよー！！

今ー！！

この場所で……！

そして、その第一歩は……この金のドアノブの扉、その 向こう側に
……っ

胸をときめかせながら、あたしは、興奮に震える手を、ドアノブ
へと伸ばした……。

『おい待てや嬢ちゃん』

…はい？

「今…なんか声した？」

もちろん猫君じゃない。猫君はちゃんとあたしの隣にいます。あんな言葉遣いしない。
するワケないでしょアホくさいわ。

…っ…っ…っ…？

「なぐんだ空耳じゃん驚かせやがっ『いや空耳ちゃうし。そんなボケとかいららんから一タツツコミさせんなやアホか』」

………。

「……………」やないつちゆうに。コラ、人と話す時はちゃんと目え見て会話せんかい言葉のキャッチボールにならんやろが」

あゝやっちゃった、ドアノブが喋っちゃったよ。

いくらメルヘンって言っても出会い頭じゃキツイと思いますコレは。

だから…………とりあえず正当なりアクションをとらせて頂きましょう。

「キィアアアアアアアアアアアアあああああー……ッ
ッ！……！！……？」

多分80デシベルぐらいだったんじゃないかな？

即座の音波攻撃の後で強烈な蹴りもお見舞いしてやった。

『ゲブフオウツツ！？』

ありがとう姉さん。教えてくれた痴漢撃退術が今役に立ったよ。

敵は虫の息だ。

「……はあ……はあ……」

な、なによこの人面超絶キモドアノブは……？」

「……この門番だよ。」

猫君がさらりと答えた。あ、なんか耳から耳栓取り出してる。準備良いですねっさすがは猫君！

「…っっていうか、門番？」

「うん。お姉さんに伝えたいことがあったんだと思う。」

「あ、え…それって…もしかして倒しちゃマズかった？
てつきり造形が潰れた化け物かと…」

勢いで撃退しちゃったけど、さすがに悪いことしちゃったな…。

「…や、気にしないで。」

初めて見る人なら普通誰でも絶叫すると思うし…アレは…ねえ？

そう言っつて、猫君苦笑い。

良かった…あたしは間違っつてなかった。

だって掴もうとしたノブに目と鼻と口があっつていきなり話し出したら……ねえ？

「あ、そう言えばこのノブ、あたしに何を言おうとしてたの？」

『…て…テーブルの上を…見る…』

「「うわっ生き返りやがった！」「」

猫君とあたしは同時に叫んだ。

『…このっ…猫坊までそげんな事いうか…』

「テーブルの上？
あっ！」

ガラスのテーブルの上に、いつの間にかクッキーと小瓶が置いてある。

「あ、そっか。

どっちかを食べると体が縮んで、もう一方は食べると大きくなるんだっけ」

「すごい！

詳しいんだねお姉さん」

あ、なんか猫君から尊敬の眼差しが！

「ふふん、一応下調べはして来てるからね！」

『知ってたなら先に小さくなってからドア開けようとしろや。そのままの体型で通り抜けられるとでも思ったんか鏡見ろや』

「成敗っ」

『ぐべひはっ！！？』

今度は倍の威力で蹴り飛ばしてやった。

確かに人間が通るにはサイズの小さすぎるドア。あたしもうつかりしてたけど…体型とか鏡見るとか言ってる時点でコイツには他意がある。
女の子の敵決定。

「アンタもう黙ってなよノブの分際で」

…あゝ、なんか言葉遣い悪くなってきてる。
まいったなあ、この腐れノブがうるさいからだ。
何か甘いものでも食べて落ち着こ…。
あ、ちょうど良いところにクッキーがあんじゃん!!

「いったきまーす。」
はむ。

うぐん！香ばしくておいし〜っ!!…!!

「あつ！おおお姉さんクッキーの方はっ!？」

へ？

どうかしたの猫君？

ゴンッ

「あいたっ!？」

痛い!

なんか頭ぶつけたあ!

「いてて…あれ？」

…猫君…小さくなってない？

あ、そっか。

あたしがおつきくなって…。

「てえええええっ!？」

「えええじゃないよ！」

クッキーは大きくなる方だつてばあ〜っ！！！！」

あ、そうだっけ！？

あ〜思い出した！

確かママもクッキー食べて大きくなっちゃったって言ってたよ。

でも仕方ないじゃんそこまではつきり覚えてないよ〜！！

「…いや待てよ！？

アタシにはまだ小さくなる小瓶がある！

それさえあれば元の大きさに……」

ミシッ

「うっ！？」

ま…マズい。狭すぎて身動きすら出来ない。

…あれ？でもまだ大きくなるの止まってない気がするんだけど？

ミシミシッ

ええええええ！？

ちよつと待ちなさいよこのままだと家を突き破るまで巨大化しちゃいますよ？

そのまさかですか！！！？？

「う、ウソオツ！」

でもママは身動き出来ない程度で止まったって……………」

……………はっ！

そうだ、ママがここに来たのは確か6歳か7歳の頃……………10年ぐらい発育してるあたしの場合、身長が高いぶん大きくなるのかあ。ってうおーい！？

「それかなりマズいよーっ！！」

「僕もマズいかも…狭いっ！！」

「うわっん申し訳ないですー！」

ピリッ

え、今の何の音？

…まさか…いや、悪魔で仮説として……………。

クツキーの効果があるのは人間の体だけ…つまり服には効果無しだったとしたら……………？

小さくなるならまだいい。服の中に埋もれて見えなくなる。

じゃあ…体だけ大きくなるとしたら？

「い…いやああああ見ないでええええ／／／！！！」

「ええ！？」

どうしたのお姉さん？」

うっ…。

でもこんな幼気な子猫になら見られても耐えられるかも。人間同士

じゃないわけだし……。

『……うっ……うーん……』

何だ……？何がどうなって………』

ひいつ！？

「アンタだけはいやああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
！……！」

『げくほおっ！？』

バキッ

「「あ。」

ガッシャアアアンッ

…ドアのついてた壁が倒壊した。

「ぶはあっ」

すかさず猫君が家の外に飛び出した。

「え…あ、そのっ」

家壊しちゃったよ。

どうしよ？誰の家なのかもわかんないのに！？

「うっごめんなせ……」

慌てたもんだからそのまま立ち上がったよ。

「いてっ」

メキイツ

…屋根が外れた。

…服はちゃんと一緒に大きくなってました。

そりゃそうだよ…体だけ大きくなる薬とか犯罪だよ。

あるワケないじゃん不思議の国にそんなもん。

そして、あたしと子猫君の前で、家は跡形もなく倒壊した。

「…どうしょコレ？」

第6話 Welcome to Wonderland(前書き)

原作の脇役をふんだんに使ったメニューとなっております。
おかげでカオスな内容になってますよ…。

これでイイのかね!?

(良くないよ……orz)

まあ何はともあれ!

原作知ってる方も知らない方も楽しんで下さいな
それでは本編へ。

第6話 Welcome to Wonderland

あたし達は、静かな森の中に立っている。

小鳥の鳴き声が聞こえてくるよ。

風の囁く音も。

それから……

ドンガラガッシャアアンッ

…建物が崩れる音もね。

うわぁ……

…どうしょ？

家壊しちゃったし。

さっきまであたし達がいたお屋敷は、あたしが巨大化したせいで内側から大破していた。

そりゃもう完膚なきまでに…。

「わぁー……派手にぶっ壊しちゃったね」

「うん、やらかしたね……」

あたしと子猫君は、ぼーぜんとしたまま顔を見合わせる。

ま、マズい……この状況を家の持ち主に見つかったら……！！

「ど、どうしよう猫君」

「うーん……あ、とりあえずさ、元の大きさに戻ろっか」

「あ」

そういえばあたし、クッキー食べて巨大化したままじゃん。
猫君がねずみサイズに見えるよ。

「ひゃく、ひよつとしてアタシ、今めちゃくちや背え高い？」

「ひよつとしなくても。ほら、お姉さんコレ飲んでっ！！」

「およ？」

猫君は小さな小瓶を持って、あたしに差し出してきた。

ああ、クッキーと一緒に置いてあったヤツだ。

コレを飲めば、あたしの大きさも元に戻るはず！

「助かった！ありがと猫君！

それじゃさっそく……」

瓶のフタを開けて、中身を一気に飲み干す。

ゴクゴク……

そのとたん、あれよあれよという間に、あたしは元々の147センチの身長を取り戻した。

おゝすげいつ！

この世界のものって、食べたならみんな体が伸びたり縮んだりするの？

「やった〜！」

この大きさならまた君をギュウツとできるよっ」

「よ、よかったね…」

ちよっ、ホントにギュツとしなくてもいいから！

タイムタイム！！」

ちえっ

ゆっくり抱き締めたかったのに。

「そんなことより！！」

どうしようこの状況、バンチョーに怒られるよー」

「バンチョー？」

番長？

…ではないよねやっぱ。

あたしが不思議そうな顔をしていると、猫君が慌てながら言った。

「さっきのシロウサギ！裁判長だから」

あ、なるほど！

そういえばママが来た時も、タルトがどうこうで裁判をやってたとか聞いたな〜。

その時も確かウサギが判事やってたって話で…

「……………え！？

ってかここウサギの家ええええ！！??？」

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてないよっ！ー！うわっ本気でヤバいじゃんどうすんのコレ？」

そう言って振り向くと…さっき破壊したばかりの瓦礫の山が目に入る。

不思議の国に来て早々に人様の家壊すとか………破壊神^{クラッシュヤー}アリス、
爆誕。

とか言ってる場合じゃないね！

「ああゝっ！ー！

絶対怒られるっ！

嫌われるゝ！ー！

最悪だあゝウサギさんはまだギュッてしてないのに…」

「バンチョーも襲う気だったんだ…」

『ぎゃああああああああっっ！ー？』

うわ何っ！？

不意に凄まじい叫び声が響いた。

かと思うと、猫君が後ろを振り返って叫んだ。

「あ、ビルー！

…ビル？

あたし達の後ろに立っていたのは、緑色の上着を着たトカゲだった。

「シロウサギ殿の家がああああ！」

ちよつと出払つてる間にアンビリーバボーなハアプニイイインツ
!?!」

「……………誰？」

このテンション高いの」

「えと、トカゲのビルだよ。バンチョーの従者なんだ。」

猫君が少し疲れた顔で言った。

キミも苦手なんだね？この馬鹿テンション。

「そこなお方っ!!」

うわっ見つかった!

「何があつたかご存知ないですかあつ!

屋敷が!

シロウサギ殿の!

エレガントかつプリティイーな屋敷があつた筈なのですがあ!
どっこい跡形も無いんデスヨオおおツ!!!!」

こ、怖い…!!

「さ、さあ〜。

どうだったかしら？

あたしはちょうど今ここを通ったばかりで……」

「ごめんなさい。

こんな人を目の前にしてホントの事言える度胸とか無いですハイ。

「……………怪しい」

疑われた!？

「見かけない顔ですなあ。お嬢さん、お名前をお聞きしても宜しいですかあっ!？」

「え?!」

あっいやその……」

助けて〜猫くーんっ!

え……ああ、猫君までそんな困った顔をして……。
ゴメンね〜あたしのせいで……。

「さあっ!」

どうなんです!

アナタのお名前はっ!?

さあさあさあさあっ!……!」

「ひいっ！

ひーんアリスですっ！

ごめんなさいいいい！！」

ダメだこの人危なすぎるっ！！

名前を白状してしまったよ。…これからどうなるんだろ？ この世界にも警察とかあるのかな？
逮捕とかやだな……。

涙ぐんで自白の覚悟を決める……と、妙な光景が目に入った。

「……あ……」

「……へ？」

なんかビル、顔面蒼白だよ。

え？なに？どうしたの？

「……あ……あり……ありあり……ありり……」

アリ？

「………アリス？」

「え……うん、あたしがアリスだけ……」

え？ええ？

なにになになにイ！？

森のアチコチから、誰かが走ってくる音がする。しかも大勢！？

「…………大丈夫だよっ」

猫君があたしのスカートを掴んで言った。

「みんな、お姉さんの友達だから」

「…え…………？」

目の前の草むらがかサカサ揺れる。

飛び出してきたのは、一匹のハツカネズミだった。

…結構かわいいかも！

「ひゃ〜！！」

本当にあの娘だよ！

みんな、アリスだ！」

ネズミが嬉しそうに叫ぶ。

ガサガサッ

また草むらが揺れた。

今度はそこから中からもっとたくさんの動物が飛び出してくる！！

「アリスっ！

久しぶりじゃん元気だった？」

ニッコリ笑って手を振るのは…驚？

他にもインコやらカササギやいろいろな鳥と、ネズミにウサギまで飛び出して来る。

あたしはあっという間に包囲された。

「あ、あの…」

「懐かしいな」

あれからどうしてたのさ」

「また穴から落ちてきたの？」

「あ、いやそのアタシは…」

次々と現れる鳥にウサギにネズミ達。

そして最後に、草むらの中からヘンテコな格好の鳥が出てきた。

「おおっ！アリス殿！

小生は…小生は、再度お目にかかれる日を首を長くしてお待ちしておりましたぞおお！」

「へっ？あ、ありがと」

また変なものが出た…。

その鳥は、右手にステッキ、頭に帽子をかぶってる。
あとクチバシがデッカくてなんかモコモコしてる…。

これなんて鳥だっけ？

「あゝ、ねえ……」

ひとまず本人に聞いてみよう。あたしは変顔の鳥に声をかけてみる。

「ややつ！

小生に何か御用でしょうか!？」

「あゝいや、大した事じゃないんだけどね？

あなた……なんて名前の鳥だっけ？」

「……………はい？」

え、なんか鳥の表情が固まった。

「……い、今なんと……？」

「あ……ごめん、名前を聞いたただけなんだ……けど……………？」

あれえ？

他の鳥達まで空気が凍ってるよ？

「あ……あはは、なんかマズいこと聞いちゃったかな？」

「大変だあああ!!

アリス殿が記憶喪失になられたぞおおっ!？」

はあ!？」

「そんな…アリス！」

僕らの事覚えてないの？」

「あんなに一緒に遊んだのにい！！！」

「みんなでコーカスレースやったろ！？」

覚えてないのかよ！」

「えええ！？」

あのっコーカスレースって何？

そもそも、アタシ初対面だし…！」

言い聞かせようにもみんな興奮状態で手のつけようがない。

インコは泣き出すしハツカネズミは頭を抱えて倒れちゃったし！！

どうなってんの！？

「みんな落ち着いて！！」

違うんだよ、この女の子はたぶん……」

猫君が慌てて何か言おうとした。

その時。

ブッブー

…自動車のクラクションだ。

あたしと猫くん、大混乱になった動物達に向かって、緑色のクラシックカーが走ってくる。

「皆さん、その娘は皆さんの知っているアリスとは別人です！」

車の中から顔を出して、誰かが叫ぶ。

あれは……！

「シロウサギさん！」

車を運転していたのはシロウサギだった。

ウサギさんはあたし達の前まで車を走らせ、スピードを落として停車した。

ところが勢い余って…

「おっと」

ガンッ

あ！

倒れてたトカゲのビルがはね飛ばされた！

「おおっビルが飛んだ」誰かが叫ぶ。

はね飛ばされたビルは、そのまま森の方に飛んで行って、上手い具合に木に引っかかった。

「やれやれ…。」

用事が済んだので戻って参りましたよ」

シロウサギはあたしを見つけると、車から降りてきた。

ビルの事は気にしてないみたいですね…？

「皆さん。」

先程も言ったようにこの少女は我々の知るアリスとは別人です。」

シロウサギが言うと、誰かが驚いた声で叫ぶ。

「でも、顔も格好もそっくりだよ？頭のリボンだって！」

「シロウサギさん、その娘は一体だれなんです？」

ネズミ達が困惑した表情で尋ねた。

『…ああ、その娘かい？

なんだい、そんな事決まってるじゃあないか。

その娘はねえ……。』

不意に誰かの声が響く。

ダラけたような、ニヤついたような声。

でも声の主が見つからない。

「え、誰の声？」

「……………父さんだ！」

叫んだのは子猫君。

「え、お父さん？」

「うん、ほらあそこ」

猫君が上を見上げて叫ぶ。

あたしも動物達も、一斉に空を見上げた。

そこには口だけが浮かんでいた。

三日月の形になった、ニヤリとした口元。

そこに、金色の眼が2つ、すうっと現れる。

次に耳が2つ。

あ、ヒゲも生えた。

そして黒のシマシマ模様だけが現れると、半分透明な生き物は、地面にストンと降りてきた。

「…チエシヤ猫だ…！」

目の前の生き物を見てあたしは思わず呟いた。

「ご名答。そして君は、昔この世界に迷い込んだ”アリス”の娘さんだねえ…？」

チエシヤ猫は、金色に輝く目を細めて、ニイツと笑って見せた。

「ようこそアリス。

我が親愛なる友、”アリス・プレザンス・リデル”…その愛娘！

《不思議の国》は、君を歓迎するよ………」

第6話 Welcome to Wonderland (後書き)

またも長い話になってしまいました…。

読者の皆様ごめんなさい…… (泣

さて。

今回のメインディッシュ、チエシヤ猫登場です。

うーん、彼にはカリスマ性を漂わせつつ、関わるとヤバそうな変態
オーラをバンバン発生させて貰おうかと…

(どんなだよ!?)

そうそう!

原作の脇役達、知られてないけど結構オイシイキャラ達の説明もさ
せて貰いましょう!

まずはトカゲのビル。彼は白ウサギの従者の1人で、最高のパシ
リとして登場してました(笑
原作アリスがウサギの家で大きくなりすぎて出られなくなった時、
白ウサギ達が彼を煙突から入らせて中の様子を見に行かせたワケで
す。

ところがどっこいアリスに蹴り飛ばされて(しかもアリス確信犯)、
煙突から吹っ飛んでくる、という具合に体を張って笑いをとってく
れました!他にも陪審員席にいた時アリスの所為で席から落っこち
たり、その直後、上下逆さまで頭から席に突っ込まれたり(巨大化
したアリスの犯行)、メモ用の石版を引ったくられたり(これもア
リス)。

……不憫だ。

てかアリス酷いな！？

そんなこんなで、本作の中ではビルはアリス恐怖症なのです（笑

長くなり過ぎましたね〜

じゃあ今回はこの辺で！！他の脇役達についてもまた次回説明させて頂きたいかと。

では、呼んで下さってありがとうございました

第7話 Blue Rosy Girl・(前書き)

チエシヤ猫はデイズニー風にピンクの縞模様が人気ですね。
でも本作では、体は大きめな普通の猫っぽい外見にしようかと。

種類は王道のアメリカンショートで!!

毛色はシルバークラシックタビー。

わかんない人は画像検索などとしてみてくださいませ。
よく見る灰色のしましま猫の事ですので。

では、本編へどうぞ〜

第7話 Blue Rosy Girl .

悪戯な笑みを浮かべた口元。

輝く金の瞳は細く鋭く、虚空を泳ぐ。

何を考えているのかわからず、それでいて知的で気品を感じさせる容姿。

こちらに向けられるのが善意なのか悪意なのかも読み取れない。霧を掴むような存在…。

それがチエシヤ猫だった。

「ご機嫌よう…小さな友人よ。

出来れば…キミの名前も教えて頂きたいな、我々全員の前で。」

普通の猫と比べればずいぶん大きい。

犬ぐらいあるんじゃないかな？

でもそんな体を上品に揺らしながら、チエシヤ猫はあたしの前まで歩いてきた。

「さあ…お嬢さん。」

自己紹介しろって事だよね…？

うーん、ちょっと恥ずかしいんですけど…。

でもここで自己紹介しといた方が、この先ママと間違えられなくてイイかも知れない。

あたしは静かに頷くと、シロウサギさんや猫君、それから他の動物達の方へ向き直った。

「みんな、あたしは……あたしの名前は、アリス・ブルーローズ・リデル。みんなが会った”アリス・プレゼンス・リデル”は、あたしの母なの。」

大勢の動物達が見つめる中、あたしは堂々と名乗って見せた。

…のは良いんだけど……？

「……………」

あれ？無反応ですか!?

「……………ね……………」

ね？

「「猫だああああアアアアアアアアアアアアアアアアアああっ！

!!????」

はい!?

「ぎゃああ猫だ喰われるううう!」

地獄の釜のフタが開いたような悲鳴を上げて、ねずみも鳥もみーんなどこかへ逃げていつちやった。

…猫って……。

あたしは後ろを振り返って、チエシヤ猫を見る。

「…ねえ、アナタなんかしたの？」

「まさか。」

チエシヤ猫はしれつと答える。

「奴らは猫という生き物を極端に恐れているのさ。そりゃもう変質的なまでに。」

…ホントかなあ？

やっぱり何匹か捕まえて食べてたんじゃないかな……？
どうも怪しいわこの猫。

「…僕だって猫なのに」

あたしの足下で、猫君が不満そうに言った。

「何で僕を見ても誰も怖がらないんだよ……」

あれ？

もしかして猫君…いじけてるの？

「か……」

「…ん？どうかしたのお姉さん？」

「カワイイイイイイイ イイイイイツ／＼！！」 「ふみやつ！？」

可愛い！

ほんつとかわいいよキミ！

そのムスツとした拗ねた顔もサイコーだよお

あゝもうなんなのその胸を締め付けるようなラブリーフェイス／＼／＼！！ こっちは身悶えするしかないっつのチクシヨー！！！！

「取り込み中のところ悪いんだけどね」

子猫を抱きしめてたら、なんかチエシヤ猫が話かけてきた。

「何よもおこっちはお取り込み中だっつの！」

「…ふむ。」

キミは父親の前で息子の絞殺死体をこしらえる気かい？」

「……へ？」

あ！

子猫君、顔が真っ青だ……！！？

「きゃあああああごめんなさいっ！！！」

あたしは口から泡を吹いてる子猫君を慌てて地面におろした。

あ、まだ息がある。

ふゝぎりぎりセーフ…。

「ゲホツ…は、花畑が見えた」

なんかイイ感じに逝きかけたんだね。

「ご、ごめんなさい……つい暴走しちゃって」

「はあ…見事な暴走っぷりでしたねえ……」

シロウサギがあたしを見て言った。

ちよっ、やめてそんなヤバいものでも見るような眼であたしを見ないで！

「あたしは変人じゃないんだからねっ！！！！」

「まだ何も言ってますよ」

「…お、お姉さん、僕は大丈夫だから！

気にしないでね？」

うあ〜ん猫君ったら……優しいし可愛いし最強だねっ

……あたしはやっぱり変人かもね…。

「いやあ〜今日はみんな叫びまくりだなあ。じゃあ絶叫記念日とでも名付けるかな？」

あっはっは

そんな物騒な名前の記念日つくらんで下さいチエシヤ猫さん。

あ…そういえば。

「ねえ…猫君のお父さんってチエシヤ猫なの？」

「え？」

うん、そうだけど？」

…ホントにそうなんだ。なんかすごい。

というのも、ママから聞いてた話だと、チエシャ猫はとても家庭を持つようなタイプには思えなかったから。

「へへ。あのチエシャ猫がねえ。

奥さんは誰なの？」

チエシャ猫はまたニヤリとしてあたしを見る。

すると…完全に見えていた猫の体が、すうっと消えていつちゃった！

「あ！

ちよつと勝手に消えないでよ！！」

慌てて呼び止めると、チエシャ猫は例のニヤニヤだけをその場に残した。

「…いや、そういう世間話はまた今度だ。」

「えへいじゃんちよつとぐらい。」

さすがのチエシャ猫も奥さんの話をするのは恥ずかしいって？」

「やめといた方がいいですよアリス」

シロウサギが耳元で囁いた。

「彼ノロケだすと3日は語り続けますから…」

「えっ

マジですか？」

チエシヤ猫の意外な一面発覚。
愛妻家なんだ！

「ハニーの事はまた折をみてゆっくり聞かせて差し上げよう。
時はたっぷりあるのだから……ねえ、アリス？」

チエシヤ猫は意味ありげにあたしの目を見つめる。

「つてかハニーって呼んでんだ！こりゃ奥さんにベタぼれだぞ！！！」

……………あれ？

なんだろ、すぐ心に引つかかる。

”時はたっぷり”……………？

あ。

「うあああああつ！？」

「どっどっどっしましたアリスっ！？」

シロウサギがビックリして飛び上がった。

「どうしよ…時間なんて無いよ！

こんな大事なこと忘れてるなんて、あたし…最低だ……………」

次の瞬間には、否応なしに涙が溢れていた。

「うわあああんっ！

ごめんなさいおねえちゃんああんっ」

「…どうしたのお姉さん？」

僕らに話してみよ。」

猫君…っ

「…ヒクツ……ありがと…猫君ホントに優しいね…」

「もちろん私達だって優しいです」

シロウサギが、あたしの涙を拭ってくれた。

「さあ、車にのって下さい。話は中で聞きましょう」

「ふむむ。」

では私も「一緒しよう。なにせ息子の飼い主が困っているのだしね」

「みんな……ほ、本当にありがと……！」

本気で嬉しかった。 この世界にはイイ人ばかり…。

ホントに……《不思議の国》に来てよかった。

…ん？

今チエシヤ猫、”息子の飼い主”って言った？

「あのお、チエシヤ猫さん？」

「なんだね」

「もしや…息子さんをあたしに下さるんですか？」

「なんだ、まだ飼われてなかったのかね？」

キミならばいつでも歓迎だというのに「

…お、

OK出ましたああっ！

「ああありがとございませすお父さん！

息子さんはアタシが一生幸せに！！

そりゃもうめっちゃ幸せにします！！」

「…なんか婿さんもらったみたいになってるけど？」

「…ですねえ」

猫君とシロウサギがひそひそ呟いてた。

あ…視線が痛いです。

第7話 Blue Rosy Girl・(後書き)

どもども。

今日は第6話に出てきた鳥とハツカネズミについての説明です！

彼等が登場したのは、アリスがウサギの家にいた時の場面。

大きくなり過ぎたアリスが泣き出した時、あまりの涙で屋敷の中が大洪水になりました。

するとネズミや鳥達が流されてきて、後で小さくなったアリスと一緒に陸が上がって、みんなでお話をするのでした。

変顔の鳥、つてのはドードーのことです。

(現在は絶滅した鳥)

彼の提案でみんなはコーカスレースをします。

地面に円(かなり適当)を描いてトラックにして、よいドン!の合図も無しに各自適当にスタート!

何周走ればゴール、とかも決まっています。

アリスの涙の池でぬれた体が乾くまで走りつづけます。

だから勝敗もつかず全員優勝、アリスがご褒美をあげることになって、金平糖をみんなに与えました。

この金平糖で窒息死しそうになった小鳥もいるとか(笑)

アリス自身は、何故だか自分の持ってた指ぬきを贈呈されてしまったそうです。

なんだかなあ。

その後も少し話をするのですが、アリスが飼い猫のダイナの話をしたとたん、全員そそくさと逃げ出したそうなの。

アリスが

「ダイナはネズミや鳥をとっても上手に捕まえるの!」
なんてうっかり言ったからなんですけどね。

まあこの時アリスはたぶん小学生低学年ぐらいだし、そう考えると
何だか微笑ましい(?) エピソードでしたね!

それでは今回はこの辺でさよなら〜 (^・^)(/

第8話 ハートの城

《不思議の国》は、人から生まれ出た。

そして、《物語》は愛情を食べて育った。

幾百という時が、人の思いを葬り去るうとも…

世界は廻る。

…そこに人がいる限り。

「……で？」

貴女は何故あんなに困っていたんです？

この《不思議の国》に来ようとしたのにも訳があるんですか？」

クラシックカーのエンジンをかけながら、白ウサギが聞いた。

「う…うん、実は…」

「まあその年で理由も無しにウサギ追いかけて穴に落ちるとか正直

ありえませんがねえ。

…ドン引きです。」

「キミの母さんはあの時まだ小さな子供だったから許されるんだよなあ。…キミと違って。」

…くっ

おのれウサギと猫め。

何が言いたい…っ！！

「まあまあそんな怖い顔しないで。

それでは聞かせて頂けますか？

貴女が、この国へ来た訳を…。」

「あ…うん。

実は昨日ね…。」

あたしは、昨日姉さんが倒れたこと。病気が治るか分からないこと。そして、姉さんの病気を治せる薬を探しにこの国に来たことを、みんなに説明した。

「…なるほど、そんな事が…。」

シロウサギは話を聞くと、車を運転しながら首をひねった。

「ど、どうかなっ

何でも直せるようなすごい薬って無いの？」

「うん…」

城の図書館に医学書がいくらかあるはずですが」

「こゝゆつのは誰か専門家に聞いてみるのがいいんじゃないかな？」
チエシヤ猫が言う。

「専門家？」

「この国じゃ滅多に病人が出ないからねえ。」

余り訪ねる者はいないんだが。」

「医者は一応いるんです。森の奥に住んでいます」

「へ〜、病気少ないんだこの国。

なんかスゴいね!!！」

「あ、ハイ。

殆どの国民が健康そのものなんです。

怪我人が出たとしても、たまに医者に見て貰っても治しようがない
くらいの重傷者がでるだけで」

治しようがないって…

「…どんな殺伐ライフ送ってんのよ？」

ところで、あたし達は今シロウサギの車の中。

木が高く生い茂った小道を、緑のクラシックカーが木漏れ日を浴び
て走っている。

運転席はウサギさん、助手席にチエシヤ猫が乗り込んでる。

そしてあたしは後部座席で猫君は……

もちろんあたしの膝の上

「ね、僕はお姉さんの隣に座ればいいんじゃないの…？」
「いいの！」

猫君の特等席はアタシの膝の上なの…！」

「…なんだかなあ」

猫君は少し納得がいかない様子だった。

「…猫君、あたしの膝の上は嫌なの……？」

「えっ!?!」

「そつだよね…」

猫君は男の子なのに、こんなかわいいかわいしばっかり言う女なんて、鬱陶しいだけだよね…。

ごめんね…？

あたし…猫君の飼い主になれたと思って…グスツ…勝手に…舞い上がっちゃって…。」

「お、おねーさん？」

ごごごめんね!?!

僕そんな風に思っただけだからね？」

「おやおや。

いつの間にか1人前にレディーを泣かせるようになっていたのか…」

「ちよっ、父さん！」

変なこと言わないでよ」

よし……かなり動揺してるわね。

乙女の涙作戦は使える、っと。

あとはもう一押しで…

「猫くん……」

「な、何おねーさん？」「そのお姉さんって言つのやめて……アリ
ス、って呼んでくれないかな」

「え？」

う、うん。

……アリス？」

くはく来たあつ！！

「も、もう一回……」

今度はもつと可愛く！」

「？」

わかったよ、……アリス」

……やば、鼻血でそう。

猫好きでないと理解出来ません。

このクリクリのおめめで見つめられながら、あどけない口元から
自分の名前が囁かれているのを聞けるだなんて……っ！！

神様アリガトウ……！！

「じゃ、じゃあ……！！

今度は耳元でご主人様……って『猫好きの人間でも理解不能だと思っ
たね』……。」「

……ちょっとチエシャ猫、いくら父親とはいえこのタイミングで邪魔
するとかありえな……

……てか心読まれたあ！？

「ほらアリス？
子猫君をからかうのはその辺にしておいて下さい。
もう着きますからね」

…そういえば、あたし達今どこに向かっているんだろ。
行き先も知らずに乗ってるあたしもアレだけどさ、先に教えてく
れたっていいのに。

「ねえ、着くってどこに？」

シロウサギは、黙って顔を右に向けた。

「…？」

その意味はすぐに分かりました。

緑の並木道が途絶えて、周りの景色がよく見えるようになった。
そのとたん……

「…うわあ〜っ…！！！！」

あたしの目に飛び込んできたのは、森の中にそびえ立つ、大きなお
城だった。

「うわ…きれい……」

右方向に現れた豪華なお城は、日の光を浴びて白く輝いてる。

でもやっぱり女王様がハートの女王だもんね、壁のところどころ
にハートの紋章が描かれた垂れ幕が吊してある。
それに屋根も真っ赤な薔薇色。

「この国の最高権力者、ハートの女王陛下の城です。お母様からお話を聞いていらっしやるかと思いますが…」

「うん、聞いたことあるよ!!！」

…あれ？

そっぴやハートの女王ってたしか…。

「…何かというとすぐ、首を跳ねろって叫ぶ人だとか…」

「跳ねられないように気を付けて下さいね。」

もしかしてさ…そんな人の城に行くの？

命がいくつあっても足りない気がするんだけど…

第9話 仕事とアタシどっちが大事!? (前書き)

いや、忙しいなあ。

とか弱音を吐いてみたり。

申し訳ないです!!

なんせ忙しいのが仕事みたいな年頃なので…。

いや、まだ子供だけどさ。

そんなこんなで本編へ

GO -

ちなみに皆さんは仕事と恋人どっちが大事？

第9話 仕事とアタシどっちが大事!?

原っぱに囲まれた道をゆっくり通り過ぎて、車はお城の方へと走っていく。

ハートの女王のお城は、静かな森の奥にありました。

木漏れ日の差し込む明るい森の道。

ガタゴトと音をたてながら、クラシックカーはお城の門の前までやって来た。

「うはぁー!

スゴいおっきー!」

車の中で思わず叫んでしまいましたよ。だってホントにスゴいんだもん。

まさに一国の主の城! ってカンジだね。

「さて…到着です。」

白ウサギが車を止めて、みんなは緑の芝の上に降り立った。

あたし達の目の前には巨大な門。

その両端に、スピードの3と、クラブの7のカードで出来た兵隊が2人。

おおっ、トランプの兵隊だ!

白ウサギが近づいていくと、トランプの兵隊はピシッと敬礼した。

「白兎殿！お勤めご苦労様であります！」

「へえ〜さすが白ウサギさん！お城でも顔がきくんだね〜」

「うん、バンチヨーは國務大臣もやってるから」

……………だ…大臣ですと？

「猫君それマジですか」

「え？」

「うん本当だよ。結構重役だよな」

「いやいや結構なんてもんじゃないよそれ。」

「何気にめっちゃ偉い人じゃん白ウサギ！？」

「みなさーん、そんなとこに突っ立ってないで早く来て下さーい」
「きぎい〜、と音がして、お城の門が左右に開かれた。
どうやら入ってもイイみたい！！」

門をくぐった向こうにあったのは、広大な薔薇の華園だった。
真っ赤な薔薇に埋め尽くされた庭園。その一番奥に、あの巨大なお城がどっしり構えていた。

こんなに沢山の薔薇、今まで見たことない…。

「おや、女王様の薔薇がお気に召しましたか？」

思わず庭園に引き込まれていくあたしに、白ウサギが声をかけた。

「う、うん！」

とつてもお気に召しました！！」

うん？感動しすぎて言葉が変だ。

でも、ホントに綺麗だよこじ。

こんな場所でのんびり暮らせたら、幸せだろくなあ。

…それにしても、お城に来てどうすればいいんだろ？

姉さんの病気を治す薬はここには無いみたいだし、誰かに聞きに行くんじゃないかなかつたんだっけ。

「ね、ねえ白ウサギさんつ次はどこに行くの？

やっぱり女王様に挨拶とか……」

「え？

いえ私は仕事があるのでここで失礼します。」

はい？

「…えと、薬探すのを手伝ってくれるんでは……」

「いや、そのつもりだったんですけど仕事しなきゃいけないですし

」

…ちょっと待て。

そりゃ仕事は大事ですよ？何せ大臣なワケですしね。でもここまで来て仕事を優先しなくても…

ってなんでさっさと城の中に逃げてくのよ!？

「コリア白ウサギィィ!? あんだけ優しい事言っというて今更何なのよ!

逃げんなこの薄情ものおっ!」

それを聞くと、白ウサギはピタッと動きを止めた。

「……アリス、貴女どうやら大変な事を忘れてるようですねえ」「へ?」

大変な事を忘れてる?

…アタシがですか?

いったい何の事よ……………あ。

「…あ、あの…思い出しました」

「やれやれ。人の家を破壊しておいて完全に忘れてるなんて…」

そうです。

あたしはついさっき、巨大化して白ウサギの屋敷をぶっ壊してしまっただけです。

「いやワザとじゃないよ!? 不可抗力だし!

あのドアノブが異常にキモかったから家ごとっつかり…」

「嬢ちゃん、言い訳はいけねえなあ。

悪気は無くてもアンタがやったのは立派な犯罪」

出たあああ!?

「ななな…何でソイツがここに!?

ってか、何でウサギさんが持ってんの!?!」

「いやあ…貴女を車で迎えに行った時に拾っておいたんです。こんなんでも一応我が家の家宝ですから。」

金色に輝くドアノブを摘み上げて、苦笑いする白ウサギ。

「か…家宝??」

そのキモいのが!??」

「キモい言うなブスがっ!嬢ちゃんあんま調子こいとると痛いめえあわせるでええゲブハッ」

お、白ウサギがドアノブを地面に叩きつけた。

「痛いめを見るのは貴方です。」

女性に向かつて何ですかその言葉遣いは…」
はあ…とため息をつく。

「あ、あの…」

白ウサギさん、お家壊しちゃってゴメンナサイ!!」

ど、どうしようこのままじゃウサギさんホームレスになっちゃ…」
「なりませんよ。」

…というか、そもそもあの屋敷はそろそろ取り壊す予定でしたし」

…はい?

「と、取り壊す?」

「はい。」

老朽化が進んでいたので引っ越したんです。

新家は東の森の中にもう出来てるんです」

な…何よそれ!

「じゃあ心配する必要無かったじゃん！」
「心配なんかしてなかったじゃないですか。
忘れてたんでしょう今の今まで」

う…その通りです。

「グスン…面目ないです…」

「まあ反省してるようだからいいです。
ところでアリス、手を出してください。」

手？

よく分かんないけど、あたしは言われるままにウサギさんに向かって右手を突き出した。

「これでいい？」

すると、ウサギさんはチョッキのポケットから何かを取り出した。

「え、なになに？」

……カギ？」

ウサギさんが持っていたのは、綺麗に装飾された、古びた金の鍵だった。

「我が家の家宝の一つなのです。…このノブとセットになってるんです」

うんざりした顔で地面のドアノブを見つめると、ウサギさんは鍵をあたしの方に差し出した。

「これ、あげちゃいますね」

「え、いいの？」

大事な家宝なんじゃ……」
いきなりのプレゼントに、あたしは少し焦る。
だって家宝なんでしょ？貰っちゃっていいの？

「アリスに持っていて欲しいんです。
私は仕事がありますのでこれ以上お手伝い出来ませんが、せめてこれだけでも。」

そう言いながら、ウサギさんは、あたしの手の平に鍵を置いた。

うわぁ……近くで見ると超綺麗じゃん。

「……コレは喋ったりしないよね？」

「喋りませんのでご安心下さい」

長い耳を揺らして、ウサギさんはあたしを見つめる。
そして、にっこりと微笑んだ。

「その鍵はお守りです。」

私だと思って大切にして下さいね」

「……は、はいっ／＼／＼／」

か……可愛い。

図らずも悩殺されちゃうところだったよ……

だ、ダメよアリス……！

あなたにはもう子猫君という心に決めた相手が……

…そういえば子猫君、さつきからヤケに静かじゃない？

「子猫君……？」

あたしは庭園の中を見渡して見る。

あれ？いないし。

どこ行っちゃったんだろ…？

「それじゃ私はこれで。薬探し、頑張つて下さいね」

ウサギさんはいつの間にかやらお城の扉の前に。

「あ、うん！」

鍵ありがと、絶対大事にするね！！」

「アリス、この城から北に進んで下さい。

野道を通って森の中まで！そこに私の友人がいます。

きっと手を貸してくれますので！」

白ウサギさんの友達？

誰だろ。

詳しく聞こうとした時にはウサギさんはもうお城の奥に入っちゃった。

「…1人になっちゃったなあ……」

ウサギさんも猫くんもいなくなっちゃったし。

…あれそういえば、

「チエシヤ猫はどこ行っちゃったんだろ？」

「お呼びかね？」

「わきやあああっ!？」

なにに驚いてんのかって…チエシヤ猫がいきなりあたしの顔の前5
センチ先に出てきたんだよっ!

「近い近いっ!!」

あんたねえ、人に心臓発作起こさせたいの？」

あたしが怒るのも気にとめないで、チエシヤ猫はニタニタ笑ってい
る。

三日月形に裂けた口には、結構鋭い牙の行列。

何なんだろなあこの猫。

ホントに子猫君の父親？性格は全っ然似てませんけど。

「…まあチエシヤ猫と一緒に来てくれるんだよね？よろしくね。

あたしまだこの国のこと良く分かんないし…」

「ああ〜そういえば私も用事があったんだっ」

は？

「というワケで後は1人で頑張りたまえ小さき友よ〜はっはっは」

「は……?」

え、いやちよつと待ってよアンタは絶対用事とかじゃないでしょ？
つてこら！？

悠々と姿消してんじゃないわよんでもってニヤニヤだけ残すのもヤ
メ口腹立……」

全部言い終わる前に、チエシヤ猫の野郎は完全にその場から消えて
いた。

「……はあ」

ダメだ、怒る気力すらないよ。

これから1人かあ…

車も無いからずつと歩き出し。

ガツカリして俯くと、スカートの端が破れてた。 ああ、白ウサギ

のお屋敷で聞いた”ビリッ”ってのはコレの音ね。

どっかに引っ掛けて破いちゃったんだ。

姉さんが作ってくれたエプロンドレス。

こんなトコで立ち尽くしてちゃダメだ。早く姉さんの薬を見つけな
いと……。

でもどっちに行けばいいんだろ？

白ウサギは北に行けとか言ってたけど…あたし、どの方向が北なの
かなんて知らないし。

お城の周りは森ばっかりだし。

……どうしよう？

もしこのまま薬が見つからなかったら…。

急に心細くなってきた。

1人で門をくぐって、お城の外に出る。

後ろでバタンツと音がする。

門が閉められたんだ。

…これでもう、白ウサギさんに助けてもらったことも出来ない…。

「お姉ちゃん……」

あれ…？なんだか怖くなってきてる。

なんで？

さっきまであんなにワクワクしてたのに。

あんなに明るかった森は、いつの間にか薄暗い影に包まれてる。

…どうしよう。

これからどうすればいいんだろう。

「アリス」

…今なんか聞こえた？

俯いていた顔を上げたら、森の奥から小さな陰が飛び出してきた。

「アリスっ！！」

「…猫くん…？」

小さな、チエシャ猫と同じ模様の子猫は、あたしの方に大急ぎで走ってきた。

「ごめんね？」

探し物してたら遅くなっちゃって……」

足下で笑う子猫を、あたしは思いっきり抱き締めた。

「…アリス？」

「……………」

「…寂しかった？」

優しく微笑む子猫を見て、あたしは、ゆっくり頷いた。

「ごめんね…これからはずっと一緒にいるね。」

「…いいの？」

涙声しか出てこないのはなんでだろ？

猫君が帰ってきてくれた事が、嬉しくてたまらない。

「いいよ！」

だって、アリスは僕の飼い主だもん」

ヒゲをピクピクさせて、子猫は言った。

「…ありがとお…／／／／」

「あ、そうだ！

どうせバンチョーは仕事しに行っちゃうと思って、乗り物探してきたんだ！

車は運転できないし。」

……乗り物？

その時、目の前の茂みがガサガサと揺れた。

「パピーって言うんだ。僕の友達！」

「……………え、

……………あ……………その……………

……………乗り物ですか？」

茂みの奥から出てきた、巨大な体。

白地に黒いぶちの模様。

全長5メートルはある巨体を揺らして、その生き物は姿を表した。

「……………つ。」

驚愕のあまり石化してまず、ハイ。

「……………わふっ」

あたし達の前でお座りをして、可愛らしく鳴き声をあげた……………デ
ツカイ P u p p y (子犬)。

「いやデカすぎるだろ」

第9話 仕事とアタシどっちが大事！？（後書き）

やっとお城に着いた

それじゃ次回は少くし

雰囲気変えてみます。

どんな風になるかは楽しみに

第10話 Queen and the Invader (前書き)

女王登場です！

今回はアリスから離れたストーリーなので、
雰囲気もかなり変わってると思います。

普段と今回の雰囲気、皆さんはどっちが好きですか？

第10話 Queen and the Invader

城内、最上層部。

薔薇色の絨毯が敷き詰められた、長い廊下。

角灯カンテラの小さな灯りを頼りに、一匹の白兔が闇の中を歩いてゆく。

ギンガムチエックの上着に、胸ポケットから垂れた銀時計の鎖。
左胸には、緋く輝く薔薇の紋章。

廊下の突き当たり。

薔薇の華が描かれたタペストリーが灯火に照らし出されると、白兔は恭しく頭を下げた。

「お呼びでしょうか、女王陛下。」

「…ああ、兎か。」

闇を切り裂くような澄んだ声。

「…非常に残念だよ。」

あと数刻遅れていたなら、その首刈り取ってやれたものを。」

そして、廊下の燭台に、次々と焰が灯されてゆく。

『…入るが良い。』

薔薇のタペストリーが二つに割れ、赤い扉が重々しく開かれた。
その先にあるのは……………【ハートの女王】の間。

「…失礼します。」

騎士を象る【Spade】。

力を象る【Club】。

財宝を象る【Diamond】。

そして、【Heart】は生命と、心を象った。

四種あるSuits（紋章）のうち、何故【Hearts Suit
s】が最高権力を手にし得たのかは定かではない。
しかし、そんな事はどうでもいいのだ。
解っている事は唯一つ。

【Queen of Hearts】こそが、この国を統べる者。
どういう訳か、総ては話の始まりからそう決まっていた。

部屋に足を踏み入れると、白兔はカンテラの灯を強めて、辺りを明るく照らし出した。

オレンジに輝く焰。

踊るように揺らめきながら、部屋の中に光と影を映し出す。

『やあ…うさ公。』

艶やかな声が、薄暗い部屋に響き渡る。

『何故そんな所で立ち惚けている？
さあ早く…此方へ来るが良い…。』

それを聞くと、白兔は深々と頭を下げる。
そして、部屋の隅、薔薇を敷き詰めた天蓋付きベッドへと歩き出した。

ヒュンッ

刹那、何かか空気を裂いて音を立てる。

白兔は、黙って頭を右に傾ける。

「…ふん、またも避けおったか」

ベッドの上から、詰まらなそうな声がする。

一瞬遅れて タンッ という音が壁を貫いた。

「当然です。いくら女王陛下といえども、寝たままでは獲物に狙いが定まりませんよ、お行儀の悪い」
少し呆れたように兎が言った。

「はんっ

五月蠅うるせいわ、腑抜けのうさ公め。」

もぞもぞと音がして、声の主がベッドの上から顔を出す。

燃えるような緋に、漆黒が混じり合った髪。

薔薇が刺繍されたゴスロリ調のネグリジェのまま、その女性はゆっくりと体を起こした。

「御機嫌麗しゅう御座います、陛下」

女性の顔を見つめたまま、白兎は壁から銀のフォークを引き抜いた。

「的を外したのは私が寝起きだからだ、このうつけめ……。」

寝癖のついた頭ををぐしく掻きながら、女王は眠そうに口を開く。

「…で、小娘はどうしておる？」

「…やはりお気づきになりましたか」

フォークを机の上に置いて、白兎は女王から放たれた第二撃をキャ

ツチする。

「むっ……」

今度は掴みおった」

「アリスでしたら、帽子屋の下へ行かせました。

姉の病に効く薬を探しているとの事でしたので」

「…帽子屋？」

奴に引き合わせるという事は……目的はその先にいる毒虫か。」

「ワームなら薬草について知識が豊富です。

ただ、現在グリフォンが【Grief】の下を訪ねて居りますので、歩かせてしまう事になりましたが」

「はっ、過保護めが。

案ずるでない。」

ベッドの上で頬杖をついて、女王は妖艶に笑う。緋色の瞳が、白い小動物を捕らえた。

「小娘は今、犬畜生に乗って移動中だ。

どうやら例の化け猫の息子の入れ知恵らしいな」

緋い瞳は宙を泳ぎながら、再び白兔に焦点を合わせる。

「…”あの生き物”を連れ立たせるつもりか？

いくらAliceの目付役とはいえ……」

監視が黙って居らぬかも知れんぞ？」

「…チェシヤの、父親としての判断です。彼の意志に口を出す権利など私には御座いません。まあ監視は気を悪くするでしょうけどね」

「」°.....「」

ギ
ギ
ッ

w	m	m	w	%	m		1	5	-
w	w	w	w	「	t!	£%	-	5	-
		m	t	-	m	ア	-	5	-
		w	w	+	w	ヱ	-	5	-
		j	t	w	イ	<	-	7	-
		b	w	j	タ	@	-	4	-
		j	w	j	j	,	-	4	-
		w	j	w	x	'	-	4	-
		w	w	m	m	ゝ	-	4	-
						°	-	2	-
						、	-	2	-
						・	-	2	-
						ー	-	2	-
						あ	-	2	-
						ハ	-	2	-
					%	<AGDJ	-	9	6
					□	ヤ	-	6	1
						!	-	5	4
						キ	-	2	4
						+	-	2	4
						¥	-	2	4
						¥	-	2	4
						%	-	2	4
						タ	-	9	6
						サ	-	9	1
						ナ	-	9	1
						+	-	9	6
						ヤ	-	9	0
						t	-	9	0
						j	-	5	0
						.	-	1	0
						、	-	1	0
						》	-	9	0
						x	-	9	0
						÷	-	5	0
							-	1	0

「女王様……？」

「貴様も感じたか、兎」

黙ったまま頷く白兎。

「……チツ……」。

面倒なことになった……」

腰まで伸びた髪を靡かせ、女王は、苛立たし気に宙を睨んだ。

「……なにかが入り込んだか……？」

えへ、ごほんっ

皆さんこんにちは。

毎度お馴染み、アリスです！

今あたしがどうしているかといつと……

「ひきゃああああ速い速いするーだつんぷりいいずうううつっ
！！」

子犬…には見えないデッカいわんこに乗っかって、北の森を疾走しております。

快速です。

むしろ暴走です。

「子猫君くどうにかしてえええっ」

「パピー速すぎだよっ

アリスが限界だよ

落ち着いてええ」

「わふわふっ

ワオーンッ！」

白ウサギさんの友達に会う前に天国へ召されそうです。

「わふっ？」

キキーンッ（急ブレーキ）

急ブレーキです。シートベルトをしっかりお締め下さい。

「んなもん犬についてるワケがねえエエエっ！！」

ガクンッ

「きいやああああ！？」

奇声あげてごめんなさい。

犬の背中から転がり落ちて、あたしは地面へとまっさかささま。

まさかこんな死に方するなんて思わなかったなあ……。

「…おいっお嬢ちゃん！
大丈夫かっ！？」

…誰かが叫んでる。

誰だろ。神様？

ここは天国かな……。

「いえ地獄です。」

「何ですとおおをつ！？」

そんなはずないよ確かに善行も少ないしお祈りもサボったしつまみ
食いもしたけど地獄行きにされるような覚えは……！？

はっと我に返った。

目の前には、茶色いウサギが一匹。

「三月、お前イキなり何言ってた？
あと……お嬢ちゃんもどうした？？」

声が出た方を向くと、変な表情を浮かべたお兄さんが立っていた。
頭には深緑色のシルクハット。
ん？帽子になんか紙みたいなのが張ってある。
なにになに……

「In this Style 1016」？

「いや〜何かあのタイミングで言ったら面白い事になるかな〜って
ほわほわした声で茶色いウサギが言った。

「……あの〜、こじこじ……ドコですか？」

「は？ドコって……」

お兄さんはウサギと顔を見合わせると、こっちへ振り返って言う。

「お茶会の会場だけど？」

メーデー。

白ウサギさん……

…目的地、ここで合ってるのかな…？

第10話 Queen and the Invader (後書き)

普段と違う《猫とアリスと45口径のメルヘン》 いかいだった
でしょうか？

ひょっとするとこんなカンジの話もこの先増えていくかも。

ちなみに途中の文字化けみたいなのは、時空が歪んだぞ〜！ってな
感覚です。

実は暗号が隠されています！！ヒントはケータイ！

ハートの女王登場。

彼女は20代前半のセクシーお姉様なイメージです。

原作と比べてもあんまり情緒不安定って感じじゃないですねー

どちらかと言えばクールビューティー。

白ウサギとのやり取りをからすると、少し子供っぽい所もあるのか
も。

では、次はお茶会に突撃するやも？
お楽しみに〜

第11話 収拾のつかないお茶会。

「アリス”の娘？お嬢ちゃんか！？」

シルクハットを被りなおしながら、お兄さんがあたしを見る。

「あ、はい。

あたしもアリスって名前なんですけどね」

あたしは今、三月ウサギっていうウサギさんの家にいます。
彼の庭園でお茶会をやってるんだとか。

じ～～～～

…あれえ？

なんか、ウサギがやたらこっち見てるんだけど。

「ん～～、ホントに”アリス”の子供なのかなあ？」

めっちゃ疑ってるよ。

「ほ、本当だよ！

信じてくれない？」

「むむう～。

だって”アリス”って、前あった時はボクくらいの身長だったよ？」

ティーカップをカチャカチャいわせながら、茶色い毛並みを震わせる。

「そりゃ”アリス”がまだ子供だったからだろ」

のんびりとお茶を啜りながら帽子屋が言った。

「あれから何年も経ってるんだよ、”向こう側”は。

”アリス”もとつくに大人になって、子供の1人や2人くらい……」

「ふん、そつか。

子供の1人や2人3人4人……総勢18人か」

「いや多いよっ!？」

何人産んでるのよ鼠じゃあるまいしっ!！」

こ、このウサギ……かわいい顔してとんでもない事を……。

「およ？」

子供はサッカーチームが2つ出来るぐらいが賑やかでイイかなって」

「……三月、お前は色々と間違ってるよ」

そ、その通りです!

ズバツと言ってやって下さい帽子屋さん!

「サッカーは1チーム11人だから22人じゃないと2チーム出来ないだろ？」

18人なら野球だよ。

ベースボール」

…そこですか？

「そっかあ！

じゃあメジャーリーグ目指すんだねアリスは」

「……目指してないし家族内ベースボールもやってないわよ！…！
人の家庭を何だと思ってるんですかアンタらはっ！？」

「……………怖いねえ。」

「……………怖いなあ。」

なるほど、娘だけあって”アリス”にそっくりだ！」

そっくりって……

ママもこんな風に怒ったって事が。

そりゃ誰でも怒鳴りたくなるってのこんな……？

…あゝ、なるほど。

「…こりゃ確かに、”イかれたお茶会”だね。」

「ふふっ。

この程度は前菜にもならないよ。」

片眼鏡を輝かせて、ニヤリと笑うMad-Hatter。

「何はともあれ、俺達のお茶会へようこそ！

アリスも紅茶を楽しんでいってくれ。」

…楽しみって言われても、あたし急いでるんだけどなあ。
子猫君ともはぐれちゃったし。

「…まあ、せつかくだしね。

紅茶の一杯でもご馳走にならなきゃ失礼かな？」

「そーだよっ！！

さあアリスじゃんじゃん飲んでってね！おかわりイーツパイあるからね」

「あのね……

一杯だけでイイんだけどな？」

あたしのツツコミも聞かずに、三月ウサギは目に映るカップすべてに紅茶を注ぎ始めた。

だからそんなに飲めないってば！！

それにしても、お茶注ぐの上手いな。

両手にティーポットを構えて、一滴もこぼさずカップにお茶を注ぎまくる三月ウサギ。

まさに二刀流か……。

「あ……

…ところで帽子屋さん、子猫くん見てませんか？

途中ではぐれちゃったみたいで……」

なんだかんだで、まずは子猫君に会いたい。

今頃どうしてるんだろ？あたしを探し回ってたりしたら、申し訳

ないなあ……。

「子猫？」

…ああ、チエシャ猫んとおチビさんか！」

ぼんっ！

と手のひらを打つと、帽子屋は唇に指を当てる。

「ちよっと待ってるよ〜」

…何するんだろ？

なんだか口笛を吹いてるみたいだけど……音が聞こえないよ？

「…あ！

もしかして犬笛！？」

それを聞くと、帽子屋さんにはっこり笑って頷いた。

「そのとおり！

これですぐに来てくれるはずだよ」

……ドドドドドドドドドド…とたんに地面が小刻みに揺れ出した。
地震…じゃなくて、これって…？

「あ、ほら来た来………」

ドツカアアアアンツ！

「……あ…あわわ………」

…轟く地響き。

帽子屋さんの言った通り、すぐにあの巨大な子犬がすっ飛んできた。

…帽子屋さんの真上に。

「わふっ
」

ああ、お利口だねパピー。呼ばれたらちゃんと来たもんね。
よーしよし。

ただ、駐車場所にはもうちつと気を使おうよ…。

「…ぼ、帽子屋さん……？」

ご無事ですか……？？」

普通にご無事じゃないだろうけどさ…。

恐る恐る、パピーの足の下に呼びかけてみると……
わずかに

「平気だよーヤッホーイ」と声がする。

よかった生きてたあ…。

てか「ヤッホーイ」って！

何でそんなに元気そうなの！？

タフだな〜で済む耐久レベルじゃないでしょ今は！！

よく見ると、パピーの足の下から手を振ってる。…ご存命でなによ

り。

「アリスみてみて」

全部のティーカップにお茶注げたよー」

振り返れば、三月ウサギがテーブルの前で「エッヘン」って顔をしていた。

白いテーブルクロスの間々まで紅茶入りのカップで埋め尽くされてるし…アンタは相方が踏み潰されてんのにそれでいいんかい？

「…あゝもう、ツッコミばっかりだと疲れる…」

別に普段のあたしがボケやってるって意味じゃないからね

「これじゃウサギさんの友達に会いに行けないじゃん……。
うー、とにかく！

まずは子猫くんに会わなきゃ！」

そう、重要なのは子猫くんなのだ！

あの子がいなきゃ道がわかんないし…

「ああ可愛いアタシの子猫くん、今すぐ抱き締めないと禁断症状が…。」というのが主な理由。

さて、そうと決まれば…

「パピー！」

子猫君が背中に乗ってるでしょ？

早く降ろしてあげて！！」

あたしはお座りしている（帽子屋の上で）パピーに向かって叫ぶ。

「……………わふ？」

”わふ？”って……………

「ちよつと……………なによその”ぼくは知りませうん”みたいな態度は

……………」

……………まさか。

「……………ちよ、ちよつとパピー背中見せなさい！

お座り……………はもうしてるから……………

ふせっ！！」

「わっつっ！！」

子犬は素直にいう事を聞いてくれた。

「よーしいい子だねパピー」

と言いながらあたしはパピーによじ登る。

「子猫くーん？どこ？！？どこ行っちゃったの！？」

あれ〜？
やっぱりいないし！

「パピー……？」
もしかしてあなた、子猫くんまで途中で落としてきたんじゃないで
しょーね!？」

「う〜〜わんっ
肯定か!？」

その返事は肯定なのか？

「チクシヨ〜このダメわんこめっ!
今度プロのブリーダーにしつけてもらえー!!!」

とにかく子猫くんを探しに行かないと!

パピーから飛び降りると、あたしは森の中に突撃する。

「うわーん!
子猫くんどこだよーっ
出てきてよ〜っ?」

バスンッ

「あいたっ!!!」

突然、なにかにぶつかって、あたしは地面に倒れ込む。

「いったあゝ。」

もーなんなのよ今度はあつ!?!?」

ジャキンッ

「……………へ?」

顔を上げると…目の前で光る…緋い刃。
首筋にも、冷たい金属の感触が…?」

「この小娘が…。女王陛下のお身体に体当たりとは無礼千万!!
貴様、覚悟は出来ておろうな…?」

「ひゃ…ひゃい?」

気づけば、あたしは数人のトランプの兵隊に取り囲まれてました。
お城の門番とは…なんか雰囲気が違うなあ?
全員が緋く輝く鎧で武装して、馬鹿みたいにでっかい斧を構えてます。

「あ…あはは…」

おっきな斧ですね。

みなさん、これから薪割りにでも…?」

「ぬ……？ぐべはっ!？」

突然、トランプ兵の1人が宙を飛ぶ。

…ええ、あたくしです。

やってやりました。

「アンタら……言うに事欠いて”たかが猫の一匹や二匹”だあ……？
ふざけんじゃないわよ。…世界で最も尊い生物はねえ、子猫だって
相場が決まってんのよ!！」

さあ次はどいつだまためて燃えるゴミに出してやらあっ!！」

ジャキンッ

「……………降伏します。」

…すみませんやっぱり無理です。

何かする前にねじ伏せられてしまいました。

しょうがないよね。あたし女の子だもん。

だいたいあいつら武器持つてるし勝てっこないですわー!！」

「うわああん

離せこんちくしょー!」

「この小娘…!」

おい、見せしめに猫を叩き斬れっ」

「……………は?」

え?

ちよっと…なに言ってるの?

本気……………ですか……………!?

「……………っ!」

子猫が怯えたように息を呑んだ。

ヤバイ。

どうしよう……………コイツら本気だ。

「っ……………猫くん逃げてえ!」

そう叫んだときにはもう遅かった。

…子猫の小さな体には、すでに斧が振り下ろされた後だった。

第12話 女王様〃姉御肌？（前書き）

前회가ちょっとグダグダでしたねえ…
申し訳ないですっ！！

まあ今回もグダグダなんですけど、女王様が再び登場ですっ

第12話 女王様〃姉御肌？

…なにが起こったの？

なんで？

なんで…子猫くんのアタマが、地面に転がってるの？

「い……や……あ……」

ひどい。

…酷すぎる。

誰か…夢なら起こして。

無かったことにしてよ。

こんな…悪夢は嫌だ。

こんなの…いや。

いやだよ。

やめて…

猫の小さな頭が、あたしの顔を見つめている。

「……アリス」

「いやああああああああアアアアッ!」

「いやアリス?

僕へーきだから。

まだ生きてますっ!」

……………え?

猫くんが喋った。

…なんで?だって…アタマだけなのに…?

…アタマだけ?

そつえば、体が見あたらなひんだけど…

斬られたんなら、もう半分が残ってるハズであつて…………。

……………え?

「……なんで??」

よく見りゃトランプ兵達までビクリしてるし。
斬った本人はシヨックで失神してるよ。

ダメじゃん。

「こ、ここの子猫くん!？」

生きてる!!

なんで?どうやって…」

「やだなあアリスったら。僕の親が誰なのか、もう忘れちゃったの?」

得意そうに笑う猫くん……のアタマ。

親?

親って…つまり、チエシヤ……

「……………あ!？」

次の瞬間。

猫くんの首の付け根から、スウツと胴体が姿を現し始める。

「僕だつて”チエシヤ猫”の子供だよ?

フン。

はじめから首の無いものは斬れないって話、本当だったみたいだね」

尻尾の先まで完全に戻ってきた猫くんは、ぼーぜんとしたままのア
タシの胸に飛び込んだ。

「ごめんねアリスっ
びっくりさせちゃった？」

…なるほど、謎はすべて解けた。

あの馬鹿トランプが斧を振り下ろす直前に、体を消しちゃったワケだ！
だから斬ろうにも斬れなかった……！

「…な、なんか驚いたっていうか頭イイ！っていうか……

ほんとに…死んじやったかと思っ…た…」

……よかった。

本当に…よかったあ…

「…う……うわああああんっ！！

ばかぁ〜猫くんのおばかぁ〜っ」

「あ、アリスっ!？」

「ごごごメンー!!心配させちゃったよね!?!
もう平気だよ……」

『…やれやれ。』

母親に似て、無駄にやかましい小娘だな。』

安堵の涙を流しきる前に、なにやら気迫のある声が響き渡った。

「ちよっ……誰よ？」

今のはどっからどー見ても感動のワンシーンでしょ!？

どーしてくれんのよ台無しじゃ……」

そう叫びかけて、あたしは目の前の人物に目を向ける。

……あれえ……。

トランプの兵隊達が脇にどいて、慌ててひざまずいてる。

緋いロングドレスに、ハートの模様がいっぱい。胸には薔薇の飾り

……。

そして、赤と黒の混じった長い髪と……頭の上のそれ、王冠ってヤツですか？

「あ……あはは……

もしか……しなくても……

”ハートの女王様”？」

『……いかにも。』

私はこの国の女王であり最高権力所持者。

……ハートの女王だが?』

あらあ…随分と綺麗なお声で…。

でもそれ以上に、気迫が凄いです。

…なに？オーラっていうの？

とにかく超絶美人だし。胸デカいし。色気とかカリスマ性とかなんとかがもうムンムンで……

「色気ムンムン…」

ってああ！？

口に出しちまったあ！

「き、き貴様つ女王陛下に向かってななな何てことをぐっ／＼／＼／」

トランプの1人があたしに武器を向ける。

…てかアンタは動揺しすぎでしょ…

絶対そついう目で見てたな女王様のこと。

「落ち着かんかNo.2。」

あ、女王様が2番のトランプを踏み倒した！

ヒールで踏んでるよヒールでっ！

「貴様等もだ4、3、7、9。

…戯け共が……。

こつべを下げる愚か者。

我が客人……”アリス嬢”の御前であろうが？」

「あ……アリス様っ!?
そうとはつゆも知らず……
か、数々の無礼をお許してください……!」

すごい……トランプが一瞬でひざまずいちゃった。

あたしと子猫くんは、しばらくの間、女王様に見とれてました。

カッコイいゝ／＼／＼。

ヤバイよ、惚れてしまいますよ女王様。
いや、むしろ姉御っ!!

「てか……え?
あたし客人っ!?!」

「なんだ、不満か?
ああ……鋭い目つき。
なんかステキ……／＼／＼

「い、いえ滅相もございませんっ!
むしろ大歓迎……じゃなくて、有り難き幸せ……。」
「……ふふっ。」

先程の我が従者達の無礼を詫びよう。

この紙屑共めが、命令も出しておらんに無様にはしゃぎおって…」
ギロン。

と女王様の眼がトランプ達を見る。

睨む…というより、凝視してると感じてです。

…よけい迫力あるんだよなあ。

「して、その仔猫。

身体は痛まぬか？見せてみよ。」

「は、はいっ！」

猫くんが、慌てて女王様のほうに駆けていく。

なーんだ。

ママが散々まいってたから、よっぽど嫌な人だと思ってたのに…
すごくイイ人じゃん！

「おそれいますっ

女王陛下…？」

シャキーンッ。

「……あ……あわわ……？」

突然、猫くんが急ブレーキ。

それもそのハズ。

女王様……その猫くんめがけて突き出したフォークは…なんですかね？

「…なるほどな。」
「…………え？」

フォークをおでこに突き付けられてブルブル震えてる子猫くん。

そこに女王様が…………軽くでこぴんをくらわせた。
ぺちんっ

「あたっ!？」

「お前…………まだ頭は消せんのだろう？」
「…えっ？」

驚いた表情をする子猫くん。

女王様は、少し呆れたように息をついた。

「体を完全に消せんとは…………チエシヤ猫と呼ぶにはまだ幼すぎるな。
…まあ、先程のやり取りを見ていた限り、存外に使えんワケではな
いようだが…少々心細い。
頭以外を隠せたところで、脳天を突き抜かれれば死んでしまうのだ
し…

…………とっ、済まない。此方の話だ。」

「は…はあ…」

驚いて開いた口が開きっぱなしのあたし達を見て、女王様はくすりと笑った。

「…まあよい。」

ところで、そなたは姉君の為に薬を探しているのではなかったのか？
白兔から話は聞いているが…」

「あつ。」

実は、紹介された白ウサギさんの友達にまだ会えてなくて…」

「まだ会えていない？」

そなたの後ろにいるではないか、ほれ」

そう言つて、女王様があたしの後ろを指差す。

「う、うしろつて…？」

「おーいアリス〜！！」

まだお茶会は終わつてない……
つて女王陛下じゃんっ！？」

振替つたら、そこにはティーカップを片手に、パピーに乗つかった
帽子屋がいた。

「…つてええ〜っ！！」

まさか ”白ウサギさんの友達” って…」

「あ、そうそう！」

なんか白ウサギのところから連絡きてさ、薬探してるんだってな〜」

なんかへらへらと笑つてらっしやる。

「あ…あのねえ！？」

あたしは一刻を争うんだってば！
なんでそれを早く言わないのよアンタはあ〜っ！

「まあ良いではないか。それより、お茶会とやらに私も混ぜよ。」
「え？」

まあ…こちらこそ喜んで…？」

まごつきながら、帽子屋は頷いた。

「無論…アリスも来るだろう？」

「へっ!？」

あ、あたしは…」

「…来るだろう…？」

「…なあ。」

「…は、はい。」

う、有無を言わさぬ視線…。

やっぱりこの人最強だ。間違いない。

「よし。」

もの共、お茶会へ向かうぞ」

「ははあ〜!」

どうやら、お茶会はまだ続くみたいですね…。

いいのかなあ？
急いで薬探したいんだけど……。

「まあいいんじゃない？
女王様だつてアリスの事情は知ってるらしいもの、ちゃんと考えがあるんだよ、たぶん」

子猫くんが、あたしを見上げてにっこり笑った。

「そうかなあ……？」

うん、そうだね！

悩んでも仕方ないか……」

それにしても、帽子屋はパピーに踏みつぶされてたんじゃなかったの？

骨の一、二本はイっちゃってると思ったのに……

この世界には、何かとすごい人ばかりです。

第12話 女王様〃姉御肌？（後書き）

いつもご覧頂いて、ホントに感謝です！
ありがとうございます…（嬉し泣き）

思えばやっとの事で12話…。

実はまだ本編にも入ってない！！

グリム童話出てないし。

ここまでやってこれたのは、今これを読んでくださってる皆さんの
おかげです…！

感想などあったら、お気軽に書き込んで下さいませ

読者の皆様への感謝を忘れず、これからも頑張ります…！！

では、日付変わっちゃいましたが…
ハッピーバレンタインっです

第13話 The illegal One (前書き)

なかなか更新出来なくてごめんなさい！

では、本編をお楽しみくださいませ。

第13話 The illegal One

…ハートの女王のお城から、さらに西へ西へ。

その先にあるのは、薔薇、ばら、バラ。

大量の薔薇の垣根で創り出された、女王陛下の大庭園。

庭の中には見張りがいっぱい。

今日の当番はスペードの兵隊たち。

侵入者を拒むため？

いいえ。

彼らの役目は迷い込む人を助けること。

あまりに広大なその庭は、どうも迷路と呼ぶ方がしっくりするので
す。

「…ふあゝ。

今日もヒマだの」

「ほれら番、ボサツとしてしていると自分まで帰り道が分からなくなる
ぞ」

思わずあくびをしたスペードの5に、スペードの7が言いました。

「おつといけない。ええと、確かここを右に曲がって、それから左、その次も左で…」

「まったく…こんなにデカイ庭をお造りになるんだもん女王様ったら。」

きつと今日も、ネズミかトカゲあたりが迷い込むぞ。」

ガザガサツ

おや？

薔薇の茂みから、かすかな物音が聞こえてきました。

「やれやれ…」

また誰か迷い込んだみたいだな。

5番、ちよつと見てきてくれよ」

「はいよ。」

さあして、今度は誰だろな？

ネズミかいな？」

スピードの5は、眠い目を擦りながら揺れた茂みの方へ歩いていきます。

「それともトカゲかな？ウサギかな？

さして、出ておいで。」

出口まで連れてってあげるから」

曲がり角を3つほど通り過ぎた時。

ガサツ

また、茂みが揺れました。今度はとても近くの様子です。

「おお、そこにいたか」

スペードの5が振り返ると、後ろの茂みから、迷子が顔を出していました。

「よしよし、こっちへおいで。外に送って行ってあげよう。」

はて、君はなんて名前だったかな？

ネズミかい？

トカゲかね？

ウサギでもないようだし…なんだろねえ」

そう言つて、スペードの5は首を傾げました。

迷子の動物は、スペードの5がまだ見たことのない生き物だったのです。

「いや待て待て。」

答えなくてもいい、当ててみせるから」

迷子は何か言おうとしたのですが、スペードの5は頭のいい所を見せたくて、張り切っています。

「そうだなあ……」

カエルにしちゃ毛が生えてるし…

チヨウチヨでもないな、羽根がない。

豚よりは口が大きいし、じゃあビーバーか。

違う？

うーん、ビーバーにしちゃ耳が大きいもんな。
まさかマウンテンゴリラじゃあるまいし…。

そうか分かったぞ、さてはジャイアントパンダってヤツだな。
そうなんだろう？ジャイアントパンダ！」

「…豚でもカエルでもパンダでもネエよ。
てめえ喧嘩売ってんのか喰い殺すぞ？」

迷子の動物は、耳まで裂けた口を開くと、よだれをたらして言い
ました。

「お”い紙屑野郎。
大人しく答えるや…」

【Alice】とかいうガキ、……今どこにいる？」

「……………？」

お茶会へ戻る道の途中。

帽子屋は女王様と話をしてる。

「いやあ」

まさか女王様がこんなとこまで遊びに来てくれるなんてなあ。
俺もうビツクリ」

「たわけ。

近くに用があつたのでアリスを見に來ただけだ。紅茶を一杯飲んだら帰るからな」

「…アリス、どうかしたの？」

「え？」

あ、ううん何でもない！」

「そう？」

急に立ち止まったから、どうかしたかなくて」

あたしの足元に寄り添いながら、子猫くんが言った。

「…ふふ、ありがとう。

ほら急ごう？」

置いてかれちゃうよ」

何か…聞こえたような気がしたけど………？

気のせいだよね！

「行こつ猫くん。

ほら帽子屋さん待って…

っていないし?!」

前方を見れば、200メートルほど先に女王様と帽子屋の姿がありました。

「おーいアリス」

早くおいでよ」

「ふざけんなホントに置いてくヤツがあるかつ!!」

あつこら走るの禁止!

しかも足速いんだもん帽子屋のバカヤローっ

うわーん待ってよおー!!」

第14話 女王様とティータイム（前書き）

最近おもったこと。

アリスと”アリス”って表現がやたら出てきて…
ややこしいわっ！！

ちなみにアリスは本作の主人公。

”アリス”は主人公のママで、原作《不思議の国のアリス》の主人公です。

第14話 女王様とティータイム

…緑の垣根に囲まれた、小さな庭園。

その真ん中に、長四角のテーブルが一つ。
白いテーブルクロスに沢山のティーセット。

そこで、紅茶を飲んでいる人影の1人……

に思いつきり石を投げつけました。

ゴンッ

「あいたっ」

「あいたっ”じゃないわよ……もっと”ぐはあっ”とか……叫ばせるつもりで投げた……のに！
待てっ……て、言ったでしょ……バカ！！」

肩で息をしながら叫ぶアタシ。

全力で走って帰ってきたばかりなんです。

「うう……」

ひどいなあ。そんなこと言ったら、女王様だって待ってあげなかつたじゃん」

「女王様はいーのー！」

「えー、ズルいだろ」
とかほざいてる帽子屋の横では、女王様が静かに紅茶を飲んでらっ
しゃいました。

「…ふう。

相変わらず旨い茶を入れてくれるな。
では、私はこれで…」

「え!？」

女王様もう帰っちゃうんですか?」

「もつとゆっくりしてきなよー

せっかくなんだからさっ」

「いや、しかしだな…

一杯飲んだら帰る、と先程にも言っ たらう?」

「そつか…

女王様ですもんね。忙しいんだから仕方ないか…。」

想像してたよりイイ人だったから、仲良くなれるかなって思ったん
だけだなあ。

もつとゆっくりお話したかったな。

「……そ、そんなに名残惜しいのならば…
もうしばらく居てやっても構わんが?」

「え?

いいんですか!？」

「やったあ」

「良かったねアリスっ」

なんでかわかんないけど、女王様ってスツゴク優しいじゃん！
最初のうち怖がってて損しちゃったな。

「あの〜ツンデレ様」

「…ッ!？」

誰がツンデレだ誰がっ」

「お〜さすが女王様。

ツンデレなんて外界の言葉も通じるんですね〜」

ニヤニヤ笑う帽子屋を見て、女王様の眉間が歪む。

「帽子屋…キサマ、その首はね飛ばしてやるつか…っ!？」

「…やっぱり…」

女王様って首はねるのが好きなんだ…。」

「なっ…あ、アリス？」

急に顔を暗くしたあたしを見て、女王様がうるたえる。

「あーあ。

女王様が首はねるなんて言うから〜」

そう言うと、帽子屋は笑いながらあたしの頭を撫でる。

「怖がらなくていいよ〜あんなの冗談なんだから。

どうせお母さんから、女王様は人の首はねまくるスプラッタ馬鹿だ

とか聞かされてたんだろ？」

…実をいうとそうだった。ママの話聞いた限りでは、女王様って情緒不安定ですぐ人を処刑するって聞いてたから……小さい頃とかは、話を聞く度にスゴく怖がってたんだ。

「…ごめんなさい…」

「アリスが謝らなくてもいいって！
ねえ女王様！」

「う、うむ。」

怖がらせてしまったのなら謝る。済まなかったな……」

女王様がひどく焦った顔をしてる。

よかった…やっぱり優しい人なんだ。

「それはそうと帽子屋。スプラッタ馬鹿というのは聞き捨てならんな処刑しても当然な程に腹が立ったのだが」

「そそ、そうだアリス！」

紅茶もう一杯どう!？」

女王様の言葉にビビる帽子屋。

コイツは…実際に首はねられても仕方ないと思うんだけどなあ。

「…まあいいわ。」

それじゃもう一杯…」

子猫くんも紅茶いる？」

「ん、」

僕は猫舌だから、出来るだけ冷めたのがいいな。」

「熱くない紅茶ね！」

ちよつと待つてて…」

お、テーブルのすみっこにティーポット発見！

試しに触ってみると、全然熱くない。ちよつとよく冷めてるわね。

「うん、これなら大丈夫そう。

猫くんカップ出して」

「はい」

ポットを持ち上げてみると…あれ？案外重いな。まあいつか。

「それじゃお茶注ぐね」

ポットを持ち上げて、紅茶が出るようにゆっくりと傾けた。

「…痛い痛い！

ちよつと女王様…ごめんなさいってばホントに骨折れちゃいますか
ら…」

つてああ！？

そのポットは……！」

デロン。

……はい？

効果音”デロン”ですか？

お茶が出てくる音とは違いますよね。

あたしと猫くんは、ポットの口へと視線を動かした…。

「ひいつ!?!」

ポットの口から…なんか出てます。
長くて細くて…

毛が生えてる…

ってなんじゃこりゃあああつ!?!

「いやあああコレ紅茶じゃないつ!?!」

驚いたあたしは、そのままポットを放り投げた。

「あいたつ!?!」

あ、帽子屋に当たった。

宙を舞う謎のポットは、女王様が見事にキャッチしました。

「む……これは!?!」

「な、なんなんですかそれえ!!
ポットから…ポットからしっぱが!
しっぱがああ」

「まあ落ち着けアリス。やれやれ、本当によく騒ぐ子供だ…」

女王様は苦笑いをして見せる。

そして、なんのためらいもなくポットのフタをとった……。

「おいヤマネ。

貴様またポットの中で寝ているのか。」

え？

や……ヤマネ？

「……むうう……。」

むぎゅ？

もう朝なのですかあ？」

ポットの中から顔を出したのは……

なんとも可愛らしいネズミさんでした。

「ふわああ。

まだ眠たいですう……」

……ヤバいかわいい／＼／＼。

ポット投げなきゃよかった。お持ち帰りするべきだったか……残念。

第14話 女王様とティータイム（後書き）

19世紀にはヤマネをティーポットに入れて飼うのが流行ってたとか。

ホントかどーかは知りませんが

それにしてもアリス、浮気癖ありそうですね…

第15話 ヤマネのアルバム(前書き)

ヤマネが登場です！

The Dormouse。

彼はいつも眠そうで、ゆっくりまったりしゃべります。

寢床は専用のポットの中です。

新たな愛玩動物(！?)の出現に、アリスは平常を保てるのだろうか!!

保ってくれなきゃ困るんですけどね…。

第15話 ヤマネのアルバム

「ふわわあ…。」

あれえ？女王様あ。

いらしてたんですか？」

その生き物は、ポットから顔を出した状態のまま、ペーりとおじぎをした。

「……ヤバい。」

コレが…眠りネズミ（ヤマネ）か……！！

想像以上の可愛らしさです。大ダメージだ。

ああ…ズルいよそんな寝起きの姿（しかもポット入り）というステータスを持つて出現するなんて…。

じ、自心が……

「あ…アリス、大丈夫？なんかスゴい震えてるけど」

「だ、大丈夫だよ猫くん…。」

あたしは負けない。

あたしには猫くんという心に決めた相手が…

色即是空

色即是空…。

む…無心…無心になるのよアリス…！！」

「おー、
なんか面白い事になってるな、アリス。」

帽子屋が、興味深そうな目でコツチを見てる。

「ぼ、帽子屋！」

のんきに観察してないでヤマネをどうにかして！とにかくポットから出さすくらいしないとアタシもっ……ハアハア」

「……なんか本当にヤバそうだな。

あ、

じゃあこんなのはどうだ？」

こんなのって……？

「ほら出てこいヤマネ」

「あう」

帽子屋はポットからヤマネを摘み出すと……

「ふみやつ！？」

あるつことが猫くんをポットにつっこんだ。

「あ、あああ……！……！」

「仕上げにフタを乗っけて……と。」

ポットのフタを頭に乘せて、ポットから顔をのぞかせる子猫……。

「ふ、ふにゃあ……」

妄想力が及ばない方は、画像検索でもしてごらんなさい。最近では鍋の中で寝てる猫とかも話題になってるんだから。猫好きにはたまりません。たまりませんよ……！！

「こ……子猫くん……」

「あ……アリス？」

「ゴチになりまああああああすつ……！！」

「落ち着かんか」

ゴンッ

女王様の手刀が、あたしの眉間にヒットしました。

「……という惨事を経て、今現在に至るワケだけども……。」

「あ……アリス、おでこ大丈夫か？」

済まない、つい力を入れてしまって……。」

うっ……痛い。

いや、アタシが悪いんだけどさ。

「だって…可愛かったんだもん…グスン。」

「はいはい。」

誰も怒ってないから、もう泣かないの〜」

猫くんがほっぺを舐めて慰めてくれました。

「それにしても…アリスの愛情表現ってなんかこう…鬼気迫るものを感じるよなあ」

帽子屋が1人で納得したように頷いてる。

なんかムカつくなあ…

そんでもって、この言葉を聞いたヤマネがやっとあたしに気付いた。

「……………ほわっ？」

もしかしてえ…アリスさん、帰ってきたんですかあ!？」

「あー、アナタが思ってる”アリス”とは別物なんだけどねえ…。いちいち説明するの面倒くさいんだけどなあ」

〜〜説明中〜〜

「…とまあ、そういうワケなのよ。」

「へえ〜。」

”アリス”さんに娘さんが出来てたなんて、知らなかったなあ〜。」

納得してくれたらしくて、ヤマネは寝ぼけ眼をパチクリさせた。

あ〜んカワイイ。

でもあたしはやっぱり猫派だったことが、はっきりわかったよ。さっきの一件で……。

我ながら、あそこまで理性崩壊するとはねえ。

「あれ？

そういえば女王様って、あたしが前の”アリス”の娘だったこと、始めから知ってるカンジでしたよね…

あ！よく思い出せば猫くんも！！」

「僕はバンチョーから話を聞いたことがあったから…。

僕が産まれたのは”アリス”がこの国から帰った後だし、実際はどんな娘なのかは、よく知らなかったんだけどね。」

猫くんが、あたしの膝の上で答える。

バンチョーって…あの白うさぎが知ってたのか。それこそ何でなのか気になるし！

「わ…私はだな…

その…」

「あ。それと、ママから聞いた話だと、なんでか女王様がメチャクチャ怖い人みたいだったんですよ。何かあるとすぐ処刑！みたいな

でも実際はそんな怖い人じゃないし……ウチのママって、女王様と仲悪かったんですか？」

「……………っ。」

わ…わたし…そんな風に言われてたのか…？」

あれ？

なんだか女王様…落ち込んでるみたい？

「あはは〜。」

まあまあ女王様あ！

イイじゃないですか。何しろ昔の話なんですしい〜」

「……………帽子屋。」

突然、女王様が帽子屋の肩を掴みました。

肩の骨が粉碎されてそんな勢いです。

「あ……………」

あは、調子乗りすぎちゃいましたかね。まいったなこりゃアハハ（

滝汗）……………」

「ちよつと来い。」

大事な用があるから……………なあ。」

あ〜、帽子屋がどこかに連れてかれちゃった。

死なない程度にボコボコにされるといいんだけど……………。

「はあ…結局ハートの女王様の事はわからず仕舞いか。」
帽子屋も女王様もどっか行っちゃったし……
それにさつきから、三月ウサギの姿も見えないんだよね。
どこ行ったんだろ？

「…まあいつか。」

あたし達、そろそろ薬探しに戻らせてもらわなくちゃ。
ばいばいヤマネさん」

「あ、ちょっと待ってください…」

あたしと猫くんが席を離れると、ヤマネが急に引き止める。

「もしかして…この先の森に入るつもりなんですか？」

え…？

そりゃまあ、この辺りは見る限り森ばかりだし…先に進むとなると森の中になるんだよね。

「そうだけど…
どうかしたの？」

「この先は迷いの森なんですう…。
帽子屋や三月さんは慣れてるみたいなんですけど、知らない人が入ったら生きて出られるかどうか…」

「…マジですか？」

あたしと猫くんは森の入口を凝視した。

あゝ、なんか背中に悪寒が…！！

「じゃ…じゃあ、この先には進めないって事？」

「進まないほうがあ…身のためですかねえ。」

…なによそれえ。

結局ここにとどまるしかないじゃん。せめて帽子屋か三月ウサギが来るのを待たないと…。

だいたい白うさぎさんは、帽子屋に事情を話せば薬探しを手伝ってもらえるって言ったのに。

あいつ使いもんにならないじゃない…！！

「あゝなんかイライラしてきた。

早く姉さんに薬持って帰ってあげたいのに〜」

怒りながら椅子に座るあたしを見て、ヤマネがクスクス笑った。

「まあまあ。

そのうち三月さんが帰ってきますから…それまで、一緒に”コレ”でも見ませんか？」

そう言っつて、ヤマネはテーブルの上に何かを乗せる。

大きな本みただけど…？

「…？」

「なんの本なのソレ？」

あたしが聞くと、ヤマネはトロンとした目を細めて微笑む。それから、本を開いて見せてくれた。

「…うわぁ！」

「これってアルバム？」

本の中には、たくさんの古びた写真。帽子屋や白つさぎさんも写ってる。

「たしかぁ…この国の、18年くらい昔の写真なんです。まだアリスさんも猫くんも、産まれてませんねえ…」

そう言うと、ヤマネは一枚の写真を指さした。

「2人とも…この女の子が誰かわかります？」

「このちっちゃい子？」

ヤマネが指さしたのは、薔薇の花園をバックにした大きな写真。広い庭園のまん中に、ドレスを着た女の子が立ってる。

「うーん、年は4才くらいかなあ。」

「…なんか機嫌悪そうだけど？」

猫くんは不思議そうに首を傾げる。

「ああ、たぶん写真撮られるの自体がイヤなんだよ。

アレって何十分もじっとしてポーズ決めてなきゃダメでしょ？面倒くさいじゃん」

というのはあたしの意見なんだけどね。

「ふふ。

それもあるでしょうけどお…この時期は特におてんばだったから。」

懐かしそうに写真を眺めるヤマネさん。

いったい誰なんだろ？

白黒だから髪の色はわかんないけど、顔はスゴく可愛いし…。

こりゃ大人になったら、かなりの美人だろくな。

「んー？

ダメだ〜白黒だからぜんぜんわかんないよ！

…それにしてもこの子、眼力あるなあ…。」

キツと眼前を見据える眼差し…。かなり怒ってますね。反抗期だったのかな？

でもそんな表情がなんともまた綺麗で…。

綺麗…で…？

「あれ…

この子の眼、なんか見覚えあるかも…？」

「あ、ホントだ！」

なんかついさつき、こんな鋭い眼差しを見た気がする…！」

…あ。

「「も…もしかして…」

女王様あつ！？」

「当たり前っつ

2人とも、驚きましたあ？」

いやいやいや、そんなほのぼのしたレベルの驚きじゃありませんよ！

…ホントに女王様？

ちっちゃいし…てか、当たり前だけどさ、ハートの女王にも子供の頃ってあつたんだね…。」

「うわー

すごくカワイイし／／／／

女王様って昔はこんなだったんだ…！」

開いた口のふさがらないあたし達。

それを見ると、ヤマネは次のページを開いた。

「やーんちっちゃい女王様がいっぱいいる〜！〜！」

そのページには女王様の写真がいっぱい！

「小さい頃から、女王様がよくぼく達のところに遊びに来てくれたんです。

だからぼくらにとってはあ……今でも、妹みたいな感じなんですよねえ」

「そうだったんだ……！」

だからこんなに写真があるのね……！」

お茶会に遊びに来てるトコとか、白つさぎさんに抱きついてるトコとか、……お昼寝中の寝顔まである……／＼／＼

「こ、これ一枚いくらだったらゆずってもらえますか……？」

「端から見るとあぶない人みたいですね……！」

……………。

「……………」

き、気を取り直して……

18年前の女王様は、こんなにちっちゃかったんだね……！」

「……ふふっ。

驚きついでに、他のページも見てみますか……？」

「み、見たい見たいっ……！」

あたしはアルバムを受け取ると、ペラペラとページをめくってみたら、いろんな写真がある……けど……女王様以外は、あんまり今と変わらないなあ……。

「……帽子屋は女王様と同じ人間なのに、ぜんぜん歳とってないじゃない……ヤツは不老不死か!？」

「……ん?」

何枚かページをめくった時……不意に、ある写真が目にとまった。

「……ねえ、この女の子は?」

クロツケーをする女王様の隣に、もう1人女の子がいる。この頃の女王様より、3才くらい年上みただけ……?

じ〜〜〜〜。

「ね、猫くん?

どうしたの……? あたしのことそんなに見つめて…… / / /

「あ、

えっとね、この女の子、なんか……アリスに似てない?」

あたしに？

そういえば、着てる服もあたしのエプロンドレスにそっくり…。

よくよく観察すると、その女の子の頭にもリボンがついてる。

「…」のリボン……！…！」

あたしは、自分のアタマに手をやった。髪に結んである、淡い水色のリボン。

「……」ママなの？

ヤマネは…あたしを見つめたまま、ゆっくりと頷いた。

第15話 ヤマネのアルバム（後書き）

昔の写真は撮るのに時間がかかったそうで…。

ルイス・キャロル自身、写真撮るのが好きだったみたいです
ねっ
アリス・リデル本人も彼に写真撮ってもらったらしいです。

19世紀の子供は我慢強かったんだなあ…！

第16話 ヤマネのアルバム その2

アルバムの写真に写った、幼い女の子。

…よく見りゃ誰かなんてすぐわかるよ。
間違えようがないじゃん…。

この子はママだ。

「……………キミのお母さんがこの国に来た時ね…何枚か撮っておいたんだあ。」

ヤマネがぼんやりと呟いた。

「キミは本当にお母さん似だよお。
他のみんなも…」アリス”が帰って来たんだと思って、ビックリしてたでしょ…?」

「そうなんだ…」

不意に、アルバムの上に雫しずくが落ちる。

あれ…

あたし…泣いてる？

「アリス？

…だいじょうぶ？」

「う、うん。

ごめんね…」

頬をつたって落ちる涙。猫くんが、優しくすり寄ってくれた。

「なんか…嬉しいの。

ママ…あたしが小さい頃に死んじゃったから…

ホントはね、あんまりママの事、よく知らなくて…。」

だから、嬉しい。

ママの事が…あたしの知らないママの事が、また一つわかったんだもん。

女王様や白つばきさきに囲まれて、ピースしてるママの写真。

ママはこの国で、こんな風に笑ってたんだね…。

「…あれ？でもなんか変じゃない？

このちっちゃい女王様が 18年前で……でも、このママだってまだ子供じゃない？

あたしがもうすぐ16才なんだから、18年前には大人になってるハズじゃ……。

あゝなんかややこしい！」

「あのねっ

アリス達の国と不思議の国ってね、時間の流れ方が違うんだって。

こっちでは18年だけど、アリスの国ではもっと経ってるんだらうね」

子猫くんが説明してくれた。

なるほど、だから時差があるんだね。

「…」アリス”が迷い込んだ頃ね、女王様は本当におてんばで……

気に入らない事があるとすぐに『首をはねておしまい』って叫んでたんだあ。

いったいどこで覚えたんだかねえ。」

「え……

じゃあ女王様が情緒不安定で、キレっ早くてなにかと処刑しようとしてたのって……子供の頃の話なの！？」

コクリと頷くヤマネ。

「もちろん本当に処刑された人なんていないし、本人も本気で言っていたんじゃないけどねえ。」

マジですか!?

それって…今までの女王様の全イメージをくつがえす超重要機密じゃないですか!!

「オマケに”アリス”には凄く懐いててね…
態度が素直じゃないから、”アリス”は気づかなかったかもしれないけど」

そ、それも初耳!

「そんなに懐いてたの?
その…女王様が!?’」

「そおだよ?
クロツケーだつてやらしてあげてたし。
貴族の集まるような大会に、ただの子供が飛び入り参加させてもらった事の方が不思議でしょ?’」

…な、なんか驚きの連続っていつか……

「あ、女王様がアリスに優しかったのって、

もしかしたら”アリス”の子供だからじゃない？
懐かしかったのかも」

猫くんが思いついたように言った。

そっか…だからあんなに優しくしてくれたんだ。

「そうだったんだ…」。

なんか女王様の秘密、たくさん分かっちゃった！」

『…私の秘密がどうしたのだ？』

……あちゃあ。

振り向けば、女王様が後ろに立ってました。

右手には帽子屋………だったらしいボロボロを掴んでらっしゃいます。

「ヤマネ………貴様、まだそんな物を隠し持っていたのか…っ!？」

「あ、

いやコレはあ………

帽子屋に命令されて。」

すごいぞヤマネ!

コロツと責任転換だ!!

「…アリスと子猫」

「「は、はいっ!?!」」

「み……見たのか?」

「…す、すいません」

あら…女王様ったら顔を紅くして。

「と…とにかく!」

これは没収だ!」

怒ったように叫ぶと、女王様はテーブルの上からアルバムをひったくる。

ヤマネは残念そう。

「うう、わかりましたあ…」。

(予備があと三万冊くらいあるんだけどね)「

ああ……

ヤマネは案外たくましいみたいです。

第17話 薬を作りましょう！

「おーいみんなあ」

突然、ほのぼのした声が響きわたる。

「あれ？」

三月ウサギじゃん！」

声のした方を見ると、三月ウサギが森の中から飛び出してきました。

「おー！三月！

待ってたぞ」

「どうだった!？」

あれ、帽子屋が復活したよ。

「あんた女王様にフルボッコにされたんじゃ……」

「まあまあ細かい事は気にするなよ！

三月！ワームはいたのか？」

細かくないし気にするって。なんなんだアンタ？
ホントに不老不死かい。

…それと、”ワーム”って誰ですか？

「お待たせ〜！！
連れてきたよっ」

三月ウサギは、テーブルの上に、小さなキノコをのせた。

「紹介しよう、
コイツがワームだ！」

キノコの上にいたのは、ちいさな芋虫だった。

なんか…パイプみたいなのを吸って煙はいてる。
水煙管みずきぼろっていうんだっけ？

「…おお、
この子供が”アリス”の…。
なんじゃ…チエシヤ猫の子供までおるのか。
おまけに、気の強い女王陛下かね？」
しわがれた声で、芋虫はゆっくりしゃべる。

「久しいな”毒虫”。
単刀直入に言う。

「……万能薬を出せ。」

芋虫を睨みつけながら、女王様が言った。
”気の強い”って言われたのが気に入らなかったのかなあ？

「ね、ねえ。」

万能薬って…?」

「万能薬はね〜っ

たいていの病気なら、理屈抜きの間答無用で治しちゃうスゴい薬だよ!」

三月ウサギが飛び跳ねながら教えてくれた。

「問答無用で?

じゃ…じゃあ、その薬を飲めば…!?!」

「アリスのおねーさんも元気になるってワケだよかったなーアリス!」

やった…!

その薬を持って帰れば、姉さんの病気も治せるんだ!!

この芋虫は、白つさぎさん達が言ってたお医者さんなんだね。

「ありがとう〜三月ウサギ!!わざわざ芋虫さんを探してきてくれたんだね」

「んふふ〜。」

いいんだよ〜アリスのためだもんっ!!」

ああ…今はあなたが天使に見えるよ。

「芋虫さん！」

その薬どこにあるの？

早く持って帰りたいんだけどっ」

「まあそう焦らんでおくれ。

今から作るんだから」

あ、今から作るの？

「でも…材料とか調合とか大変なんじゃ…？」

「ああ、大変じゃぞ。

なにせ万能薬じゃからなあ」

うう…やっぱり大変そうだあ。

まあ、仕方ないか。

あと一踏ん張り。

材料が見つかったら、薬を作ってもらえるんだし！

「それで芋虫さん。

材料って何がいるの？

頑張っつて探してくるから」

「おお…。

まずはなあ、ブージャムツリーの葉が必要なのじゃ。」

「ブージャムツリー…ってなにそれ？」

いきなり聞いたことも無い材料だよ…。
はあ…。

やっぱりそう簡単には見つかりそうもないなあ。

「あつたよ」

つてあつたんですか！？

早いね！！

「うちの庭に生えてたから」

「アハハ！」

三月ウサギが笑いながら言った。

「あ、ありがとう…。」

えと、次の材料はなんですか？」

「次はクロタンポポの花じゃ」

「おっ！」

見つけたぞ」

「次はダイオウシイタケじゃ」

「む、

コレのことか？」

「次は満月瓜の果汁が」

「あつたよ」アリス」

「…ふむ。

だいたいそろったようじゃの」

集まった材料を見て、ワームが満足げに頷いた。

「…いやいやいや！」

おかしいでしょなんて全部三月ウサギの庭で見つかるのよ!?!
なんか雑草みたいなのもあるじゃん!?!」

「材料自体はどこにでもあるものなのじゃ。

次は調合じゃのう」

…さっき大変だつて言ってたじゃないですか。

ホントに大丈夫かなあ？

おままごとの要領で事が進んでる気がするんだけど…。

「…よし。

そのティーカップを取ってくれ。

そこに今まで採った材料を入れる。」

「あの…、でっかい鍋とか使わないんですか…」

「ダメだよおアリス!」

思わず聞いてみたら、ヤマネに止められました。

「ワームはあの大きさだから…ティーカップぐらいがちょうどいいんだよお。」

「あ、そうなんだ。」

なんやかんや言ってる間に、芋虫は材料を小さくちぎり始めた。それをカップの中に入れて終わると、あたし達の方を向いて口を開く。

「ふう…。」

これでよい。

後はカップに紅茶を注げば、おおかた終わりじゃな。」

「それだけでいいの!？」

ホントに？

激しく不安なんですけど!！」

ツツコミもいれなくなりますよ…。」

最後は紅茶を注ぐだけ、って簡単すぎるでしょ？

「まあそうおっしゃるなお嬢さん。」

それでも、長年いろいろな病気を治してきた身じゃ。」

「大丈夫だよアリス。」

僕もワームの噂は聞いてるけど、ちゃんとした薬を作ってくれるのは確かだから!」

「猫くん…。」

あなたがそう言うんなら、まあ…大丈夫なんだよね?」

なんだかねで半信半疑だよ。

とにかく、これで万能薬が出来るんなら……

姉さんの病気が治るんなら、あたしも手伝わなきゃ。

「この中に、紅茶を入れればいいんだよね」

「そうじゃよ。」

カップいっぱい、溢れるギリギリまでのお

ワームに言われた通り、紅茶を注いでみる。

こぼれないように、慎重に慎重に……。

「……ふう！」

終わったよ?」

……そう言うのが早いか、カップの中身は急に光始めた。

眩い銀色に輝くていーカップ。

なんだか、不思議なエネルギーみたいなのが伝わってくる。

「うわあ……」

ホントに出来ちゃった」

「いや、まだ完成ではないのじゃよ。」

芋虫が、チツチツチと前足を振ってみせる。

「……どんな強力な特効薬でも、あるモノが欠けているだけで、効果

は格段に落ちるものじゃ。」

「あるモノ…？」

まだ必要なモノがあるの？」

あたしは、首を傾げてワームに聞いてみた。
特に思い当たるものは無いし。

「なあに…お前さんならすでに持つとるモノじゃ。

…心じゃよ。

病に打ち勝とうとする病人の意思。

病人が回復する事を心から願う者の祈り…。

わしの薬は、その2つを後押しするためのモノなのじゃ」

…心、か。

上手いこと言ってくれるわ。

「だったら大丈夫。

あたし、姉さんに元気になって欲しいって、本気で願ってるから。」

「…その様でなによりじゃな。

さすれば…その薬、姉上に飲ませてみるがよい。必ずお嬢さんの
願いを聞き届けるはずじゃ。」

ワームの言葉に、あたしはただ頷いた。

「ありがとう、芋虫さん。」

「あと半日ほど熟成させたら、家にもってお帰り。その頃には完全
に出来上がつとるだろうからのう。」

そう言つと、ワームは三月ウサギを呼び寄せろ。

「さあ、仕事は終わりじゃ。

さつさと家に帰してくれんか？」

「はいはいごくるーさま。

それじゃ、ちよっくら送り返して来るから」

三月ウサギは、芋虫の乗ったキノコを手にとって、また森の中へと走っていきました。

「…アリス！」

猫くんが、あたしの顔を見て微笑んだ。

「うん猫くん。

とうとう……薬手に入ったんだよね!？」

「「やったああ!！」」

「やれやれ。

どうやら用は済んだらしいな」

女王様は、薬のティーカップを覗き込んだ。

さっきまで銀色に光ってた中身が、今は透明な液体に変わってる…!

「はい、女王様！」

手伝って下さって、本当にありがとうございました!!」

お礼を言っただけで嬉しそうに笑って見せたら、女王様は少し照れたような表情になった。

「と…とにかく、

私はこれで本当に帰るからな。

あとは自分達で上手くやるのだぞ!!」

「はいっ!!」

ほんとうにお世話になりましたっ」

「では……達者でな。

2、4、3、7、9!

出発だ、ついて来い」

女王様の声を聞いて、森の中からトランプの兵隊達が戻ってきた。今まで森の中で待機してたのかな。

「おい、NO、9はどうした?」

「また森の中で迷ってるみたいであります!!」

迷子か。

…あいつら、女王様の護衛には役不足な気が…。

女王様達の姿が見えなくなると、帽子屋が口を開いた。

「いや〜。」

なんかいろいろあったけどさ、楽しかったよ！
また遊びに来いよな、アリスー!!」

「うん。」

手伝ってくれてありがとうね、あとお茶も。

美味しかったよ」

「アリス…。」

この小瓶に薬を入れとくといいよ。

紐もつけてあるから運びやすいよお…。」

ヤマネが小さな瓶を手渡してくれた。

いつの間にやら、さっきの薬をたっぷり入れてくれてたんだ。

また眠そうな顔になってる…もうすぐ寝ちゃうかな？

「ありがとう、ヤマネさん。」

三月…は今はないけど、3人のこと忘れないから!」

「…………アリス。」

「一つだけ…いい?」

トロンとした目であたしを見つめながら、ヤマネは静かに言った。

「”アリス”は…………。」

キミのお母さんは…、大人になってから、キミにこの国のこと、話したんだよね…?」

「…え？」

「ボクたちのこと…大人になっても忘れてなかったんだよね…？
ちゃんと…覚えてて……くれたんだよね……？」

こつくりこつくりして、今にも眠り込みそうなヤマネさん。
傾き始めた体をそっと抱き寄せて、あたしは答える。

「…うん。」

ずっとずーっと…覚えててくれてたよ？

ヤマネさんの事も、帽子屋の事も…。

みんなの事、ずっと大好きだって……あたしに話してくれたもの」

それを聞くと、ヤマネは嬉しそうに微笑んだ。

「……………よかつ……………たあ。……………zzz。」

「ありやりや、ホントに眠り込んだよ。」

苦笑いしながら、ヤマネを抱き上げる帽子屋。

「…それじゃ、ホントにお別れだな。」

また遊びに来てくれよアリ……………

つてもういないしっ！？」

森の中の小さな道を、あたしは走って帰っていく。
隣には子猫くん。

首からは薬の小瓶を下げて、両手で大事に包み込んで。

「はあっはあっ…。」

なんで帰りはパピーがいないの〜!？」

「どっか遊びに行っちゃったみたい…。」

アリス、疲れてない？」

息切れ気味のあたしを見て、猫くんが心配してくれた。

「ううん、大丈夫だよ…たぶん。」

それより帰り道コレであってんのかな？」

「うーん…。」

ほとんど一本道だし、これで合ってると思うけど…。」

日は沈みかけてきてるし、森の中だからヤケに暗いんです！

「白つさが迎えに着てくれればいいのに〜!!」

不審者が出たらどうすんのよ…。」

あ、その時は猫くんがアタシを守ってくれるもんね」

「え？

う、うん！

もちろん……僕が守るから。」

ね…猫くん……！！

カツコイいよ／＼／＼。

オマケにすっごく可愛いです！！

「あははっ！

だったら怖いものなんてないわね。

猫くんってすっごく頼もしいもの……」

『ぎゃあああああっ』

……。

な、なによ今の！？

「猫くん…なんだろ？

悲鳴みたいだったけど。」

「…向こうの方からだね」

猫くんが見つめる方向には、細い脇道があった。夕暮れの暗い光に照らされて、怪しく浮かび上がってる。

「うあ……」

いかにもなカンジで不気味な道じゃん。」

「あつちは確か…女王様の薔薇園がある場所だよ！どうしたんだろ？」

薔薇園…？

そんな綺麗な場所があつたんだ。

…ちよつと行つてみたいかも。

「ねえ猫くん、ちよつと言つてみようよ」

「え！？」

でも変な悲鳴したし…」

少し焦る子猫くん。

「大丈夫だつて。」

誰かがケガをしているのかもしれないじゃん！

…それとも、やっぱり怖いのかな？」

「なっ……！！」

そんなことないよ！

危ないかもつて……」

あ、アリス待つてよ！？」

あたしが駆け出すと、子猫くんも慌ててついてきてくれた。

こんなに心配してくれてる。それがとっても嬉しくて、愛おしくて、自然と笑顔が溢れてくる。

この子がいれば、怖いものなんか一つもないよ。

なぜか今は、そんな気がして止まない。

今はただ……

こんな幸せな時間に、いつまでも続いて欲しかった……。

物語が、いつも幸福な終わりを迎えるとは限らない。

かと言って、その先に待つのが悪夢であると決まった訳でもない。

それを受け取る者によって、全てはオワリにも、ハジマリにも姿を変える。

それこそ、変幻自在に…反則的なまでに。

何者もそれを縛ることは出来ず、どこへ向かって逝くのかもはかり知れず…だからこそ、

こんなにも美しく、

こんなにもおぞましい。

ハートの女王の城。

女王謁見の間。

「……本当に……いいんですね？」

斜陽の光が照らす、広間の中。

白ウサギの声が、静かに木霊こだました。

「“彼等”の侵入が確認されました。

恐らくは、現在も国内で活動が続いているはずですよ。」

「…侵入？」

「やれやれ…大口を叩いている割には存外役に立たんモノだねえ、監視”共も。」

白ウサギの言葉に、嘲笑を返すチエシヤ猫。

「…しかしまあ……結局は、コレもまた必然かな。

【Alice】は再来し…不確定要素が飛び交うこの現状……。

”Chaos（混沌）”とでも言うべき状態だねえ。」

「それはまた……」

「貴方の好きそうな状況ですね。」

燃えるような夕陽を背に、白ウサギの影が伸び踊る。大理石の床にコツコツという足音を立て、彼は数歩進み出た。

「…チエシヤ。

このままアリスと行動を共にさせれば、最も危険な目に遭うのは彼……その事は、貴方もご存じですね？」

「そりゃそうだろうねえ。

【Alice】を目的にやって来た輩やからが、オマケを欲しがるとは思えないし。」

チエシヤ猫からの気のない返事。

夕暮れの光を受けて輝く、巨大なステンドグラス。それを見上げて、白ウサギは小さく息をついた。

「なら言つまでもないでしょうが……

あの子、死にますよ？」

「…そう思うかい？」

そう言ったチエシヤ猫の眼には、これと言った感情は映っていないかった。

驚きも、悲しみも。

金色の瞳の中、鋭い瞳孔だけが妙にくつきりと浮かび上がる。

「はつきり申し上げれば……」

肉片が残る可能性すら絶望的ではないかと。

あの子の幼さでは、さすがに……」

その発言に、白ウサギ自身顔を暗くした。

認めたくはない。

それでも、結末は目に見えているのだ。

容赦なく大海に沈められれば、マッチの火はどうなるか。

今論じているのはまさにそれだ。

試す前から結果がわかりきっている。

残酷な話だが……、子猫が生き残る確率は無に等しい。

「私はねえ……」

不意に、チエシヤ猫が口を開く。

「…そうは思わないんだよ。」

それを聞いて、驚いた表情を浮かべる白ウサギ。

「あの子は死なない。」

そんなにヤワじゃないさ、必ず上手くやる。
だからこそ、アリスと共に行かせたんだ。」

気まぐれに尻尾を揺らして、チエシヤ猫が言う。
「彼は生き残る。」

…私と…」彼女”の息子だから。

私は狂ってるかな？」

「…ええ…根拠のない自信にも程がある。
相当狂ってますよ、貴方は。」

静かに呟き、白ウサギは赤い眼を光らせる。

次の瞬間、そこに…困ったような笑顔が咲いた。

「わかりました！」

貴方がそう言うなら、私は余計な口を挿みませんよ。
私も充分”気狂い”なんですから。」

「…ありがとう、シロ。」
チエシヤ猫も、三日月型の口で微笑む。

「あ、そうだ。

頼みといっでは何だが、やはり少しばかり援護してやってくれないか？

まだ小さいから、手を引かれねば出来る事も出来ないだろうし」

「…だったら、自分で助けてあげてもいいんじゃないですか？

お父さんなんですから！

少しは頼れるところを見せてらっしゃいな」

白ウサギの、冗談めいた微笑。

しかしチエシヤ猫の表情は悲しげだった。

「……いや〜ダメなんだよねえ。

一回助けちゃうと余計な事にまで手を貸したくなるから。
過保護も程々にしないと…

…いざ別れるときが辛くなる」

「…チエシヤ……」

遠く、虚空を捉えるようなチエシヤ猫の眼。
それは、いつものような狂気ではなく……
どこか寂しげに光っていた。

「…そう言えばチエシヤ、子猫くんの名前…いつになったら決めるつもりなんですか？」

白ウサギは首を傾げた。

思えば、自分達は生まれた瞬間からすでに名前がついていたのだ。

「私は”白ウサギ”。

貴方は”チエシヤ猫”。

帽子屋は”帽子屋”で三月ウサギは”三月ウサギ”。

みんな生まれた時からそれ以外の何者でもない。

けれど、彼は自分の名前を今から与えられる事が出来る訳じゃないですか？

この世界の住人としては珍しい。

だから、少し気になってるんですよね…彼の名前については「

「…あゝ、

それならたぶんアリスがつけてくれるんじゃないかな？」

「アリスが…ですか？」

白ウサギは意外そうな顔。

「猫の名前というのは、飼い主がつけると相場が決まってるのだ。

彼女なら良い名前をくれるハズだよ！

そのうち…必ずねえ。」

ゴーン

ゴーン

ゴーン

ゴーン

ゴーン

鳴り響く鐘の音。

そして、広間の扉がゆっくりと開かれた。

『ウサ公。』

透き通った声が、重々しく反響する。

2人は素早く振り返ると、うやうやしく頭を下げた。

「これはこれは、女王陛下。
お帰りなさいませ。」

女王はチエシヤ猫の事など脇目もふらず、レッドカーペットの上を
進んでくる。

そして、白ウサギの前で立ち止まった。

『全軍の指揮を取れ。
敵襲に備える』

「…かしこまりました」

「アリスには随分気に入られたようですなあ。
お茶会はいかがでしたか？」

チエシヤ猫がクスクスと笑う。
それを見て、女王は単調に口を開いた。

『たまには狂気から離れるのも良いものだな。
だがそれはそれ。』

あの小娘には、あちら側に逝って貰わねば困る。
下手な同情などいるまい、そうだろうか？」

「全く持って仰る通りに御座います。」

チエシャ猫の三日月型の口が、いつも以上につり上がる。

「白ウサギは彼女を助けたいでしょうがねえ」

白ウサギは、悲しそうに眼を細める。二つの長い耳が、力なく揺れた。

『……兎。』

馬鹿なマネはするなよ？

『アレはどう転んでも”この世”に留めるべきではない。』

「…承知しております」

女王の燃えるような髪が、夕陽を浴びていつそう緋く染まる。

『ならば良い。』

情報が入り次第、出陣を命ずる。

…【Alice】を奴らの手に落とす事だけは、何としても避ける『

「…かしこまり」

「女王陛下下っ！

緊急事態です！…！」

突然、トランプの兵隊が1人、広間に飛び込んできた。

『…話せ』

「申し上げます…」

西方の薔薇園に侵入者あり！

正体は不明……

警備についていたスペードの小隊はほぼ壊滅状態ですッ！！」

『…ほう。』

女王の緋い瞳に、狂気的笑みが浮かんだ。

『ほれウサ公。』

とつとつ出番だぞ？

”盤”に”駒”を並べる役、しかと果たして来い。』

「……女王陛下の仰せのままに。」

白ウサギの手の中で光る、マツチロック式の古風な銃。

そして、それを見たチエシヤ猫は……

奇怪な笑みを浮かべて、どこかへ消えた。

そして。

この日、この時……あの場所で。

総ての歯車は狂い始め。

”彼等”と”彼女”は、一つの空の下に邂逅を果たす事となる。

……決して訪れるはずの無かった、呪われた出会いを……。

「まっ…待ってってば！アリス〜！！」

「あははっ！

早くおいでよー」

夕暮れの光で、辺りは一面オレンジ色に染まってる。

猫くに追いかけられながら走ってたら、急に開けた場所に出た。

「お？

出口だよ猫くん……」

そう言っただけで辺りを見渡したあたしは、目の前の光景に息をのんだ。

夕陽の下に広がる、それは……

「うわぁ……！！」

どこまでも広がる、薔薇の花園。

沈む夕日に負けないくらい、赤く赤く咲き乱れる。

「…はぁっ。

もっ…アリス走るの速いって……」

猫くんも森から出てきた。

「ねね猫くん！すごい綺麗だよココー！
お城で見た庭の何倍も広いじゃない！」

すごいすごい！

さすがは女王様の庭だなあ…。

こんな、庭あたしの家にもあつたらいいのに。

「ねえ、

もつと近くにいつて見よつか！」

「えゝまだ帰らないの？」

暗くなつちゃうよ？」

う…それもそうか。

あんまり遅くなるとパパが心配するしなあ。

けど…

「まあちょっとぐらいなら平気でしょ。

てなわけで行つてきまーす！！」

「あああ！

だからもうゝおいてかないでよっ」

必死に追いかけてくる猫くん。

なるほど、ちっちゃいから長距離走は苦手なんだね。

でもほら、ちょっと近づいただけでもスゴくいい匂いするし！

ココまで来て引き返すわけにはいきませんよ!!

「アリス、近づきすぎたらダメだよ？」

見張りがいるから見つかったら追い返されるよ」

後ろの方で猫くんが言った。

見張り？

お城のトランプ兵みたいなのかな？

でも庭園の前には誰もいないみたいだけど。

ん〜、休憩中とか？

「大丈夫だよ、

この辺りは見張りがいないみたいだし。

猫くんも早く〜」

とかなんとか言ってるうちに、庭園の門の前に着きました。

庭の門、っていうか…おっきなお屋敷の門みたいなんだけど。

豪家だね〜!!

やっこの思いで猫くんもたどり着いた。

「はあっ……も、もう 疲れたあ！」

「あら、だらしないなあ。」

「このぐらいで音を上げてちゃダメだよ？」

すねた顔をする猫くん。可愛いから抱き上げてあげちゃった

「ほら見て〜猫くん。」

門が閉まつてるから中には入れないけどさ、ココから見ただけでもスゴく綺麗だよっ」

門の鉄柵の向こうには、迷路みたいに入り組んだ薔薇の垣根がならんできた。

いいなー入りたいなー。

「……………？」

「ん？」

どうかしたの猫くん。

浮かない顔して」

猫くんは辺りをキョロキョロ。薔薇の方が綺麗なのに？

「あ、うん…」

なんか変なんだよ、正門の門番がないなんて」

「ああ……」

「そういえば誰もいないのよね。
サボってんのかな？」

「そう思ったけど、すぐに考え直した。」

「女王様の庭園を守ってるんだもの、サボったりしたら確実にクビが
飛ぶわ……。」

「でも……サボりじゃないなら、なんで門番がいないんだろ……？」

その時。

きゅんきゅんきゅん……

「……きゅん？」

「今なんか聞こえたけど」

近くの茂みの中からみたい。

「うん……」

「たぶん子ウサギの泣き声だよ。」

「この辺りに住んでる野ウサギは、小さい頃は上手くしゃべれないか
ら」

「子ウサギ!？」

なにそれドコにいるの見たい見たい!

…あ、いや。

泣いてるんだつたら何かあつたんだよ。

もしかしたら、ケガしてるのかも!」

じゃあ急いで見つけてあげないと!

あたしは、泣き声のした茂みの方に突っ込んでいった。

「あ!

アリスく気をつけてよ?

さっきだって変な悲鳴聞いたんだしさあ…!」

うーん、そういえばそんな事もあつたわね。

あの悲鳴は何だつたんだろ?

茂みの奥をのぞいてみると……

あゝいたいた!

ちっちゃなウサギが、森の中で寝転がってる。

「きゃーカワイ〜ノノノ

ほらどーしたの?

迷子になつたのかな?」

ちっちゃくて灰色をした赤ちゃんウサギ！
この国ってホントに可愛い動物ばかり…。

いや、天国みたいな場所ですね

逃げる様子もないので、思い切って抱き上げてみた。
ひゃ〜ふわふわ…

…ってあれ……？

「…ね、ねこくん大変！

この子ホントにケガしてるよ!？」

後ろ足から、少しだけ血が出てる。

どうしたんだろ…どこかの草むらで切ったのかな？

「ケガ!？」

ドコをケガしたの？

見せてみて…」

猫くんもやってきたので、子ウサギをもう一度地面に寝かせてあげた。

「どつ?」

大丈夫そう?」

猫くんが、子ウサギの足をじつと観察してる。
ほほう、お医者さんみたいですな！

「うーん…」

そんなにヒドいケガじゃないみたいだけど…」

「そ、そっか。」

じゃあお城まで連れてかえって、手当てしてあげなきゃね」

ふはあゝ、
ひとまず安心。

……ん？

でも、なんでこんなところでケガなんかしたのかな？

不思議がりながらふと顔を上げたら、誰かと目があった。

「……………？」

誰だろ？

この子のお母さんとか…じゃないか。

ウサギにしてはずいぶん大きいみたいだし。

草むらの中から、眼と鼻先だけ見えてる状態。

どうしよ、声をかけてみようか…？

そう思ったとたんに、猫くんが大きな声で言った。

「……………！？」

アリス、これ普通の怪我じゃないよ！

ナイフか何かで切られたみたいに……………」

その時、誰かさんが草むらから顔を出した。

とがった耳。

大きな眼。

全身、ふさふさした白い毛皮で覆われて…

……………えと、なんて動物だっけ？

見た目は近所で飼ってるわんちゃんに似てるけど……………

それにしてもデッカいし。

それに…なんか違うんだよね、なんというか……………雰囲気か……………。

目の前で大きな口が裂けた時、あたしの頭に答えが浮かんだ。

第18話

"遭遇"; (後書き)

次回、

序章…最終回です。

第19話

彼等は、生涯救われることは無いだろう。

しかし、彼等はその目的を果たすまで、朽ちることも無い。

遠き日に喪われた楽園。

もう一度取り戻すためなら…何度でも。

総てを消し去り焼き尽くす。

凶争と狂想のオーケストラ。

…そして、

この時、この瞬間が…

真実、3つの世界を巻き込んだ”転換期”となるのだろう。

草むらから身を乗り出して、あたしを見る狼。

まっ白な毛並みは綺麗だけど……
口を歪めて笑う様子は、チエシヤ猫よりスゴいかもしれない……。

「……あ、あの〜。
あなた誰ですか？」

恐る恐る、一番の疑問を口にしてみる。
こんな迫力あるの、ママの話に出てきたっけ？

それとさっきアタシのこと『ガキ』って言ったのが非常にムカつく！

251

『……………あ？』

あれ？
なんか悪い反応。

『……………あーあーそうですかあ。
コツチの世界のお子様はあ、オオカミさんに出会った時の礼儀作法
つてのをこれっぽっちもわきまえてねえってワケだ。』

不機嫌そうな声色で、狼が言った。

「礼儀作法？」

そんなのがあるんだ。

アタシ全然知らなか…」

「アリスッ！

早く逃げてッ」

……え？

真っ青な顔で、狼を睨む子猫くん。

…え、なにこれ。

どーゆう状況……

『ギシャアアアアアあッ！！！！』

突然、狼が物凄い声で吼えた。

目の前で剥き出しになる、血に濡れた牙の行列。

「……え…？」

「…おまえ誰だ？」

声を震わせて、子猫くんが言った。

「この国には”オオカミ”の住人なんかいない！

…おまえ、ドコから来たんだ？」

『…クツクツ…

なあんだ、コイツの方がまだマシな反応するじゃねえか。』

頭に前脚をあてがって、可笑しそうに身震いする狼。

『あー、でもダメだな。

30点くれてやる。

…いいかあ？

森でオオカミと出くわした時の正しい作法…つまり反応はなあ！！』

…なに？

どうなってるの？

この狼はなに？

冗談を言ってるの…

…それとも…！！？

「…ッ！？

アリス危ないッ!!」

子猫くんの声で我に返ると、

狼が、口を大きく開いて飛びかかってきた。

「……………ひっ!？」

い…いやあ!!」

ズドン!

死に物狂いで飛び退いたら、直後に狼が降ってきた。
爪が地面に食い込む。

「きっ…」

きゃあああっ!？」

ヤバい!

コイツ普通じゃない!

逃げなきゃ……………!!

「おーおー!

そっだよそれでいいんだよ。

オオカミに会ったら悲鳴をあげて死ぬ気で逃げろ!

ソイツはお前さんをディナーにするつもりなんだから……なあッ！』

ひい！

なんか物騒なコトおっしやってますけど！？

言われなくてもダツシユで逃げてるって。

もうワケがわかんない！なんであんなおっかないのがいるの？

『ギヒヤヒヤヒヤッ』

げ。

気味悪い笑いかたしないですよ……

と思った次の瞬間、狼があたしの目の前に降ってきた。

ドズン！

「ひきやあッ！？」

ちよ、ちよっと……人のアタマ飛び越すのはお行儀がワルいと思いま
すっ
「

『カツハア！

おもしれえコト言っじゃんか。

まだそんだけ余裕があるみたいだから……

すぐに好きなだけ泣きわめかせてやるよ
』

…ど、ドSだ！

スーパーサデイスティック様だ！

「遠慮しときますう！」

一目散に逃げる！

あーもう勘弁してよ！

なんでこんなドSオオカミに追っかけられなきゃいけないの！？

「うわっと…！？」

必死で逃げてたら、何かにつまづいた。

あぶなく、ずっこけるトコだったじゃ…

自分が蹴飛ばしたものを見て、あたしは硬直した。

……ウデ？

地面に、人間の腕が一本転がってる。

…よく見たら、これダンボールだ。

本物じゃない。

「…うわ…？」

「やだ、なによこれ」

「気持ちワルい。」

慌てて目を背けたら、今度は変なものが目に映った。

少し離れたところに、何かが積み上げられてる。

ゴミ捨て場みたい…

「…？」

「なにあれ…」

破れた紙みたいなのが、たくさん折り重なって…

見慣れたスピードのマークが目に入った時、あたしは理解した。

まさか…

『オマエがドコにいるのかさんざん聞いて回ったんだがよあ、
どいつもこいつも知らないってさあ…』

役に立たねえからそのザマだ。『

「…アナタがやったの…」

振り返って尋ねると、狼はニタリとした。

『半分はな。』

あとは俺以外の奴が…』

「……………なんで？」

どうしてこんな事……………」

こんなヒドいことするの「

真っ正面から睨みつけると、狼は少しまじめな顔になる。

『…お前を見つげるためだ』

……………あたし？

『俺達は……………【Alice】、お前を迎えに来た』

「……………」捕まえに来た”の間違いじゃない？」

『キヒヤヒヤ！』

そーとも言っなあ』

耳まで裂けた口で笑う、純白の狼。

笑い声がやむと、今度は静かに睨みつけてきた。

『…オマエはココにいるべき人間じゃない。
俺達と来いよ！』

大人しくしてりゃ余計な怪我しなくて済む。』

狼の左眼は白く濁っていた。

瞳孔のぼやけた、白眼を剥いたように見える瞳。

その眼に見つめられた瞬間、体が動かなくなった。

…マズい。

『さあ……』

大人しく言うこと聞け。聞き分けのない子は”悪いオオカミ”に喰われちまうぞ……！』

…どろろしよび。

足…全然動かない。

狼は…一歩、また一歩とあたしに近づいてくる。

「アリスッ！！」

その声を聞いて、金縛りがとける。

『うおっ!?!』

…猫くんが、狼に飛びついた。
顔の前にしがみついて、視界を遮ってる。

「猫くん…!」

「アリス、早く逃げてよ!

コイツらに捕まっちゃダメだ!
連れてかれちゃ…!」

『邪魔くせえッ!~!』

狼が頭を振って、猫くんを振り落とす。

「ふにゃっ…!」

そこに、長い鉤爪が振り下ろされた。

「ねこくんッ!?!」

「……!」

猫くんはギリギリで避けた。前みたいに、体を消したんだ!

でもやっぱり、頭の部分だけは消えずに残っていた。

『おー！』

なんだソレおもしれえな！！』

興味深そうに吠えようと、狼は猫くんの頭を踏みつけた。

「…ふぎゃっ！」

「やっ……！！？」

ちよつとやめてよ！

猫くんに乱暴しないで！」

あたしが叫ぶのもお構いなし。

狼は、猫くんの頭を掴んで持ち上げた。
すぐに、消えていた胴体が戻ってくる。

『……？』

つまみ上げた猫くんを、しげしげと眺める狼。

『……へえ！』

なあんだコリヤ…おつもしれえ”中身”してんなこのチビー！！』

”中身”…？

何のこと……

ううん、今はそんなのどうでもいい。

「…放して」

『……………あ？』

近くにあった木の枝を拾い上げて、あたしは叫んだ。

「いますぐ…猫くんを放しなさい！」

なんであたしを捕まえたのか知らないけど、その子に手を出したら、タダじゃおかないから。」

『…なるほどお？

そーかそーか……

コイツがそんなに大事かあ！

……………だつたら』

狼の口が、ガパツと開いた。

…血の臭いがする。

…ちよつと……

やめて…まさか…！？

『ちょうど腹減ってたんだよなあ。

さっきのチビウサギ、食べずに餌にして正解だったぜえ。
こっちの猫のが少しばかり美味そうだ…!!』

「…や…ヤメてツ!!」

猫くんを口のほうに持ち上げて、狼は舌なめずりをした。

『…どこから喰うかな？』

量は少ないから耳からかじっていくのがイイかねえ………』

「まって…お願い、ついていくから…」

その子だけは助けて…」

必死の思いで頼んだ。

どこに連れて行かれるかわからないけど、そんなの今はどうでもいい。

猫くんが助かるなら…何だっするから…。

『…こっちに来な』

言われた通りに、狼の隣まで歩いていった。

近くになると、狼はあたしよりもかなり大きい。

…やっぱり怖い。

猫くんは気絶してるみたいで、さっきから動かないし…

『それでいい。』

そう言うなり、狼はあたしの手をがっしりと掴んだ。

『ブラウバート！』

ブラウバートオー……

…あゝ？

アイツどこいったんだあ？

【Alice】はもう捕獲したつてのに…』

狼が誰かを呼んでる。

まだ仲間がいるの？

「…ね、ねえ！

早く猫くんを放しなさいってば」

『あっ』

めんどくさそうに唸る狼。

「ちゃんと言うこと聞いたじゃない！
早く放してあげてよ…ケガしてるかも…」

『…いやいや。』

俺、このチビを助けてやるとは一回も言っただけだぜ？

は？

…え、

そんな…うそでしょ？

ちよっと待ってよやめて…！？

『いっただっきま』

狼の口の中に、猫くんが丸ごと放り込まれる……

「…いや……！？」

「いやあヤメてええええ!!」

ドオンッ

「……………」

今…………鉄砲の音みたいなの、した…?

涙でかすんだ目に、誰かの姿が映る。

『……………あゝ?』

猫くんを口に放り込む寸前に、狼が硬直する。

開け広げた口を閉じて、荒々しく唸った。

「…………その子猫、放して頂けますか?」

銃を構えた人影が、こっちに近づいてくる。

「……ウサギさん！」

白ウサギさんだった。

銃口を狼に向けたまま、白ウサギさんは静かに言う。

「…アリスからも離れてください。

それで貴方、もう自分の国に帰りなさいな。

…抵抗すれば、今度は本当に撃ちますよ?」

まっ白なウサギは、赤い瞳を光らせて、狼を睨みつけた。

『……くくっ』

キヒヤヒヤヒヤヒヤッ!』

それを見て、狼は……笑い声をあげた。

『てめえ、たかが食用動物の分際でえ…俺と殺り合おーってのかあ？
…くひゃひゃひゃひゃ…
ギィイヤアアアツハハハハハハツ！！！！！！
馬鹿だこいつバカだわ！やっべウケるゝ腹痛えな畜生っ』

絶叫のような嗥い声をあげて、身をよじる狼。
大きく開かれた口から、刃物のような大量の牙が剥き出しになる。

『…ハア。』

おい兔、オマエよお…

そんなモンで、この俺をお！！

殺せるとか思っちまったりしてねえだろーな？

まあ、もし仮にそうだったとしたらだが……

悪いなあ…ご愁傷様ってヤツだ。』

「まあそう仰らないで下さい。」

依然として落ち着いた声で、白ウサギが答えた。

狼の白濁色の眼。それから、掴み上げられた猫くんへと視線を移す。

「確かに、この銃で貴方を捉えきれるかどうかはわかりませんが、
ですが当たらないと決まった訳ではないのですし、もうしばらくお
付き合い願いたいかと。」

『当たらねえよッ！』

万が一にもなあ。』

又ラリとした舌を突き出して、唸る狼。

「そうですか…。

…では仕方ありませんね。

絶対に当たる様にさせていただきますしよう。」

絶対に当たる様に…？

白ウサギさんがそう言った直後、辺りの茂みがガサガサと揺れ始めた。

そして

「全軍、射撃用意！」

森の闇の中から現れたのは……

弓矢を構えた、トランプの兵達！

『あ？…コイツら……』

気が付けば、あたし達の周り一面、数えきれないくらいのトランプ兵達に包囲されていた。

ズラリと並んだ兵隊達。

その手の中で、鋭い矢が輝いた。

「ご安心下さい。

貴方のお目当てのアリスには、一発たりとも当てる自信はございませんので。

…ではお望み通り、貴方だけを蜂の巣にして差し上げましょう。

」

「アリスッ！

大丈夫か！？」

トランプ達の中から、聞き覚えのある声がする。

「帽子屋さん！？」

「ああ！

間に合って良かった…

みんなで助けに来てやったからな、少し待ってるよ！」

トランプの間から体を乗り出して、帽子屋が叫ぶ。

「子猫くんをはなせー！

そんでもって帰れー！」

「…むう…

おおかみなんかサイコロステーキにして、明日は焼き肉かあ…」

三月ウサギ…ヤマネさんも…！！

「みんな…来てくれたんだ　！」

『……………ハア。』

すっごく面倒くさそうなため息を一つ。

狼は、目の前のランプ達をチラリと見る。
まるで、虫けらとでも言いたそうな目で。

『……………飽きた』

…は？

不満げに呟いたかと思うと、狼は、突然猫くんを放り投げた。

「あつ…猫くんッ!？」

『雑魚がっじやっじやっじやと…』

いい加減理解しろや、どう転んだってお前らに勝ち目はねえんだっ
て』

そう呟きながら、何故かあたしを見つめる。

『さあてお嬢様…お迎えが来たようだぜ？』

「え……む、迎え……？」

気怠そうに、前脚で地面を蹴る。

…そして狼は、あたしを睨みつけた。

真っ赤に裂けた口を歪めて嗤いながら。

『時間切れだ』

ゴオウウツツ

「ッ………！？」

「きゃ………！！！」

突然の突風。

あたしも白つなぎさん達も、思わず目を細める。

庭園の中に、稲妻のようなものが走った気がした。
そして……

「………？」

次の瞬間。

あたしの隣には、黒いコートを着た男の人が立っていた。

「……………作業は？」

『順調だぜえ。』

見りゃわかるだろーが』

「……………【Alice】を確保したのなら撤退する。」

抑揚のない、低い声。

2メートル近い、背の高い影。

深く被った羽付きの帽子が、わずかに揺れる。

『ケツ…』

テメエと話してるとなあ、墓石にでも喋りかけてる気分になるっつ
『の』

毒づく狼をよそに、男の人がサツと左手を伸ばす。

「Kommen.(来い。)」

グガガガガガガッ

「っ…これは!？」

白うさぎさんが息をのんだ。

地面が…揺れてる？

そして、地下深くから、何かが這い出して来た。

私達の前に出てきたのは……
大量の荊つばきの蔓。

「やつ…!？」

なによコレッ!?!」

大地を突き抜けて、へびみたいにくねりながら伸び続ける、黒い荊。

あっという間に、あたしと狼達を円形に取り囲み始めた…！！

「…！！」

う、撃て！撃ち方始め！！」

トランプの指揮官らしい人が叫んで、一斉に矢が放たれた。

空気を切り裂いて、鈍く光る矢の雨。

ところが、荊の群はうねりながら、いとも簡単に矢を跳ね返す。

キーン…という金属音を響かせて。

金属で出来てるみたいに、火花を散らしながら…。

そうか、これは壁なんだ。

あたしを捕まえるための…鋼鉄の牢獄の壁。

「くそっ！

なんなんだよこの荊は！？

銃が全然効かないじゃんか？」

帽子屋の叫び声。

飛び道具が効かないと確信したのか、何人かのトランプ達がこっちに走ってきた。

『…ブラウバートおお』

「……………ああ。

……………処分する。」

処分って……………

まさか…そんな…!?

男の腰で、長い剣が不吉に輝いた。

「だ……………ダメエツ!!
みんな逃げ……………っ」

そう叫んだ時。

あたしの目に映ったのは…細切れになって崩れ落ちる、トランプの
兵隊さん達。

…そんな。

うそ…

……死んじゃったの…？

殺された。

「い……っ!？」

いやああああッ!！」

絶叫。

もうワケがわかんない。

なんで？

なんでこんな…。

「もうやめてッ!！」

誰かが傷つくところなんて見たくない。

「やめてよ、
酷すぎる……。
なんでそんな……。
ためらいもなく人を殺せるの！？
どうかして……」

「どうかしている……？」

「どうかしているのはお前の方だろう。」

黒ずくめの男は、いきなりあたしの顔を覗き込んだ。

「……っ！？」

冷たい、紫の瞳。

「……いいか、落ち着いてよく考えてみる。」

何故、たかがボール紙の塊が切られた事に、そう悲しむ必要がある「

……え？

「……なんでって……人が死んでるのに……悲しくないわけ……」

「……人？」

お前は”アレ”を人だと？

……紙から四肢の生えたあの異形の生物を見て、人間と同等に接することが出来ると言うのか？」

……一瞬、何を言われてるのかわからなかった。

「何故、アレを見て悲鳴の一つすらあげない？
どう見ても異常だろう。奇怪に感じないのか。」

お前が生まれた世界では紙で出来た人間など存在し得るか？
動物が人語を話せるか？
ウサギの穴に落ちて別世界に辿り着くなどという戯言に、何故そんなにも早く順応出来る！？」

……わからない。

今更だけど……それっておかしいのかな？

そりゃ動物が人の言葉を喋ったら驚くだろうし…
…でも、初めて白ウサギさん達を見たとき……

なんとなく、自然な事のように感じてしまったのは……なんで？

『答は一つ。』

この世界が”異常”なら…

オマエも、そうとう”イかれてる”んだよ。

ハッ…笑えるねえ。

現実と幻想の区別もつかないレベルに精神が狂っちゃまってやがるッ
『

あたし……

狂ってるの？

「アリスっ！

諦めないで！」

…白つばきさんの声。

荊は絡み、もつれ合い、あたし達を取り囲む巨大な壁になっていた。
黒い荊が、時々、赤く脈打つ。
まるで血が通ってるみたい……。

…その隙間から、白いものが覗いている。

…白ウサギの…手？

「早く……私の手につかまって……」

荊のトゲに刺されて、赤く染まった、白い毛並み。
白ウサギさんは、あたしに向かって必死に手を伸ばす。

「ダメ……だよ。」

ウサギさん……手がボロボロになっちゃ……」

「私は大丈夫です！」

さあ……早くこっちへ……」

そうだ。

ボウツとしてる場合じゃない。

あたしの後ろに立つ、黒い男と、真っ白な狼。

逃げなきゃ……っ！！

「…どこへゆく？」

白ウサギのもとへ駆け寄ろうとすると、冷たい声に引き止められる。

「どっつて…」

家に帰るに決まってるでしょ！！

あたしは病気の姉さんに薬を届けなきゃいけないの！

アンタ達みたいな気違いなヤツらに構ってらんないの…よ……！！
？」

ズガンッ

大きな音と共に、地面が裂ける。

あたしの目の前に、鎌首をもたげた荊が飛び出してきた。

「きゃっ……！！？」

「…逃げられるとも思ったか」

男が小さくため息をつく。

その直後、さらなる荊が地中から溢れ出した。

「うっ……くそ……っ」

荊の群れは複雑に絡み合っ……白うさぎさんを外に押し返す。

「……ウサギさ……」

「アリス！」

……必ず……必ず助けにいきます。

だから、絶対に……」

ガチンッ

とうとう……最後の間隙が閉ざされた。

白ウサギさんの姿も、もう見えない。

目の前にあるのは、深く生い茂った荊の壁。

そして……

『さあ……これで……助けしてくれるヤツはいなくなっちゃったな。
なあ……【Alice】?』

振り向けば、狼が牙を剥き出して嗤っている。

「……来ないで。」

半径5メートルほどの空間。黒薔薇の荊が造った、円形の檻。後ずさるあたしに、黒コートが静かに歩み寄ってくる。

「……来ないで……来ないでよッ……」

体が動かない。

動いたとしても、どうせ逃げ場なんて無い。

もう、終わりだ。

「……目標を補足。」

【Alice】をそちらに送る。《穴》を開通しろ。」

黒コートが何か呟いた。

その紫色の瞳を見たたん、体に力が入らなくなる。

芝生の上に、ぺたりと座り込んだ。

震えが止まらない。

…怖い。

いやだ。

いやだ…助けて。

「さあ……」

大人しく我等と共に来い。」

黒コートが、あたしに手を伸ばす。

…逃げられない。

あたしは、ギョッと目をつぶった。

バチイイイイイイツ

「……………っ!？」

なに?この音……………。

閉じていた目を、恐る恐る開いてみた。

目に映ったのは、青い電光。

黒コートは、あたしに向かって右手を伸ばしている。
その手があたしに触れる、一歩手前で……………その手は止まっていた。

「……………これは…!?!」

驚いた表情をする、黒コート。

手を引っ込めると、もう一度、あたしに触ろうとゆっくり手を伸ばす。

バチイイイイッ

やっぱり、さっきと同じだった。

黒コートの手があたしに触れる直前、青く光る電撃みたいなのが出て……………アイツの手を阻んでる。

……………触れないんだ!

『……………アゝ!?!』

……………おいおいッ!?!?

どうゆう事だこりゃあ……………なんなんだ今のはよお』

「……………わからん。」

電撃に撃たれた手を見つめながら、黒コートが答える。

「…なんらかの加護が働いているようだ。」
『はあ？』

「じゃあ捕まえられねえってコトか!?!?」

目を剥いて怒鳴る狼。

「……そうゆう事だな。」

そう呟いて、黒コートの男は、あたしを横目で見た。

「……失敗だ。」

…失敗？

え？

「じゃああたし…逃げられるの!?!?」

「やった………キヤアアアアア!?!?!?」

喜んだのもつかの間。

突然…足元の地面が消え失せた。

「や……?！」

ヤダヤダヤタなによコレエエ!！」

『…で?』

どーすんだ?

誘導出来ねえんだったらどっかヤバい空間に飛ばされるかもよ?』

「…構わんさ」

次第に落下していく体。遠ざかる穴の入口から、男が私を見下ろしてた。

「死体になる前に回収すれば問題なかるう」

地面にぽっかりと口を開いた、《奈落》。
底の見えない闇が、あたしを呑み込んだ。

…暗い。

寒い…。

どれくらい墜ちたんだろう……？

穴の入口すら、もう見えなくなった。

視線をずらせば、目に映るのは赤い光。

穴の側面は、大量の荊で出来ていた。

あの黒い荊…。

漆黒の闇の中で、時折ぼんやりと光を放つ。

辺りを赤く照らしながら、毒々しく脈打つ。

赤と黒。

ここにはそれしかない。

誰もいないの？

闇が怖い。

独りが怖い。

誰でもいい。

あの狼だっつていい。

返事してよ。

あたしをこんな所に閉じ込めないで。

声を聞かせて。

独りにしないでよ。

苦しくて悲しくて、

寂しくて怖い。

あたしを置いていかないで。

一緒にいてよ。

お願い。

何でもするから。
いい子でいるから。

もう、
あたしから、大切な人を奪わないで……………。

「アリス……」

……だれ……？

不意に指先に触れた、あつたかいもの。

ふわふわで、もふもふの……小さなカラダ。

「猫くん……？」

赤い光の中に……その子は確かにいた。

柔らかい毛並みが肌に触れる。

「じゅめ……んね……？」

狼に見つからないように……頑張つて……カラダ全部消してみたけど……

それだけで……精一杯で……

結局……助けられなくて……追いかけてね……穴に飛び込んだんだ……だ。

「

ポロポロになって、かすれた声。

あたしは、小さな子猫をぎゅっと抱きしめた。

声をあげて泣いた。

闇の中に、ぬくもりと、声が生まれた。

この子と一緒になら、どこだって怖くない。

もう絶対に、離したくない。

長い時間が過ぎた後、あたしは涙を拭いた。

「もう…ずっと一緒だよね」

「一緒にいるよ……」

アリスのそばにいたいから」

優しい声。

「…そういうばなんだけどさ。

名前、まだちゃんと聞いてないよね？」

これからも一緒なんだから、ホントの名前で呼ばせて欲しいなあ…
とか思ったりして。」

「名前？」

まだないよ」

え、無いの！？

チエシヤ猫のやつ……

名前もつけないとか、ドンだけ適当な父親やってんのよ…。

「父さんは、飼い主が出来たらつけて貰えって」

「……飼い主に？」

じゃあ……アタシがつけてあげなきゃいけないんじゃない！

名前のつけ方とかわかんないし……
どうしょーかなあ？

子猫の顔を、じっと見つめてみる。

まだ小さな顔に、ひょこつとした耳。

小さな鼻に、可愛いヒゲがピクピクしてる。

「ねえ……」

「どんなのがいい？」

「変なのじゃなければ何でもいいよ。
ゆっくり考えて。」

そう言ってる割には、早く名前つけてもらいたくてうずうずしてる
みたいけど。

その様子が可愛くって、自然と微笑んだ。

「……………テト。」

思いついた名前を、口に出してみる。

「どづかな……………?」

彼は、照れくさそうに……………嬉しそうに笑ってくれた。

テト。

それが、あたしの大切な子猫の名前。

終わりの見えない闇の中で、

あたし達は……しっかりと抱き寄せあった。

どこへ繋がっているとも知れない深い穴。

あたし達は、だた、墜ちていく……………。

誰かに呼ばれた気がした。

第一楽章・交響曲第9番（前書き）

お待たせしました！

とりあえず『次章予告』です。

第一楽章・交響曲第9番

M a g u s ,

少女と悪魔、

E i n M ? d c h e n o d e r

a c h t
?

W e l c h e r w i l l l

笑うのはいずれか。

次章予告。

……自分が何者かなんて、考えた事もなかった。

あたしがソコで知ったのは、現実とか幻想とか、
その手のモノの境界線が意外とモロかった、ってコト。

あ、それと猫はやっぱりカワイイってコトも。

これ重

要。

まあとにかく…

あたしはソコで”彼”と、”彼女”と、なんという

か…

【アイツ】に会っちゃったワケでして……。

なにやら面倒な事になったみたいです。

北緯 48度31分 東経 09度03分

ドイツ連邦共和国南部 バーデン＝ヴュルテンベルク州

テュービンゲン。

。家作本絵

。イラレー 口

リトルネ

。市都学大

。察警ツイド

。シーイ クトツレーカス

口ク

。猫 翼

。守看

。盤スエチ

一 エ : :

。件事棄遺体死 & 人殺ンゲン

。クツイテスロクア

。様王の一バー

。 ク ル ベ ン レ

— — — — —

*
*
*
*
*
*
*
*
*

。てさ — — — — —

御来場の皆様方。

【幻想曲】はいかがでしたかな？

はて、まだ物足りない…？

そつでしようとも。

”あれ”は、ほんの序

章に過ぎませぬ。

御安心なさいませう。
歌劇はここから幕開けなる故。

……そう。

たった今、最後の役者が
到着した模様です。

…一人と一匹が。

よって、前菜はここま

でと

させて頂きます…。

…と申し上げたいところですが、
その前に一言、御忠告を。

この先、皆様が御覧になるものは、ある種の童話について甚だしく

有害な史実を含んでおります。故に小さなお子様や純粋な

お心をお持ち

の方、……はたまた、過激な描写を苦手となさる方は、お引き取りなされる

事を御勧めしましょう。…無論、勇敢な皆様にとっては恐るるに足りぬ

でしょうが……事によっては皆様の心の中で何か壊れてしまう場合が

無いとも言いませんので。……御注意なさいますよう。

…では今度こそ。

開演と参りましょう。

物語の舞台を、【新世界】へと移し変えて。

そして今宵ご紹介するのは、もう1人の主演人物。

月明かり差し込む
屋根裏で
踊り狂う人影

第一楽章

- e r s t e B e w e g u n g -

猫とアリスと、
45口径のメルヘン。

【The
45
calibers
S】



Welt
+++++

+++++
Aus der neuen

《新世界より》

- GAME - START -

< 222999911777799
『さあ、アリス、始めようぜえ。』
最っ高にイかれたお茶会を……

……ねえ
『

第一楽章・交響曲第9番（ケータイ版）（前書き）

お待たせしました！

ケータイの方はこちらからです！！

第一楽章・交響曲第9番（ケータイ版）

《Ein Mädchen
oder Magus》
少女と悪魔、

《Welcher will
lachen?》
笑うのはいずれか。

次章予告。

……自分が何者かなんて、考えた事もなかった。

あたしがソコで知ったのは、現実とか幻想とか、

その手のモノの境界線が意外とモロかった、ってコト。

あ、それと猫はやっぱりカワイイってコトも。

これ重要。

まあとにかく…

あたしはソコで”彼”と、”彼女”と、なんというか…

【アイツ】に会っちゃったワケでして……。

なにやら面倒な事になったみたいですよ。

北緯 48度31分

東経 09度03分

ドイツ連邦共和国南部 バーデン＝ヴュルテンベルク州

テュービンゲン。

絵 本

& 人殺ンゲンリルネ 。イラレーロ 。猫翼 。家作
。市都大

一ロク 。シーイクトツレーカス
察警ツイド 。守看

ト

学

。

。 件 事 棄 遺 体 死

。 ク ル ベ ン レ ー エ : :

。 様 王 の 一 バ

。 ク ツ イ テ ス ロ ク ア

。 盤 ス エ チ

*
*
*
*
*
*
*
*
*

。てさ — — — — — — — — — —

御来場の皆様方。

【幻想曲】はいかが

でしたかな？

はて、まだ物足りない…？

そうでしょう

とも。

”あれ”はほんの序章に過ぎませぬ。

御安心なさいますよう。

歌劇はここから幕開けなる故。

……そう。

たった今、最後の役者が到着した模様です。

…一人と一匹が。

よって、前菜はここまでとさせて頂きますよう。…。

…と申し上げたいところですが、

その前に一言御忠告を。

この先、皆様が御覧になるものは、ある種の童話について甚だしく有害な史実を含んでおります。

故に小さなお子様や純粋なお心をお持ちの方、

…はたまた、過激な描写を苦手となさる方には、お引き取りなさる事を御勧めしましょう。

…無論、勇敢な皆様にとっては恐るるに足りぬでしょうが……
事によつては皆様の心の中で何か壊れてしまう場合が無いとも言
い兼ねますので。

……御注意なさいますよう。

…では今度こそ。

開演と参りましょう。

物語の舞台を、
【新世界】へと
移し変えて。

そして今宵ご紹介するのは、もう1人の主演人物。

月明かり差し込む
屋根裏で
踊り狂う人影

- GAME - START -

+++++
【A u s d e r n e u e n W e l t
《新世界より》

〕 : e r s t e B e w e g u n g . . .
〔 第一楽章

猫とアリスと、
45口径のメルヘン。

【The 45 calibers】

— — — — —

< 22299999911777799

『 さあ、アリス、始めようぜえ。』

最っ高にイかれたお茶会を.....

.....ねえ』

第20話 ある夜のこと（前書き）

お待ちせす！

今回はまるまる伏線なので分かりにくいかも。

とんでもない矛盾があつたもんだから、一回投稿し直しちゃいまし
た…

先に呼んでた方ゴメンナサイ！！

ある夜に、世界各地で起きていた事のお話です。

第20話 ある夜のこと

．．．．． P M ． 8 ． 4 2
|

フランス＝アルザス地方

……夜の涼しげな空気が、駅前を充たしている。

ガタガタと音を立てる、ローカル線の古びた列車……それが完全に停車して、ドアが軋みながら開いた時。

プラットホームへ、白いパンプスが降り立った。

『ふわあゝ……』

……あらら？到着かしら』

のんびりした口調。

人気のない駅のホームを見渡して、その女性は眠そうに目を擦った。

夜霧の中、純白の髪がふわりと風に舞う。

ヒラヒラふわふわしたロリータ調のドレスに、フリルのヘッドドレス。

透き通るような白い肌。彼女は、手に提げていたバックから携帯を取り出して、いそいそと電話をかける。

ブルルルル……

『もしもし〜？』

指定のポイントまであと少しですっ。

次の列車でドイツに入りますからね
』

.....PM.9:38
|

ドイツ＝ネルトリンゲン

……円形の外壁に囲まれた、小さな街の中。

街灯の薄明かりの下で、煙草の火が瞬いた。
風に揺れる髪を細い指で弄び、ふうつと煙を吐き出す。

『…ええ、ワタシよ。』

こっちはだいぶ前から到着してるわ。
他のみんなはどう…?』

携帯越しの相手に微笑を送り、女性は眼を細めた。
綺麗なウエーブのかかった長髪が、夜闇のなかでいっそう緋色に輝く。

『…そう。』

順調みたいで嬉しいわ。

ところで…この街も相当面白い事になってるみたいよ。

…わかってる。

今はまだ不干涉、でしょう?

安心なさい。

何もしないから…たぶんね』

クスツと笑い、電話を切る。

そして、小さく囁いた。

『…今は放って置いてあげる。』

そのあいだ、せいぜい楽しみなさい』

目の前の闇の先…この街のどこかに潜む、怪物へと。

煙草が石畳の路地に落ち、レザーブーツに踏み消された。

..... P M . 1 0 : 2 7 |

ドイツ＝ベルリン

…この時、世界はどこか違っていました。

むかしの大战によつて、大きな傷をおつたこの街も……すでに、首都としての機能を回復し、ヨーロッパ有数の世界都市として繁栄の一途をたどっている……

そんな事はどうでもよかつたのです。

都市としての風貌や歴史なんて関係なく……この短い時間、まさにこの瞬間。

ベルリンの様子は、いつもと全然違いました。

……部屋の中で遊んでいる、小さな男の子。

彼がふと顔を上げると……さっきまでソファに座っていた筈のお父さんがいません。

キッチンを覗くと、お母さんの姿もありませんでした。

静かすぎる家の中。

すると……

どこからでしょう、音が聞こえてきます。

その曲を聞いた途端、男の子はとても楽しい気持ちになりました。

”この音楽が聞こえてくるところは、きっと世界中のどこよりも楽しい場所だよ”

音色が、男の子の耳元で囁いています。

男の子は玄関のドアを開けました。

いつも賑やかな街の様子は、死んだように静まりかえっています。きれいなビルの明かりは全て消えていて真っ暗。それに、人の話し声も、車の走る音も聞こえません。

でも男の子は、怖くなんてありません。
音が聞こえていたから。
楽しい楽しい、笛の音が。

ふと見ると、家の前に男の人が立っていました。

月明かりの下で、笛を吹いていました。

男の人が、手招きします。

” さあおいで…… ”

男の子は、その人と一緒に行ってしまいました。
…遠いところへ。

じげんくすぬじ…

街に明かりが戻ってきます。

自動車は騒がしい音をたてて、道路を走り出し、
街中に、人々のにぎやかな声が戻ってきました。

ざわめき。騒がしい街の音。
大都会の喧騒が、長い夜を彩っていきます。

大都市ベルリンの時間は、再び、マトモに動き始めたようです。
いつも通り。

……そして。

子供がまた1人、いなくなったことに……まだ誰も気づかない。

この日。

さまざまな場所で、数え切れない”異変”が起きていました。たくさんの陰謀と、たくさんの思惑が、渦巻いていたのです。

この、ドイツという一国の中に…。

それは誰にも気づかれることなく、こっそりと。

そして最後の締めくくり。

試合開始の合図があるのは…深夜0時。

おとぎ話の住人達が、固唾かたずをのんで見守るなか。

ドイツ南西のとある街で、なにやら不思議なコトが、起きよつとじています。

その街の名前は……

第20話 ある夜のこと（後書き）

なんか分かりにくい話でごめんなさい！

次回から新キャラ登場です。

第20 / 5話 舞台裏。(前書き)

やっと…やっと更新できる!!

いつも読んでくださっていた皆さま、大変申し訳ありませんでした。

ボクとしてもこのサイトにかえって来たくてたまりませんでしたーっでも来れなかったのです。理由は活動報告の方に書いときますので、興味を持ってくださった方がいたら後で来てくださ…

え？

早く本編始める？

わかりましたー

前回の後書きの通り、新キャラが登場しますよっ

…どんな風にかは、読んでからのお楽しみですけどねー

第20 / 5話 舞台裏。

.....

あーテストス。

マイク繋がってる？

オケ。それじゃはじめましょーか…

どーもみなさんゴキゲンよろしゅーに。

この世界には、違う世界への入り口がわんさか開いてるらしいね。
いわゆる『異世界』ってやつ。

どーもこーも、人間ってのはその手の話が酷くお好きなようで……。

ほら、けっこうよく聞くでしょ？

洋服ダンスに入ったら向こうは雪国でしたとか、駅舎内の柱に突進したら、9と4 / 3とかいう在るはずのない列車を発見したとか…
…あのうんたらポッターって本、途中で読むのヤメちゃったんだよねー。

あと都市伝説っぽいヤツは、かくれんぼしてて掃除ロッカーに入っ
た子が行方不明になったとか。

「神隠し」ね。

あゝコワ。

異世界トリップをネタにした話がどうしてこつも多いのかね。
現実世界はそんなつまらんのか。

つままないですよねー。

飽きちゃつよねえ。

つーわけで今回お話しするのはそんなクソつまんねーリアルをブッ
壊すタイムリーかつ奇抜な話題。

『ラビットホール』。

って知ってる？

最近ちまたを騒がせてる怪奇現象…

ようは都市伝説だそうで。

細かいトコすつ飛ばして説明すると、異次元の入り口らしいんだよ
ね。

正体不明で神出鬼没。壁とかドアとか鏡とかにフツと現れる……ち
つさいブラックホールみたいなモンなんだって。

興味本位で中に入ったら、向こうにはいかにもってカンジのメルヘ

ン世界がひろがってるとか、
穴から出て来たデカイバケモンに喰われそうになったとか…。

どんだけベタな話ですか。
明らかに作り話だろ。

とか、思いますよねえ、普通の人は。

…ところがどっこい。

この話のヤバいところは、その内容にあらず。

C級映画並みにベタなこの都市伝説、なんとウワサが尽きる事が無いのです。

ネット上のある種のサイトでは、いまじゃ結構な有名どころ。

何故に？

こんな面白さの欠片もないファンシーな作り話に……、つーかはつきり言って作り”話”と呼ぶ価値すらない駄作に。

なぜなぜどーしてこんなにも世間の人々が沸騰してらっしゃるのか？

理由として挙げられる仮説は二つ。

その1。

火の無い所に煙は立たぬ……

つまり『ラビットホール』は実在している。
あるいはそれに近い事象が現実起こっていて、実際に複数の目撃者も存在する。
だからこのウワサの広まりようってコトね。

その2。

世間の人々はバカになった。

この世界には、科学だの論理だので説明のつかない不思議な事が、たーっくさんあるんだよ。

そんなもって、この話にさらなる拍車をかけてんのが…
最近ニュースでやってる、ネルトリンゲンの殺人事件、
それと、どっかのアングラサイトでも話に出てた子供の誘拐事件と
か……

あっはは！

まあね、信じる信じないはあなたの自由なのさ。

でも、考えてもみてよ…

そんな話が本当だったら…

それ超オモシロいじゃん？

第20 / 5話 舞台裏。(後書き)

いかがでしたか？

今回は、新キャラに好きなように語ってもらいました。

キャラの雰囲気的に気に入っていただけたら、とっても嬉しゅう
ございます。

この人物も、いずれ物語に深く関わっていくでしょう。
…たぶんねっ

第21話 脱出(前書き)

アリスが登場。

狼達に追われて穴に落ちた後…アリスとテトは……？

第21話 脱出

……一人じゃない。

口に出せば……どうしようもなく些細なこと……

でも、今のあたしを支えてくれているのは、間違いなくその事実一つだった。

テトは私の腕の中。

すやすやと寝息をたててる。

疲れて眠っちゃったんだね。

普段が頼もしいけど……なんだかんだいってもまだちっちゃいし。

周りに絡みつく闇のせいでも、寝顔は全然見えない……くそっ。
見えたら絶対可愛いのにつ

このまま……

どこまで

落ちていくの？

落ち着こうと頑張ってみる。

冷静になるうとするほど震える指先。

最悪のケースが次々と頭に浮かんでは、あたしを闇に引きずり込む。

”もしこのまま出口が見つからなかったら？”

”もしうつかりテトとはぐれてしまったら？”

やめて。

こんな闇の中でひとりぼっちだなんて、考えたくも無い。

” 狼に襲われたときに、テトがケガでもしていたら？ ”

暗すぎてそんなことわかんない。

でも、とつても苦しそうだったし……眠ったまま起きてこないし……

” ……このまま死んでしまいうんじゃないの？ ”

「 やめて…… 」

そんなこと言わないで。

怖い事を考えさせないで。

語りかけてくるのが自分の心だってコトくらい分かってる。

闇の中で繰り返される自問自答。

…くだらない。

…くだらなくて恐ろしい。

” お姉さんはどうするの？ ”

” 薬を届けるんじゃないの？ ”

それぐらいわかってる。
でもここから出られないのに、どうすればいいの？

”…もう死んでるかもね”

「…いやあ……っ」

考えたくない。

何も考えたくない。

闇が、静寂が、あたしをおかしくする。

気が狂いそう。

”血を吐くぐらいの酷い病気だもの、間に合わなくっても不思議じゃないでしょう”

”この穴から出られたとしても、お姉さんを助けるのは無理かもね”

違う。

そんなことない、そんな……

こんなコトを、本当にあたしが考えているの？

頭の中に浮かんでは消えていく、最悪のケース。

…うつん、最悪なんてありはしない。

悪い状況はいくらでも思いつく。

心の中の不安が、どんどん膨れ上がってくる。

”また……助けられない”

そつだよ……これは間違いなくあたしの声。

あたしの考えてること。

あたしの……心の底にしまった恐怖が、溢れ出す。

”…ママの時といっしょだね”

「っ……………!？」

…いやだ。

いやだもつこんなところいやだ。

出して。

ここから出してよ、だれか……
出してだしてだして

「……っから……出してえ……っ」

「……むにゃ……ありすう……… Z Z Z Z」

「………え」

…びっくりした。

テト…いきなり寝言だよ。

しかもあたしの名前よんでた…

うふふ／／／／

驚いた拍子に、ネガティブな考えはどこかに蹴散らされたみたい。
あきれるほどあっけなく。

ああ、やっぱりテトはすごいや。

あたしの不安なんかあつというまに消してくれるんだもの。

腕の中に微かに見える、テトの姿。

……あつたかい。

「……ありがとう、テト。」

この闇の中にいたら、いつかかならず……気が狂ってしまつ。
心が壊れる前に、穴から出ないと。

この口を、ここから出してあげないと。

くよくよするのはやめよう。

さつきからずっと思っていたことを、やっとの口で実行できた。
暗いことは考えない。

ここから脱出することだけ考えるの。

あたしにはテトがいるんだから。

とはいつても、いつたいたいようしよう。

そう簡単に上手い考えなんて浮かぶはずもないし…。

ん？

今きづいたんだけど……

あたしの服の中で、なんか光ってる？

エプロンのポケットから漏れる、金色の光。

……まさか。

ポケットに手をつっこんで、中のモノを引っ張りだすと、

あたり一面がまぶしい光に包まれた。

「……………なに…?」

急に明るくなったもんだから、目がしばしばしてよく見えない。けど…

この光ってるのって、もしかして…

「白ウサギさんがくれた……………?」

テトを起こそうと思ったけど、そんな間もない。

金色の鍵はあたしの手から飛び出すと、どんどん輝きを増していつ

て……

爆発した。

闇が切り裂かれる。

茨の壁はぶち破られて、大きな穴があいた。

常闇の穴の中にあいた、光の出口………

出口だ！！

いや、出口ができたのはね、すごく嬉しいんだけど……

なんか…体が吸い出される!?

「え!?

あ、いやちよつとまって待っ……きゃわっ」

すごい吸引力……なんて言ってる場合じゃないですね!

縦穴の側面に開いた出口は、問答無用であたしとテトを引きずり込んだ。

その穴をくぐった途端。

目に映ったのは…広い夜空と、そこに浮かぶ大きな満月。
久しぶりに見た外の世界……とつてもキレイ。

そして、

空中に放り出される感覚。

え？

あの、もしかして、

落ちるんですか？

「……………~~~~ツ!？」

この瞬間について一応感想を述べておきますと…人間って本当に怖い時は悲鳴なんて出ないんですね！

そんなカンジで悲鳴の一つどころか息もつかないままあたしはテトを強く抱きしめてああ今日はあたし落ちてばかりだなあなんて思

いながら考えたんですけどたぶんこのままいくと地面に激突して気絶するんだよねあた……

ドスンっ

……よかった……あんがい……地面が近くて……

たぶん死んでは……いないとおもっ……

薄れゆく意識の中……

誰かの怒鳴り声と……悲鳴が聞こえて……

最後の瞬間……ぼんやりした、あたしの目に映ったのは……

黒い……

第21話 脱出（後書き）

ひとまずアリスはこれでオツケー！

気絶しちゃったみたいですけど…まあ大丈夫でしょう
…たぶんねっ

今回は第1章の中で重要な方々の登場です。

第22話 トレモロ（前書き）

お久しぶりですーッ

…ってかこんだけ間をあけてたらもう誰も見に来てないんじゃないんですかね？

一応最後まで続ける気はあります！

…すごい時間かかりそうだけど。

とりあえず、新キャラ達を中心としたストーリーで話の本筋へ入っていきましょう。

それではどうぞー！

第22話 トレモロ

月が、まるい。

今夜の舞台にはなんとも似合いな空の演出。

金色に輝く月は、空に開いた巨大な天窓となって下界を照らしていた。

そして、月明かりの下で待つ女性。

あの緋い髪を風になびかせ、携帯の時計をじっと見つめている。

もうすぐ……彼女がくる。

そう胸の内で唱えるように思いながら、デジタル表記の数字を見つめ続ける。

2と3と5と、そして9が仲良くならんだ携帯の画面。

刻一刻と過ぎていく時間。

あと45秒、あと44秒、あと……

女性はふと視線をずらすと、少し離れた路地の暗闇を横目で見た。どうやら相手方も待つているらしい。

ほんの数秒後に訪れる、試合開始のゴングを。

全てはその時、動き出す許可を得る。

「……あらあら、ずいぶんと落ち着きの無い人ね」

街のどこかにいる相手方へ、不敵な笑みを送る。赤い唇がわずかに歪んだ。

そのとき。

「…！」

それはほんの一瞬の事だったが、女性はなんの雑作もなくそれに気づいた。

”穴”が開いた。

少女がどこかに辿り着いたに違いない。

あの暗闇のトンネルを抜けて、この国のどこかに。

予定通りならば「D-2」に。

携帯を見れば、いつのまにか0が三つ並んでいる。
深夜0時0分。

試合開始だ。

ざわっと空気が揺れて、街の城壁から何か飛び出した。黒い影が脇目もふらずに”穴”の開いた地点へと走り出す。

「あら、抜け駆けなんてさせないわよ？」

そう呟いた時にはすでに、女性は単車にまたがっていた。

エンジン音が鳴り響き、マフラーが唸る。

そして赤い車体がきらめいた刹那。

女性を乗せた赤い騎馬バイクは黒い影を追い抜いて、あっというまにネルトリングンをあとにする。

国道を失踪する彼女が向かう場所は……

「D-2」。

そして、…日付が変わってから12時間後……。

”差し込む陽光。
暖かな日だまり。

乱雑に敷き詰められた石畳が、どこまでも広がる国……

……ドイツ。

そこは魅惑の古都。

深き森林に覆われた平野、野原を切って流れる穏やかな大河。
野には草花が咲き乱れ、静寂に包まれた自然が神秘を語る。

森の奥深くにひっそりと眠るは騎士達の古城。

未だ中世の面影を色濃く残す旧市街の街並は、まるで御伽話の中へ
迷い込んだかのような幻想の彼方へ人々の心を導き……

そう。

そこはまさに、現実となった”メルヘンの世界……”

「つてなわけあるかボケええええ！」

少女はかなきり声をあげると、手にした雑誌をぶち破った。

「あゝあ……」

ちよつとやめてよ、ゴミになるでしょ……」

机の向かいに座った青年が、静かにため息をつく。

バラバラになったガイドブックのページがヒラリヒラリ。紙吹雪になつて図書館の床に散った。

「詐欺だああこんなの嘘っぱちだ訴えてやるうううう」

「詐欺つて……そんなまた大袈裟な。」

呆れ顔の青年を見て、少女は涙ぐんだ目をキツとつり上げる。

「大袈裟ちゃうわ！」

そりゃあたしだってねえ、昔はそう信じてたわよ！

メルヘンな情景、ドールハウスのような家が連なる街並……はあ
あああ」

今度は少女の方がため息をついた。

大きくて陰鬱な吐息は、途中であくびに変わった。

「ふああああ。」

んも〜やだやだやっつてらんないわよおこんな生活〜」

椅子にもたれたまま上を向くと、明るい茶色に染まった髪がふわりとゆれる。

彼女がエバーハルト・カール大学へ留学してから、早3年の歳月が流れていた。

「時の流れって残酷よねえ。」

メルヘンの国で暮らすだなんて……純粹無垢な夢を見てたあの頃が懐かしいわあ」

「……今もそれなりに夢見がちだけどね」

気怠そうに腰をあげて、青年は床の紙切れを片付けにかかった。

「フランクはいいわよもともとこっち育ちなんだから。」

こちららワザワザ東の島国から飛行機に乗って飛んできてんだよ？
ちったあ夢見させるや〜コンチキシヨウめっ！」

少女がわめくたびに、木製の椅子がギシギシしむ。

へたすると今にも壊れそうな勢いだ。

「さんざんお勉強させられてさあ何が義務教育だっつのまったく、
そんでもって受験の修羅場をどうにか制覇して後はゆったりまった
りとしたキャンパスライフを送って余生を楽しむつもりだったのに
……
もおおお嫌だ何がゲルマニアだ何がロマンチック街道だ……!!」

パンツと机を叩いて、椅子の上に立ち上がるなり彼女は言った。

「レポートの書き方なんてわかんないよぉっ！」

「……今更なに言ってますか。
レナ、今年で3回生でしょ？」

青年はテーブルの下から麗奈を見上げて言った。
鈍いアツシユの瞳はなんとも眠そうである。

「……うううそりゃそうだけど……
パソコンの使い方なんて何年経とうが分かんないもん……」

(機械音痴……)と頭のなかで思いながら、フランスはゴミ箱へ紙く
ずを放り込んだ。

フランツ・アウフレヒト と綾崎 麗奈、ふたりは大学生。

日本人の麗奈は小さい頃からドイツのメルヘンな雰囲気に憧れていたらしく、中学、高校のころから猛勉強して留学の切符を見事勝ち取った。

だがしかし、ドイツにすればもうメルヘン率500%間違い無しな夢の暮らしが出来ると思い込んでいた麗奈は、知る由もなかった。留学した後だって結構勉強しなくちゃいけない事を。

「もういやだ〜！大学なんて入んなきゃよかつたあ〜」

ドイツ暮らしという目的をかなえた今、麗奈に学習意欲を湧かせる動機などにも残っていなかったのである。

私欲のために高校を主席で卒業した彼女は今やその面影すらない。

(…ど〜せ、どっかの魔法学校にでも入学できるとか、ファンシーなこと思ってたんだろなあ。)

眠い目をしばしばさせながら、フランツは席に戻る。

麗奈を見ると、少しやる気が出たらしくノートパソコンの画面とにらめっこしていた。

「どづ？なんとか書けそう？」

フランツが麗奈の顔を覗き込むと……

彼女は頭から煙を出していた。

「こ、こここのフォントとかシフトキーとかってなんですか……？」
「それ先週も教えたよ」

確かな話、麗奈は完全に、誰がどう見ても、かなりディープな機械音痴少女だった。

いまだにキーを右手の人差し指一本でうっている……その様子を見て、フランツは思わずあくびをした。

「うっがあー！

だいたいなんでパソコンなんか使わなきゃいけないワケ！？
こんなの手書きだったらもっと早く出来るのいい」

「今時、どこの大学もパソコン限定だと思うけど……
日本の学校には、パソコン使う授業ってなかったの？」

「あ、あるには……あつた……けどお」

たちまち麗奈の顔が曇っていった。

フランツには容易に想像出来た。

「ほぼ全教科が”5”であるなか、情報系の教科だけが”1”の珍妙な通信簿が……」

「……今なんか想像したわよね？」

「えっ……」

ぎくつとして我に返ると、麗奈にもものすごい剣幕で睨まれていた。

「そ……そんなこと、ないよ……」

「ホントに？」

「日本じゃ嘘つくと舌抜かれるのよ？」

「えええ！？」

生まれも育ちも欧州ドイツのフランスには、この話は刺激が強かった。

（さすがにサムライやニンジャはもういないんだろうけど、日本にはまだそんな残酷な刑罰が残ってたのか……
やっぱり怖いとこだな……ニッポン。）

多くの日本人が知らない今現在、フランスが地獄の閻魔様の伝説など知るはずも無かった。

「……はあ。」

「そんなことより問題はレポートなのよ！
提出期限明日だよ？」

「ああ、今学期の単位どうしよ……」

「……一回留年してみたら？」

フランツは小声でぽそつと言ったのだが、なかなかどうして、麗奈は地獄耳だったらしい。

「…ふうらああんつうつうつ…！…！」

「あつ、いや…」

今の無し、僕なにも言ってます…！」

「フランツのばかあああああああああああああああつっ
！…！」

どんがらがっしやああん

椅子が倒れる音と本がテーブルから落ちる音、続いて麗奈の怒声と泣き声に追い立てられてそそくさ逃げるフランツ。

そして二人は……

案の定 図書館から追い出された。

第22話 トレモロ（後書き）

…それにしても間が空いた。

自分でも冒頭部分どんなだったか忘れてたくらいなもの（オイコラ）

ここ最近でイメージがだいぶはっきりしたので、しばらくはスムーズに更新出来そうな気分！

…あくまで気分です。

きつとたぶんもしかしたら…ってカンジなので、また遅くなったらゴメンナサイッ！

ああ…ガンバレ自分。

というわけで、久しぶりに読みに来てくださった方々、ありがとうございます！
ございました！

第23話 腹がへっては戦はできぬのです。(前書き)

サブタイトルで遊びすぎた…！

あれって毎回かんがえるの結構たいへんですよねっ
かといって「第23話」とかだけなのは味気なさすぎる……うーん、
むずかしいのう。

第23話 腹がへっては戦はできぬのです。

図書館の入り口で突っ立っている人影が2つ。
追い出されたフランツと麗奈である。

「…うあああ…また追い出された…」

「僕はもう慣れてきたけどね」

落ち込んだ様子の麗奈を見て、フランツはしれっと言った。

「だいたいノイフィロなんかじゃ勉強できないのよ。

いかにも勉強するための場所…って雰囲気、嫌なカンジだわ」

振り返って図書館を睨みつける麗奈。

Neu Philologikum。

通称ノイフィロと呼ばれるこの図書館には、近代以降の文献が数多く納められている。

文献の持ち出しが禁止されているかわり、学生達が休憩をとれるようにカーペットを敷き詰めた仮眠スペースがあるなど、図書館の利用者に対しかなりサービスがいい。

が……麗奈の難癖からは逃れられないのだ。

「図書館は勉強するための場所だよ…
特に大学の図書館は」

そう言って、眠そうに歩き出すフランツ。

その後ろから、麗奈がタタタツと駆け寄ってくる。

「ねえねえねえ、図書館追い出されちゃったしさ、
ほかに行くところないしさっ」

「いやいや、行くところならたくさんあるでしょ。
中央図書館だって開いてるんだし……」

また眠そうにあくびをしてから、フランツは麗奈を振り返った。

「なに？」

僕ん家になら、来てもいいけど…ちゃんとレポートかいてよ？」

「ううん。」

勉強じゃなくなってるね、おやっさんのトコにお昼食べにいこう
「腹ごしらえかよっ……」

そつえば……お昼はまだだったっけ。

腕時計を見て、フランツはおなかをさすった。

「うん、まあ……そだね。」

じゃあ、何か食べにいこうか」

「やった〜フ란ツのおつくりい！」

「だれもそんな事いってません」

ミハーな日本人と、低血圧なドイツ人。

一見両極端な性格の二人組は、石畳の道を西へと歩き始めた。

流れるネッカー川に、プラタナスの小道。

ここはドイツの南西部、バーデンヴュルテンベルグ州の小さな都市。
名前は”テュービンゲン”。

人口は8万ちよつとという比較的小さな街で、なんとその4分の1
が大学生と大学関係者。

実はこの街、17世紀から19世紀にかけてルター派正統神学の中
心地となった、真正正銘の”大学都市”なのだ。

世界中から学生の集まるこの街には、ドイツ人だけでなく、白人から東洋人まで様々な人々が住んでいる。

フランスと麗奈は、そんな学生達のうちの二人。

「ふっふっふん」

上機嫌で鼻歌を歌っている麗奈。

どうやらレポートの件を忘れて息抜き出来るのが嬉しいらしい。

そのとなりで、フランスはコツコツと足音をたてている。

初夏の眩しい日差しに目を細め、彼は少しのびた前髪をかき分けた。

「今日は何食べよっかな」

ねえフランス、今の持ち合わせって上限いくら？」

「だから」

おごるなんて言っつてな……」

「…ん？」

ねえフランス、あれ……」

フランツの呆れたような返事を遮って、麗奈が二人の前方を指差した。

「え？」

フランツがそちらを見ると、道の端に止められた郵便局の黄色いバンが目に入った。

「郵便局の車がどうかしたの？」

フランツが麗奈に向かって言うと、彼女は頭をぶるんぶると振った。

「ちがう！」

後ろよ、車の後ろ。ほらよく見て！」

いきなり麗奈がフランツの頭を掴み、車の方へぐいっと向き直させる。

首をへし折られるのかと思ってフランツは内心ギョツとしていたが、おかげで寝ぼけ眼がすっかり覚めたらしい。

再びバンの方を見て、彼は納得したようにうなずいた。

停車されたバンの後ろで、赤いものがひよこひよこ動いている。

一瞬なんだろうと思ったフランツだったが、すぐに見慣れた人物の事を思い出した。

「…スカーレットさん？」

フ란ツが声をかけると、その女性はバンの後ろからひよこっとなん顔を
を出した。

眼が覚めるような緋い長髪。

唇も深い深紅で、服装までもがほとんど緋づくめ。

「あら、久しぶりね二人とも。」

フ란ツと麗奈を見つめて、緋色の瞳がにっこりと笑った。

「お久で〜す！」

スカーレットさん何してるの?」

「ええ、ゴミ出しを手伝おうと思ったんだけど……」

身に纏う緋と比べて極端に色白な彼女の両手には、大きなゴミ袋が
一つずつ握られていた。

「あ、そうなんだ。」

でもスカーレットさん、ゴミは……」

麗奈が苦笑いで言いかけた時、すぐそばの店の扉がバタンツと勢い
よく開いた。

中から出てきたのは慌てた様子のウェイトレス。

「ちょ、ちょっとスカーレットさん!？」

何してらっしやるんですかあ!」

「ゴミ出し手伝ってくれるんだって」

麗奈が代わりに答えると、ウエイトレス姿の少女はさらにギョツとしたようだった。

「えっ!？」

そ、そそんな手伝ってくださるだなんて感激というか畏れ多いと
いうかもつたいたい……

ってというかゴミ捨て場は裏口ですよっ!」

「あら、そうなの?」

スカレットは大して驚いた様子も無く、そのままゴミ袋を裏口ま
で運び始めた。

その様子を見て、ウエイトレスがまた悲鳴のような声を上げる。

「ああっ!

いいですそんな私がやりますからっ!」

「え?でも……」

「スカレットさんは中でお休みになっててください!
長旅でお疲れになってらっしやるんですから……
ってどうか!」

少女はスカレットからゴミ袋を奪い取ると、

「アナタみたいな絶世の美人にゴミ捨てなんてさせられませんん

っ／＼／＼！」

と、叫びながら大急ぎで店に帰っていった。

「あらあら。

あたしも一回やってみたかのに、ゴミ出し」

クスクス笑いながら、少女の背中を見つめるスカーレット。

その姿が店の中に消えると、彼女はフ란ツ達の方を振り返る。

ウェーブのかかった緋髪が風に揺れた。

「さて、わたし達も入りましょうか。

あなた達、お店に用があつたんでしょう？」

「あ、はいっ！」

そして、スカーレットに促されるまま、フ란ツと麗奈はお店の入り口へ入っていったのだった。

第23話 腹が入っては戦はできぬのです。(後書き)

またキャラがふえましたー。

とはいえ、現在はあくまでフ란ツと麗奈が主軸。
なので、キャラの増え過ぎで收拾つかねえぜ！な状況にならないよ
うに頑張りますっ

ああ……早く帰ってきておくれ主人公っ！> <

第24話 胡桃割り人形

テュービンゲン郊外にひっそりと営業している、「Der Nu? knacker」。

淡い緑の葉を茂らせ始めた、街路樹の木陰の下。

木漏れ日の映る、木製の古い扉を開くと……路上から地下へと続く階段が現れる。

「ひゃ〜。いつ来ても涼しいトコよね！」

石の階段を下りながら、麗奈が叫んだ。

ドイツの夏は比較的過ごしやすい。

特に6月は一番快適な季節なのだが、たまには暑い真夏日もやってくる。

そして一番の問題は、ドイツの少しばかり乾燥した気候だ。

日本育ちの麗奈はもちろん、フランスだって喉の乾きには寛容でなかった。

「…のど、かわいたね…」

ワイシャツの襟を少し開いてフランスツが言う。

元々が無口なせいだが、少し声がかすれてきていた。

こんな時「Der Nu? knacker」のひんやりとした空気はとても気持ちがいい。

そんな事も込みで、二人の行きつけのお店である。

階段を下りきると、思ったより広めの部屋に出る。

石造りの壁に囲まれた地下室。

そこを改築して、テーブルやバーカウンターが置かれている。

オレンジのランプが天井から吊るされ、小洒落た店内にはレコードの時代遅れな曲が流れていた。

「店長さん、お客様よ」

スカーレットの艶のある声が響くと、カウンターの向こうから誰かが顔を出した。

「おお、お前さん達か」

「まいどです、おやっさん」

麗奈が「おやっさん」と呼んだ老人は、短いあご髭に手をやると、

「何にするかね」

とそっけなく聞いた。

「あたしオムレッツ〜！」

麗奈の声が地下の店内に響く。
それを聞いて、

「じゃあ僕も」

とフランツが言う。

「あと飲み物。」

ひからびて死にそうなんです……」

「はいはい、お待ちどうさまっ」

店の奥から、さっきのウェイトレスの少女が駆けてきた。

ウェイトレスとは言っても、その服装はレストランなどで目にするものよりも、ドイツの民族衣装に近い。

古びた酒場にはぴったりの印象だ。

「二人ともいつものでよかったですよね？」

「うん、ありがとう」

お盆にのったグラスを受け取ると、フランツはありがたそうに喉を潤した。

料理が出来るのを待つ間、麗奈がスカレットに話しかける。

「ねえねえスカレットさん、昨日までドコに行ってきたんですか？
随分長い間、街から出てたみたいだけど」

「ええ、ちょっとネルトリンゲンまで、ね」

不思議な笑みを浮かべて、スカーレットは答える。

二人の会話を聞きながら、フランツはじっとスカーレットを見ていた。

そういえば前々から気になっていたけれど……この人、何者なの？

スカーレットがテュービンゲンにやってきたのは、つい一ヶ月ほど前のこと。

気づいた時にはこの店に居候していた謎の美女。

麗奈には甚だしく欠如した、大人の魅力というものを持った人だった。

本職は不明。ただ、この店では「占い師」ということで通っている。なんでも古いジプシーの血脈なんだとかで。

これだけでも十分謎が多いが、問題なのはその容姿だ。

…赤い。

とにかく赤い。

その美しい髪は、もはや単純な”赤毛”で済ませることの出来ないほどに、透き通るような緋色。

おまけにあの眼。

フランツは前々からカラコンだと思っていた。そうでなければ、あの瞳の色は明らかに異常だ。

アルビノもびっくりするほどに、瞳の色は純粹なルビーだった。

なんであんなに赤いんだろ？

変わった女性、と思っただけじゃあそれきりだし、不信感を抱いてい
るわけでもないのだが……

フランツとしては、この謎がどうにも気になってしょうがないのだ
った。

「……フランツ？ねえフランツ聞いてる？」

「あ…ごめん、なんだっけ？」

はっと我に返ると麗奈がこっちを見てむくれている。

「も〜ポケットとしないでよ。

せっかくスカーレットさんが占ってくれてくれるっていうのに」「

グラスを片手に、麗奈がフランツの背中をパシパシ叩く。

「いたいいたい………というか、占うって何を？」

「そうねえ………」

たとえば、君の今日の運勢とかかしら？
それとも未来を見てあげましょうか………」

そう言うと、スカーレットはハンドバックを机の上に置いて、

「さあ、どうするの？」

フランツ君。「

「占ってもらいなさいよお、スカーレットさんはホントに凄いいんだから!」

うん、と首をひねっているフランツを見て、麗奈がもどかしそうに諭した。

「この前だってあたし、無くしたネックレス見つけてもらったのよ! それともなに？」

フランツくんは占いなんて非現実的なものは信じませんか？」

実を言うと、別にそう言うわけではなかった。

フランツはむしろ、まじないだとかその手の類いにはすぐぶる寛大なタイプの人間だったのだ。

この世の全てが科学だとか理論だとかで説明出来るなんて断定できない。

占いなんて嘘っぱちだなんて、よく知りもしないのにどうして知ったかぶりができるだろう？」

人間ごときが結論をだすにはこの世界はあやふやすぎるのだ。

「ねえ、フランツ！」

「あ、うん。」

「じゃあ……よろしく願います。」

麗奈が体を揺さぶり始めたので、フランツはしぶしぶ了承した。

「うふふ。」

「じゃあ、はじめるわね」

スカーレットは机の上のハンドバックから、何やら板のような物を取り出した。

「あの……やっぱりランプとかタロットカードとか使っんですか？」

フランツが訪ねると、麗奈が、

「チツチツチ。」

「スカーレットさんはそんじょそこらの占い師とはひと味違うのよ！
使うのはカードじゃなくて……」

「じゃあ水晶玉でも出てくるのか、なんて思っていると、フランツの目に意外なものが飛び込んできた。」

「スカーレットが取り出した板はどうやら折りたたみ式になっているらしく、彼女は静かにそれを開く。」

すると、ちょうど正方形の版になった……そこには赤と白のマス目が並んでいる。

「……チェス盤……ですか？」

「ええ、そうよ。」

続いてハンドバックから取り出されたのは、チェスの駒だ。宝石のような緋い爪がそれらを一つ一つ摘み上げる。白と赤の軍勢は、慣れた手つきで盤の上に並べられていった。

「チェス占いなんて聞いた事ない……」

「そりゃそうよ。世界中でもスカーレットさんしか知らないオリジナルなんだから」

訝しげな様子のフランツに麗奈が言う。

いつのまにか最後のポーンがセットされたらしい。少し暗い店の中で、赤と白の軍勢は静かに向かい合っていた。

……それで、これからどうするんだろっ？

まさかこれからゲームしようなんて話じゃないだろうけど……

そんな事を思つて不思議そうな顔をするフランツに、スカーレットが声をかける。

「さあ、吹き飛ばして」

「あ、はい……え？」

吹き飛ばす？

言葉の意味が理解出来ず、フラントは少し混乱した。
そんな彼に、麗奈がじれったそうな顔で説明する。

「吹き飛ばすのよ！」

誕生日ケーキの蠟燭を吹き消すみたいにつ

「いや、そんなこと言ったってこれ……」

息で倒す？

32個もある駒を？

紙で出来てるんじゃないし、1個も倒せないと思っただけど……

「いいから早くやる〜！」

「は、はい……」

何がなんだかさっぱりわからない。
でも、やれと言われているんだから……言っ通りにした方がいいんだ
ろっな。

フランスは麗奈に急ぎ立てられながら、はぁ……とため息をついた。

その結果、計31頭の駒が倒れた。

「……………え。」

「あら、結果が出たようね」

涼しい顔のスカレットが、一つだけ残った駒を手取る。

「……………え？あのいや何で」

「なになに！？」

なんて出たんですかスカレットさん！」

はしゃぎだす麗奈に、スカレットが手の中の駒を見せた。

「白のポーンね」

「おお〜！」

それでそれで？

どういう意味なのっ？」

「いや……………だから何で……………」

なんでため息で倒れるんだ？

フランスは、試しに倒れていた他の駒を手にとってみる。
……息で倒れるような重さじゃない。

それがどうしてため息程度であんなに倒れ……

フランスの素朴な疑問は無視したまま、占いは進行しているようだった。

「クイーンサイドの白のポーンが一本……座標は……」

結果を確かめながら、スカーレットはポーンをしげしげと眺めている。

そして、不意に謎めいた笑みを浮かべた。

「……思った通りね」

「え？なんですか？」

麗奈が首を傾げると、スカーレットはにっこり微笑む。

「何でもないわ。」

さて……フランス君。」

「あ、はい」

占いのトリックがさっぱりわからなくて、これはもう魔法という事でいいやと思っていたフランツは慌てて顔をあげた。

「占いの結果だけど、なかなか面白い事がわかったわ。今日1日、これからあなたに起こる出来事よ」

「未来……ですか？」

意味深な言葉に、フランツは少し体を固くする。

「そう構えなくてもいいわ。

誰かが傷つくわけでもなく、不幸な目に遭うのでもない……多分」

「え？」

いや多分てそんなアバウトな」

「フランツ君。」

スカレットが、フランツの顔を覗き込んだ。

透き通るような緋い瞳に見つめられ、フランツは思わず息をのむ。

そんな緊張した顔を見て、占い師は……急ににっこり笑った。

「あなた、お友達が増えるわよ」

「え……あ、お…ともだち？」

「そう、お友達。」

嬉しそうな声で繰り返すと、スカーレットは商売道具をバッグに片付け始めた。

「よかったじゃないフランス！」

あなた社交性ないんだからちようどいいわ」

無邪気に笑っている麗奈を見て、スカーレットはニヤリとする。

「ちなみに、女の子よ」

「…え？おんな……」

それを聞いた途端、麗奈の顔が少し引きつった。

「そう。可愛い娘よ、仲良くしてあげてね」

そこまで言うと、スカーレットはフランスに向かって右手を差し出した。

「3ユーロね。」

「あ……やっぱりお金……いるんですね」

悪い予想が的中してしょげるフランツ。

そのとなりで、なぜか麗奈は悶々としていた。

「お、女の子……可愛い女の子……いや、でも……」

そんな二人の前に、ウエイトレスの少女が歩いてくる。

「お待ちどうぞさま！
オムレツですよ」

机の上にほかほかのオムレツが置かれて、白い湯気を上げた。
でも、二人の学生はどうにも顔色が悪い。

……いつもは大喜びで食べだすんだけどなあ？

首を傾げるウエイトレス。

そんな状況を見て、スカーレットだけは可笑しそうにクスクス笑うのだった。

第24話 胡桃割り人形（後書き）

お店の名前、「胡桃割り人形」って意味だそうです。
おやっさんが言っていました。

ところでところで、

携帯版サイトから見た時にお店の名前のスペル……ちょうどUとK
の間にあるドイツ文字が表示されないらしいんですよ。

「エスツェット」っていうアルファベットみたいなのですが、ま
あSと同じようなものだと思います。

（かなり適当）

それではまた次話で。

第25話 ラビットホール（前書き）

最近なんだかグダってる…

たぶん湿気のせい！雨続きでじめじめだから。

あまりにストレスたまるので、金欠にも関わらずネコ雑誌買ってしまいましたよ。
癒されるんだなあーこれがっ！

和歌山電鐵貴志駅のたま駅長カワイーツ！

>
<

…はっ！

いかにいかに、本編にはいらねば…

それではドウゾー！

第25話 ラビットホール

「Der Nucknacker」でお昼を食べ終わった二人は、旧市街を歩いていた。

パステルカラーのかわいらしい家々の間、曲がりくねった狭い路地。

「……………うん…女の子かあ…」

まあフランスの事だし、でも……………すっごくカワイイ娘だったら…？」

「ねえレナ、さっきから小声で何ブツブツ言ってるの？」

フランスが尋ねると、麗奈はギョツとした様子で振り返った。

「えっ!？」

あついや、何でもない何でもない!

あははははっ

「……………」

ならいいけど……………」

怪訝そうに首を傾げるフランス。

「あ、そ、そんな事よりさ、ほらレポートよ〜!

あれどうしよっかなあ〜あははは

「ん〜、それじゃ今から家で続きしようか。
がんばれば明日までには終わると思うし」

「そ、そうだねっ、がんばんなきゃね…
あははは……」

慌てて話題をそらした麗奈だったが、残念な事に口からでたのは自分自身が今一番触れたくない話題だった。

「……はあ。」

またパソコンの前で小一時間レポート作成……そう思うとどうにもやるせない。
がっくりと肩を落として、麗奈はフ란ツの後ろをついていく。

と、その時。

「……おっ？」

最悪の気分であつむいている麗奈。

その耳に、なにやら騒がしい声が届いた。

「……ちよつとフランツ」

「ん？」

フランツが振り返ると、麗奈は5メートルほど後ろに突っ立っていた。

ちょうど脇道があるらしく、彼女はその方向をじっと見ている。

「どうかしたの？」

何やら興奮気味の麗奈は、脇道の方を見たまましきりに

「こっちこっち！」

とフランツを呼ぶ。

(また寄り道して……)

課題を終わらせるのにも半日以上かかる麗奈の事だ、早く連れて帰らないと明日の朝までレポートを手伝わされる。そう思ったフランツは、

「早く帰ろうよ〜」

「いいから！」

ちよつと来てつてば「

「ええ？」

レポートはどうするんですかー」

「黙れ

その事は言つな「

「じゅめんなさい。」

しぶしぶ脇道のところまで引き返す。

道の向こうには、なにやら人だかりが出来ているらしかった。

「ね！ね！なんか事件かな？」

「みたい……だね？」

「いったいなんだろう？」

この街で事件なんて滅多にないから、この人だかりにはそれなりのワケがあるんだろう。

事故？

それとも……

「殺人事件かも知れないわね！

なんかパトカーのサイレンとか聞こえちゃってるしー！」

勝手に盛り上がってる麗奈を見て、不謹慎な……と呆れ半分、フライングも少し興味がある。

もう少しよく見ようとして、彼は半歩前に進み出た。

すると、

「あ、…あれロルフじゃないかな？」

「え？」

「そマジほんとに？」

人混みの中に、見慣れた人物が1人。

同じ大学の仲間らしき人影が背伸びをして前を覗き込んでいた。

どうやら向こうも二人に気づいたらしく、大きく手を振っている。

「ほら、こうなったらもう見に行くしかないっしょ！」

麗奈の上がりきったテンションを目の当たりにして、フ란ツもとうとう折れた。

「わかったよ……」

「じゃあ、ちよっとだけね」

近くへ行ってみると予想以上にたくさんの人がいて、狭い路地が少し詰め状態になっていた。

この大人数を引き寄せているのが何なのか見ようと麗奈がピョンピョン飛び跳ねている横で、背の高いフ란ツはかろうじて路地の奥を見た。

人ごみの向こうには黄色いテープが張られていて、その中には警察が数人と若い男が一人。

ちよつと、事情徴収を受けている最中らしかった。

「よう二人とも！」

人ごみの中から声がしたかと思うと、ロルフ・クリューガーのが現れた。

「ロルフ！」

ちよつとなんなのこの人ばかり……」

「それがさ、昨日の夜中にここで喧嘩してたらしいんだよ」

「喧嘩？」

フランツが怪訝そうな顔をするのを見て、ロルフは腕組みをしてうなずいた。

「いや、俺も良くわかんないんだけどよお……」

なんか酔っぱらった学生が殴り合ってたみたいでさ。

でもって、今日になってここを通りかかった人が見つけたんだとさ」

そう言つて、ロルフは立ち入り禁止のテープの方をあとで指す。

「ボロツボロになって倒れてるのを三人な。

どいつも命の危険、ってほどのケガじゃなかったんだけど顔がまあ酷い有様でなあ。

まともに喋れるヤツが一人残って警察とお喋り中ってわけだ」

「じゃあ他の二人は病院送り！？」

興味津々、といった様子で麗奈が目を輝かせている。

このぶんだとレポートの件はまた忘れてるんだろっな、と思ったが
フランツは黙っておいた。

「ああ、さっき救急車で運ばれてったけど……
ありゃ一方的にやられてたな。

二人とも鼻の骨が原型止めてなかったぜ、
まあ、どいつもガラの悪いチンピラっぽかったからどうでもいーけ
ど。

っていつか問題はそこじゃねーんだって！！」

「うわっ、なにどうしたのさいきなり？」

突然ロルフのテンションがMAXになったので、フランツは思わず
後ずさった。

「どうしたもこうしたもねーよ、
あいつら見たんだって！」

警察と一緒にいる痣だらけの男を指差して、ロルフが興奮しきって
まくし立てる。

「み、見たって…何を」

眉をひそめるフランツ。

すると一度深呼吸をしてから、とてつもない秘密を暴露するような
口調でロルフは重々しく口を開いた。

「……ラビットホール。」

ルの字を言い終わった後、さも自分が重大な役目を果たしたかのよう
うに、したり顔になるロルフ。

その後話題に食いついていったのは麗奈であつた。

「ら、ラビットホールって言ったらあの都市伝説の…!?!?」

「そう!」

その都市伝説のが現れたんだってよ、この路地に!」

すっかり盛り上がっている二人をよそに、フランツはキョトンとし
た顔をする。

「……ラビットホール、ってなんだっけ?」

流行に疎い彼は、都市伝説についてもほとんど興味がなかった。
そしてフランツの問題発言を聞いた途端、麗奈とロルフはこれ以上
ないというくらい酷い軽蔑の眼差しをフランツに送ってきた。

「ちょ……そりゃないぜ冗談だろフランツ!?!」

「フランツ、今度ばかりはさすがにがっかりだわ……」

「……え?」

そんなにマズかった?」

フランツが頭をかくと、二人は神妙なおもむきで何度もつなずく。

「いいフランス？」

この際だからはっきり教えてあげる！

ラビットホールで言うのは今国中でいっつつつつちばーん有名な話題よ！」

深刻な顔でそう言うと、麗奈は携帯を引っ張りだしてフランクの顔ギリギリに突きつけた。

「ほらコレよコレ！

ちゃんと読んでー！」

どうにか携帯の画面に焦点を遭あわせると、どうやらどこかのニュースサイトに接続されているようだった。

”今、ドイツ国内の若者達を騒然とさせている怪奇現象、「ラビットホール」。

東西全域で騒がれているこの都市伝説は現在確認された目撃証言でも200件におよび、その実態は完全に謎に包まれている。

警察側は「うわさ話に対する若者達のいき過ぎた反応に過ぎず、熱が冷めれば騒ぎはすぐに収まるだろう」と証言し、あくまで単なる怪談として断定されている模様である。

しかし、この都市伝説絡みで負傷者や行方不明者が出たとも囁かれており、教育機関では、子供の一人歩きや不審者に対する注意が保護者へと投げかけられている。”

「どっつ？」

「だいたいわかった？」

携帯画面から顔を離して、フランツは浮かない顔をする。

「なんかスゴそうなのは分かったけど……これじゃ「ラビットホール」自体が何なのかさっぱり分からないじゃないか。」

「よしレナ、後は俺にまかせろ！」

「このヘタレは一筋縄じゃいかねえ……」

麗奈を押しつけて、今度はロルフがフランツの前に立ちはだかる。

「いいかフランツよく聞けえ！」

「ラビットホールってのはなあ……」

「なんか穴が開いてマジ凄くってそこからだなあほらアレだデカイモンスターがガオオオで通り抜けたら異次元に繋がるとかでなんかもうブラックホールというか次元の歪みというかチョーマジイカしてるぜああ俺も見たかったああ」

「すみません何言ってるのかさっぱりです」

「とはいえ……どうも「異次元に繋がってる穴」みたいなものらしいな……今の話を上手くまとめたら。」

フランチは周りの人混みを見渡してみる。

そういえば確かに、さつきから「ラビットホール」って言葉がそこらかしこから聞こえる気がするけど、

……もしかしてこの人たち、みんなソレ目当てで集まってるのかな……？

”立ち入り禁止”のテープの方を見ると、例のチンピラらしき男の
声が聞こえてきた。

「だから本当なんだよっ

穴からガキが落っこちてきてよぉ……

そしたら……ひ、ヒトガタのバケモンが……ガキをよこせって……

他のやつらみんな、ぶっ殺されて……！

ホントだって、信じてくれよぉ……っ」

「他の二人は気絶してただけだ。

どうせ酔っぱらって幻でもみたんだろう……

ゲームのやり過ぎだ。

ったく、これだから最近の若いもんは……」

心底怯えきった様子の痣だらけの男を、警官がなだめている。

(……なんだろう?)

フランチは、なんだか得体の知れない不安に襲われた。

(人の姿をした、化け物……)

雑踏の中、1時を告げる鐘が、不気味に鳴り響いた。

それを合図にか、同時に電子音のメロディーが聞こえてきた。

「あ、フランスのケータイじゃない？」

「ん」

麗奈の言うとおり、それはフランスの携帯の着信音だった。

（誰からだろ……？）

フランスはポケットから何気なく携帯を取り出す。

そして携帯を開いた彼は、そこに表示された名前を見て、

(……………はあ!?)

目を見開いた……………幽霊でも見たように。

「もっ、もしもし!？」

彼は携帯を耳に当て、食い入るように電話に出た。
聞こえてきたのは、良く聞き慣れた声。

久しぶりの、耳障りな嘲笑。

『あっはははっ！』

よお、久しぶりだな元気してたか』

「……………お前、なのか……………?」

額を冷や汗が流れる。

『そつだよ俺だよ。』

……………なに？

陰気臭いお出迎えだなあ、

2ヶ月ぶりだろうがもっと快く喜べや』

「3ヶ月ぶりだよ。」

お前、今まで何して……」

度々失踪する男からの、久しぶりの連絡。

フランスは言ってやりたい事が山ほどあったが、頭が混乱して上手く口に出せない。

『うん。』

まあアレだな、今まで何してたのかは秘密だけど今いるのはオマエんちのリビングだよ』

「……はあっ!?!」

家宅侵入罪……っていつか鍵はどうしたんだ?

こいつと話していると頭がどうかかなりそうになる……。

「なんで家につ……」

『まあまあそう慌てなさんな、』

面白いお土産置いていってやるから。な?』

お土産……?』

「ねえねえ、さっきから誰とはなしてるのよ?」

袖を引つ張る麗奈をひとまず放置して、フランクは携帯に集中する。

「……………何の事だ」

『それは帰ってからの楽しみだろ。』

あ、んじゃもう切るな？

ルーが遊んでくれってじゃれついてくるんだよ」

「え？

あっおい待て……………」

『ばいばい』

ふざけた口調の音が響いた後、切断中の、ツーツーという音が虚しく耳に残る。

「……………」

「ねえってば……………どうしたの？
顔色悪いわよ？」

麗奈が心配そうにフランツの顔を覗き込む。

「……………帰らなきゃ」

「え？」

「ど、どうしたのよ急に」

焦ったような口調のフランツに麗奈が尋ねる。

そして彼は、苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「……………シュヴァルツが帰ってきた。」

駅の近く、住宅街にある一戸建て。

自分の家に帰ってくると、フランツは開口一番に叫んだ。

「おいつ！」

どういっつもりだ勝手に人ん家に上がり込んで！」

それなりに広い家の中に、声が響く。

返事はない。

「ね、ねえ…ホントに帰ってきたの？」

フランツに続いて玄関に入り、麗奈が聞いた。

「うん…リビングにいるって、さっき電話で…」

急ぎ足で家の奥へ向かうフランツ。

彼がリビングを覗き込むと……

そこには誰もいなかった。

「…もう帰っちゃったのかな」

麗奈が残念そうに呟く。

「…たく…あいつ何考えてんだか…」

はあ…、と大きいため息をつくフランツ。

すると彼の頭にある事がひらめいた。

「あ、そういえばお土産がなんとかって言ってたけど…」

「え？」

お土産!？」

途端に麗奈の顔が明るくなる。

「お土産ー！」

いいじゃん探そうよ、きつとどこかに置いて帰ってるはずだよっ

「あ、うん」

フランツが頷くと、彼女ははしゃぎながら部屋から出て行った。

「あの子の事だから絶対わかりやすい所に置いてないよ！」

フランツはリビング担当ねっ

あたしは寢室をさがすから！」

「え？あ、ちょっと……」

人んちの寢室に勝手に入るなよ……と思いつつ、フランツもリビングを搜索し始める。

麗奈の悲鳴が聞こえたのは、それから数秒後の事だった。

「……きゃあ——————ッッ！……」

「っ！……？」

(な、なんだ?)

驚いて心臓が飛び出しそうになった。

(まさか何かあったんじゃない!?)

急いで寝室に駆け込むと、麗奈が呆然として立っていた。

「ね、レナ!

どうしたの、大丈夫……」

冷や汗をかきながら叫ぶフランツ。
すると、麗奈は手を伸ばして彼の口を勢いよく塞いだ。

「ふがつ……」

「シーツ!

静かにして……起きちゃう」

「むぐ?」

フランツの口に手を当てたまま、彼女は目を輝かせている。その視線の先には……

フランツは目を疑った。

3回ぐらい目を擦ってみた。

古典的だがほつぺたをつねってもみた。しかし……

ベッドの上ですやすや寝ている少女は、なぜだか視界に残ったままだった。

「あ……ありえない……」

夢だ。これはきつと夢に違いない。

自分のベッドの中に、金に近い胡桃色の髪の少女の人形のような本物の少女のような……これはいったいどういうことだ？

「きゃああ……可愛い〜お人形さんみたい……」

麗奈はいつの間にかベッドの横にかがみ込んで、眠る少女の顔をうっとり覗き込んでいる。

さっきの悲鳴って、まさかこつという事か……？

女の子って時々悲鳴の上げドコロがよく分かんない……そんな事を考えながら、フランツはほっと胸を撫で下ろし……

てる場合じゃない！

「な、なにその娘!？」

なんでウチのベッドで……え?え!？」

完全に混乱状態のフ란ツを差し置いて、麗奈は少女の寝顔にすっかり魅了されていた。

「やゝもつ可愛すぎるゝ妹にしたい！

ん……?」

少女の寝息にあわせて、かけられた毛布が規則正しく上下している。その傍ら……少女の胸の位置から少し横にずれたところに、もう一つふくらみが出来ている。しかも、そのふくらみも規則正しく上下しているではないか。

「……?」

麗奈は恐る恐る手をのばして、毛布をはぐってみた。
すると……

「キヤーーーーーーッ……!」

「うわっ!」

「こゝ、今度はなに?」

フランツが我に返ると、麗奈がまた何かを見つけて騒いでいる。

「ふ、フランツ見て見て！」

「じゃんこ、ちっちゃいニャンコ！」

少女の横で、子猫が丸まって眠っていた。

「きゃあー／＼／

もうなんなの？このツーショットは神々しすぎる！

可愛いーちよっとフランツカメラ持ってきてよカメラ！」

「ちよ、レナ？

落ち着いてよ、ホントに起きちゃ……………」

そう言っつて、フランツが少女に視線を戻した時。

「……………あ。」

『う……………んううう……………』

目を擦りながら起き上がった少女は、上半身を起こして、軽く伸びをした。

『ふわぁぁ………』

可愛らしいあくびをして、再び眠そうに目を擦る。

その綺麗な碧い瞳が、フランツの灰色の瞳と視線を合わせた。

それは全てのはじまり。

舞台では、役者が物語を紡ぎ始める。

第25話 ラビットホール（後書き）

やっと出てきましたね主人公。

人ん家でなにしてんだ？

なんだかよくわからないけど、やっとストーリーが「不思議の国編」と繋がってくれそうです。

そしてフランスの受難はつづく！

第26話 はじめまして。(前書き)

……にゃんこを抱く夢をみた。

はい、あいかわらずネコ大好きです。

このあいだも町中で出会ったネコの写真を友達に見せてたら、

「あ、このネコ知ってる！」

っていう人がいたりして……

ネコでつながるコミュニティ。

素敵じゃありませんか。

とまあ無駄話はさておき本編へGO〜！

第26話 はじめまして。

(……誰?)

ふかふかのベッドの上で目覚めた時、あたしはまずそう思った。寝起き一番で目にしたものが、見た事もないアッシュの瞳だったからだ。

(……この人、だれだっけ?)

眠い頭でぼんやりと考えてみる。

(寝ぼけて思い出せないだけだよ……うん、人間って寝起きだと夢と現実がごっちゃになってるって言うし、きっと良く知ってる人だけと今だけ記憶があいまいになってるんだ……うん、きっとそう。たぶんそう。)

そう自分にいい聞かせながら、くしくしと目を擦って、さっきの瞳をもう一度見つめてみた。

(……あ、やっぱり知らない人だ)

だんだん目が覚めてくる。

だんだん状況も分かってきた。

(……………ここ、ドコですか?)

よく見たら自分の部屋じゃないし。

明らかに初対面のお兄さんお姉さんがこっちを凝視してる。

もしかしたら、まだ夢の中?

あゝきつとそうだ。じゃあもう一回寝てみよ。

今度起きた時には自分の部屋に戻ってるかも知れないし。

(…というわけで、おやすみなさい……。)

そんなこんなで、あたしはもういつかい目をつぶった。

一時間後。

「まさか二度寝されるとはねえ……………」

ベッドの傍らで、アリスの寝顔を見つめる少女が一人。
日本から来た留学生、綾崎麗奈である。

「それにしても、なんとも可愛らしいスヤスヤ顔ですなあ」
あどけないアリスの寝顔に、彼女はニヤニヤしっぱなしだった。

一方、別の部屋では……

「おい……どういづつもりなんだ」

フランツは、電話越しの相手に向かってかなりご立腹のようだ。
いつもの温厚な性格はどこへやら、今回ばかりは本気で焦っていた。

帰宅してみたらベッドに知らない女の子が寝てたんだからそりゃ驚
きだろう。

あの童話「三匹のクマ」に出てくるクマ達の心情はだいたいこんな
カンジだったのだろうか？

「あの娘は誰だよ！？」

「っていうかどっから連れてきて……は？」
道に落っこちてたから拾ったって……いやいやダメだからそれ誘拐だ
から！」

電話の相手がよほどのクセ者なのか、フランツはいまにもショート
寸前といった様子だった。

「だいたいなんでウチなんだよ!?
まず警察に届けるでしょ普通……いや面倒くさいとかダメだし。
そういう言い訳は通用しませんし。
お願いだからもう少し大人になつてください……」

今度は半泣きになる。

でもそこは大人のお兄ちゃん。
グツと涙を堪えると、大きく息を吐いた。

「……あゝもう、わかった。

あとはこっちでなんとかするから……

うん。

……そう、あんまり無茶な事ばっかするなよ?

レナが心配するから……」

呟くように言い残して、受話器を置く。

呆れてうんざりしたような声色の会話。

だが……彼の顔には、どこか懐かしむような、やわらかな色が浮かんでいた。

そしてフランクは電話口を後にする。

寝室の前に立つと、大きな音をたてないようにと、ゆっくりドアを開いた。

それに気づいて、ベッドの横にいた麗奈が振り返る。

「……まだ寝てる？」

寝室の中を覗き込み、彼は静かに尋ねた。

「…グツスリだよ…」

彼女も囁き声で返事をした。

麗奈の隣に立って、フランクは改めて少女の顔を眺めてみる。

見たところ、歳は14、5才といったところだろうか。

まだあどけない容貌だが、長く伸びた髪は芸術的なまでの美しさを
持っていた。

幼いながらに美しい。

そんな風に思えたのは、単に見た目がキレイだとかいう理由ではな
くて……

フランクにとって、なぜだかその娘がとても尊い存在に思えたから
なのかもしれない。

…いや、尊い存在と”重なった”と言うべきか。

(背の高さも、ちょうどこのぐらいで……)

そんな考えが頭によぎったが、フランクはすぐにそれを掻き消した。

「…どうかした？」

不思議そうに尋ねる麗奈に、彼は静かに返した。

「なんでもないよ…」

あゝ、それにしてもまいったな。

この娘が目覚まし次第、家に送り返さないと…
親御さんが心配してるだろうし」

「だね…」

ってかこの娘、結局どこから拾ってきたんだって？」

「…あいつは道に落ちてたとか言ってたけど」

眉をひそめて言うと、麗奈はひどく驚いたようだった。

「み、道？」

落ちてたって…それ倒れてたって事でしょ!?

なになにひよっとして家出少女？それともなんかの事件に巻き込まれたとかじゃ…!」

「ちよ、ちよっとレナ声大きい…」

『ふあああああ。』

「あ」

「…起きちゃったわね」

二人が見守る中、少女はゆっくりと体を起こして伸びをした。

眠そうに目を擦ると、部屋の中をゆっくり見渡す。

部屋の右隅から左隅まで、首をひねってぐるりと眺めると、彼女は碧い目をぱちくりさせた。

確かめるようにもう一度部屋を見渡し、今度はフランツと麗奈をしげしげと眺め始めた。

「あ、あの…さ」

まだ半分寝ぼけている様子の少女にフランツが恐る恐る声をかける。

「いきなりで悪いんだけど、名前と電話番号教えてくれるかな？ お家に電話かけて、ご両親に迎えにきて貰わな…」

『…：@ *—————！？』

「…えっ!？」

フランツと麗奈は驚いてひっくり返りそうになった。

突然少女が早口で叫び始めたからだ。

「な、ななななんか言ってる…けど、あの〜コトバ通じてますか？通じてないわよね絶対！」

少女の声だけでもかなり大きいのに、麗奈までパニックって騒ぎ始めた。

「ど、どうすんのフランス？」

この娘外人さんじゃん日本人のあたしに英語ドイツ語だけでなくまだ勉強しろっていうのは少しばかり酷なのではないでしょうか？」

「いやいや落ち着いてようるさ……」

…英語？」

急にフランスの顔が明るくなる。

「ねえレナ」

「ななななに？」

この娘がドコの国の人か分かったの？」

「いや、これ英語だよ」

「…英語？」

大人しくなつた麗奈を見て、彼は頷く。

「早口だったしイキナリだから分からなかったただけだよ。ほら、よく聞いてみれば……」

そう言われてみれば、まったく理解出来ないほどでもない。麗奈は落ち着いて、少女の言っている事に耳を傾けてみた。

「……ど、どうしょ……」

クスリどっかにいつちやった……！

なんで？ちゃんと首から下げてたハズなのに……
ない、ないよお………」

少女は目に涙を溜めて、ベッドの上で何かを探しまわっているようだった。

「……薬っていつてるけど、」

レナずっとこの部屋にいたでしょ？見てない？」

「……うん……あ。」

「心当たりあるの？」

フランスが聞くと、レナはバツの悪そうな顔をして、

「うめ……」

中身がこぼれたらヤバいかな〜とか思っ
て、あたしが取つといたんだつた！」

「……返しなさい」

「あたつ！」

「ちょ、ちよつと〜叩かなくてもいいじゃんつ」

小突かれた頭をさすりながら、麗奈がジャケットのポケットに手を入れる。

中から取り出したのは、透明な液体が入った小瓶だった。

「えと…英語で話しかけないといけないんだよね……」

「一応勉強はしていたが、大学に入って以来それほど付き合いのない英会話。」

必死に記憶を引っ張りだしながら、麗奈は少女に話しかけた。

「え、え〜つと……」

Sorry I don't know this
important medicine .
(ごめんね？大事な薬だったなんて知らなくて)……」

(う〜ぎこちないよ〜！
ドイツ語ばっか使ってたからイングリッシュなんてあんまり思い出
せないし……)

もう冷や汗たらたら麗奈。

ところが、少女は麗奈が小瓶を差し出したのを見ると…

「……あぁっ！それクスリの瓶！」

一気に笑顔になって飛びついてきた。

「わわっ

ちよ、いきなりのハグ！」

「よかつたぁ…

ありがとう！お姉さんが見つつけてくれたんだね」

少女に抱きつかれたまま、硬直する麗奈。

しばらくしてから、彼女はおもむろにフランクを見た。

「……フランク」

「なに？」

第26話 はじめまして。(後書き)

麗奈の喋ってる英語は適当です。

作者が馬鹿なんじゃないよ、あくまでレナが適当に言ってるだけだから！

外国で暮らしてる人って、自分の母国語を忘れてたりしないんでしょか？

ボクなら絶対忘れる。

そもそも他国語を習得できるほどのスペックを持ち合わせてないし。

そのへん言っと、ネコって違う国のネコと会話できるのかなあ？

ネコ語は万国共通なの？

友達に聞いたら「ネコはもういい」って言われました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520j/>

猫とアリスと45口径のメルヘン

2011年10月6日16時00分発行